拾遺和歌集

拾遺和歌集卷第一

春

平さだのぶの家屏風にかきたる

壬生忠峯

抄

春たちぬとやまの野のうすみどりすみてけさみゆるとし

兼平四年中宮の頃しきたる屏風乃

紀文幹々

抄

春霞たちぬるかぜのあをやぎのいとのみだれのたれかくるらん

霞たちかくしたれかゆるすらん

きのふとそうぐいすの春霞かすのうちにてなくこゑ

山邊赤人

冷泉院東宮におはしましける時屏風に

川ぞいにさくらをうえたる所

源重之

吉野山みねのしら雪とけぬらし霞のたちかくるらん

延喜御時月次屏風

素性法師

抄

うぐいすのこゑにさそはれてはるかすみ

天暦御時の歌合に

源順

氷とけぬるかぜのあたたかなるにうぐいすのこゑ

須しらん

平祐挙

サ 春ごとに花の雪とのみ降りかくれば
さくらみつの家の方にて
みつね

サ 春ごとに猶ふる雪と梅の花いづれをかまがへ
題しらず
讀人不知

サ 冬の宿の梅ゆゑ人のいとはるる雪をとや花ごとにみれ
天暦十年三月廿九日内裏歌合に
中納言朝忠 拾遺集

サ 冬ごもりかくれにしかど春来れば
うちとけてぞ人はみるべき

大体家持

百葉 うちきらし雪降りしかば
春立つと
柳本人丸

百 梅の花それとも見えぬ
古 延喜御時宣旨
ひらくとて
けるかき

サ 梅の花ふりにし雪とまがへつつ
同御屏風
みつね

サ 山ざくら雪とのみ見えし梅の花香をたにとめぬ
冷泉院御屏風の
家

サ 梅の花あるかの所にまがふらむ

きしろ所　平兼盛

サ　わが宿の梅のちるをみるにつけ心見へのほどたつこまをろ

　　春院御屏風　　みりれ

サ　かとどもてたれかうむ梅の花やるし霞らるるにくて

　　ちるのすとはけりお春院屏風　　けりゆき

サ　白妙の衣ほすとの山の名のいるるとかうつるつ

　　紀ーす　　八九

あすつるつるつるむこうつる是あるのうるるうやくめる

　　恒佐右大臣の家八屏風

サ　野遊みれいつるの川とるむすしれかきの草ともも花　　貫之

　　園融院御製

サ雜上　春日野はみやしくの年の川にけれど老も思はるる花の

　　紀ーす　　大伴家持

方　ものふのうきしの妻ものあるの人の花

　　おいきるの宮の家日とい人のるるたり

　　けるはいとのみとのおまへるるる花

　　花へみるの紫は寫のるけれ月の月

　　のけるまけ

サ 梅のうへにゐる鶯に花をそ初ねのこゑいとゝ
をしみ侍
ゝてみ侍

サ 五月ばかり野辺にふく梅のかをりを
入道式部卿のみこ
大中臣能宣

サ 今年まてかきねの梅と思ふ
延喜御御屏風
所
梅花まちてかをる袖のうへに
をしみてみ侍

サ 梅花まちてかをる袖のうへに
をしみてみ侍

サ 山ちかくすむ人のいとなみとして
梅花をたをりてみしわすれ
源頼
サ 池にうつしいさわの園の鶯の木ゆゑにちる梅のむれ
万
無部卿元良親王

サ あるはるのおもしろきをみ
みゆきの梅むめのかをり
みゆき

サ 吹風をたれかいとはんむめ花
大中臣能宣

匂をいとふ人こそあらめ梅のむめ
よみ人しらず

ごとすれば風のよるごとに青柳のいと乱れ来る

屏風に　　大中臣能宣

ちるとてうゑもとぬきはの糸ながらうみのうへの月を

ぬしにぞ　　元河内躬恒

サ　青柳のなびくものとてとりのつとてとりてかくる鶯の声

よみ人しらず

サ　むめの花ぬしなしけるとも柳乃いとのしらべにぞ人は

なるる風のうをくれなくなびけるこゝろ東山のこもり

て　　中務

サ　さけいちらぬ山さくら思ひしらずと思花のうへにる

頌　　よみ人しらず

吉野山のもとの人の花の思ひ出

天暦九年内裏三月の会

よみ人しらず

あ　さきちるはよそうきてみむ福寿の白雪ちるみ

ぬしなし

映月のあるしらべて見ん山のさくらをかたらひ

常家万葉集の中

サ　春みるとの野へのすみれ白雪のけぬとまがふ

ぬしなし　　よみ人しらず

サ
よしの山きえせぬ雪とみえつるは峯つゝきさく桜なりけり
天暦御時麗景殿女御と中将更衣と哥合し
侍けるに
清原元輔

少
春霞たちなへたてそ花さかりみてたにあかぬ山のさくらを
平さたふんか家の哥合に
みつね

少
まちいたる花をみてこそ思ひつる心のとけきはへあらしれ
賀の屏風に
藤原与景

さきそめていく世へぬらん桜花色をは人にあかすみせけり

天暦の時の屏風
よしみ

サ
春くれはまつうちみつる池水のとめけるもちなし山田か代に
題しらす
在原元方

サ
春ふかみ山田のこほりうちとけて人の心にまかするそ楽
承平四年中宮の賀し侍ける時の屏風に
斎宮内侍

少
春の田を人にまかせて我はたゝ花に心をつくるころかな
宰相中将敦忠朝臣家屏風に
つらゆき

少
あたなれとさくらのみこそ故里の昔なからの物にはありけれ
斎院屏風に山みちゆく人ある所
伊勢

サ
ちりはすゝなる所しきちるてのもみちくさへ人もあるかな

題しらず　　よみ人しらず

サ
桜かり雨はふりきぬおなしくはぬるとも花のかけにかくれむ

もとすけ

サ
とふ人もなしと思ひし山里に花のたよりに人めみるかな

円融院御時三尺の屏風に

平兼盛

花の木をうへしもしるく春くれは我やとすきてゆく人そなき

題しらず　　よみ人しらず

サ
桜色に我身はふかくなりぬらむ心にしめて花をおしめは

権中納言義懐家のさくらの花おしむ歌よませ侍りけるに

藤原長能

か
身にかへてあやなく花をおしむかないけらはのちの春もこそあれ

題しらず　　よみ人しらず

みちとせになるてふもゝのさかりよりへつゝ為精なりての花やちりける

古郷の霞とひわけゆく雁は旅の空にや春をくらさむ

天暦御時屏風に　　藤原清正

サ
ちりつもるもみちの時はすゝのゝ風まつ君見みしてのこらなむ

題しらず　　よみ人しらず

サ
けふやしもまたてちるは桜もいけらん人にわかれやするかな

屏風に

サ 散りしかばみすてゝかへるあだ桜 まりも

詠しゝ よみ人しらず

みとせをへだてゝおなじ人ちりぬるに花のもとにたてる

延喜御時藤壺の女御母合せるに

サ 朝とにわかちて宿の庭にうゑたる桜を植てうし

あれもてゝ人しも侍らぬ家に桜乃

こゝろをたゝ侍ぬ

恵慶法師

サ 流れ来る思ひもかけぬ宿の桜花四やとゝ風にちるゝ春

きゝ乃宮の屏風に

貫之

サ 春ゆゝしく思ひおもふを桜むちるまで雪ふる

亭子院母合に

サ 桜ちる木乃下風はあらねとも雪乃ふる

詠 よみ人しらず

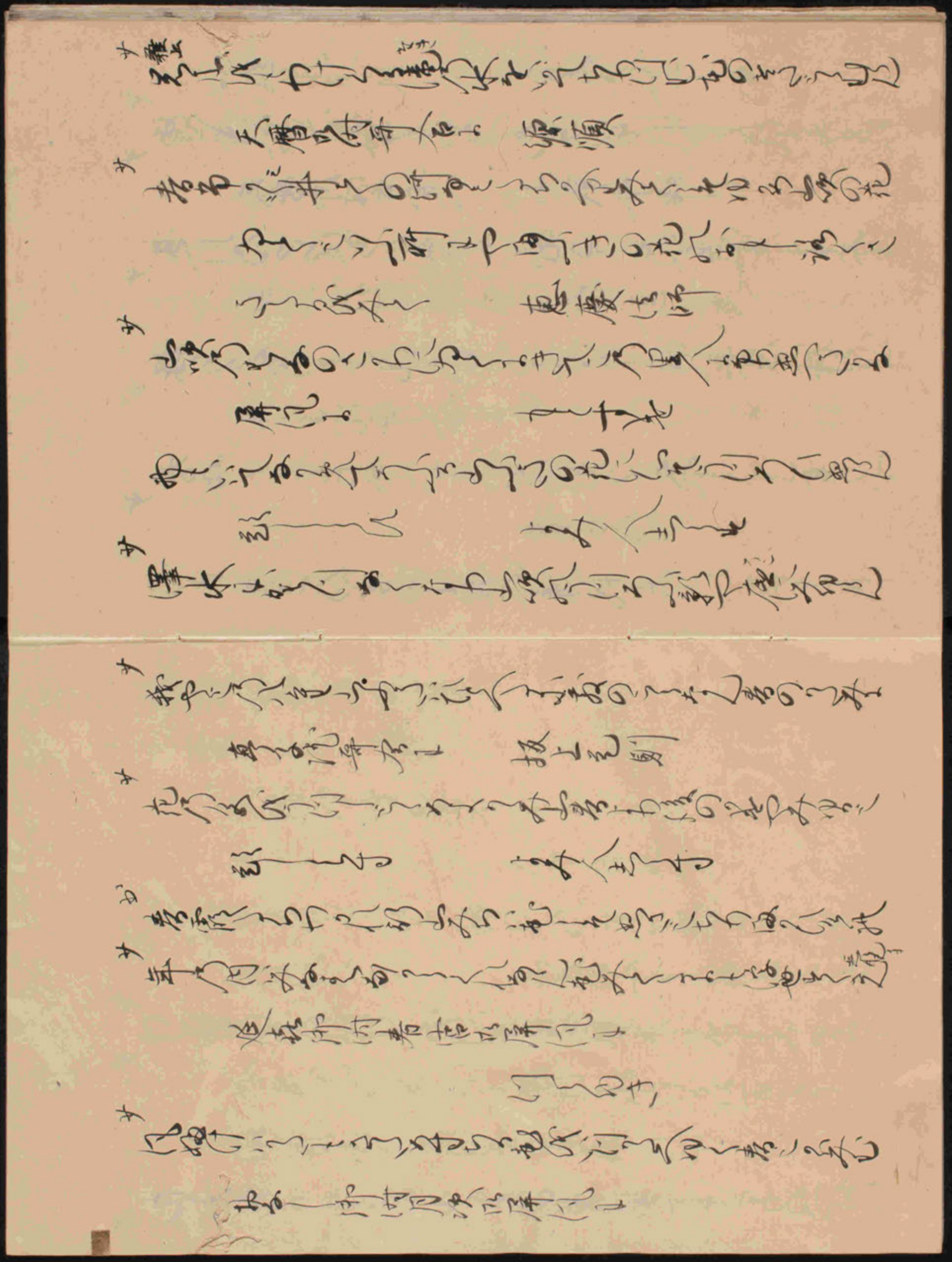
サ 見る人乃心にしあらさるむきとの雪ふるみる

天暦御時三合に

小貳命婦

サ 雪乃花ちるくれなゐの花とこそ

詠 よみ人しらず



花ちるさとの春の夕ぐれ

同三月尽けるに

みけ孫

けふ孫ちるものとけるに書なれば

ふのくるかすみすうをけり

拾遺和歌集巻第二

夏

天暦御時の三の会に　大中臣能宣

なく蝉のこゑすまるゆふぐれ蝉のこゑすまるゆふぐれ夜ふかうなる

扇風に

ちるとふ

わの宿りの夏はやうぬけぬ夏はやうぬけぬ夏はやうぬけぬ

冷泉院の東宮におはしましける時百首歌

ちまりはぐくみたれい

源重之

廿

花乃ゆきのうつりゆくをみてよめる

夏乃月ゆきてはとまるかたもなし

夏乃月ゆきてはとまるかたもなし

廿

盛明のみこ

むちるとしいとしめるかけ衣きしやとうるをなかし

百ゝ三の中ゝ

しをゆく

廿雜上

友ゝとして咲ゝるはけ紙後のむかしとおもひしるる

園融院御所の屏風に

平かね

すみよし乃屋の後ゝつの宿の松の木すゑに咲ゝし

しをゝる

地蔵乃後ゝ松に木ゝ高ゝかくれ

延喜御所の歌合ゝ藤花宴

小野宮家大臣

廿雜上

うすくこくみどりなる後の花をゝ

紅ゝ

みしら

白ゝ地に紅ゝ

みしら

そこのゝ乃後むをみて

柳本人丸

廿

ゝ乃浦のゝとゝ人ゝ乃後浪をかけてゆゝみ西人のゝ

山里乃卯花ゝ

馬のたゝ乃ゝ

サ　う乃花とちるう梅と白ゐて夏のうゑ初ゐ鶯のなゐ

彩しうす　　よみ人しらす

サ　郭公乃さけるかきゐ白ゐみちのくゐ白ゐ花の鳴の浪うゑ

延喜御時月次の屏風に

みゐ初

サ　秋ゐ川ゐう月ゐさけるゐ卯の花ゐ白くゐときゐ初ゐ上ゐ波ゐ

ゐ川ゐのき

秋ゐ白ゐ川ゐうゐ乃花ゐ白ゐ白ゐのみゐくゐうゐあゐう乃

彩しうす　　よみ人しらす

山ゐ乃ゐ乃ゐ初ゐさけゐう卯花ゐ白ゐ白ゐの衣ゐをゐて

後撰

時わ乃ゐ白ゐ白ゐ雪ゐとみゐまゐてよかなゐねゐとゐいはゐさけゐみゐ

ゐ乃ゐてきゐ白ゐこゐとゐゐ田ゐの山ゐ郭公鳥をゐく鳴ゐ白

サ　ゐ川ゐ郭公のきゐ白ゐ白ゐ郭公鳥ゐう乃ゐ白ゐとゐう川ゐ白ゐ

夏山ゐ白ゐこゐて　　久米廣縄

サ　いへゐきゐてゐ白ゐ乃ゐ白ゐ白ゐ川ゐ白ゐのゐま郭公鳥一ゐ乃ゐ白ゐ

延喜御時の屏風に

川ゐ白ゐき

山里ゐ白ゐ白ゐ人ゐ白ゐ乃ゐ白ゐ白ゐよゐ白ゐ白ゐ思ゐ白ゐ白ゐ川ゐ白ゐ白ゐ

彩しうす　　よみ人しらす

サ

山里にやうきうとい（熟乙）ほ鳥よく人たちとまる所

天暦御時歌合に

坂上是城

琴聲

なりたつ鳴りてうちなる（熟乙）ほ鳥なるこゑ川なる人の初音

平兼盛

サ

みやまさくらやまのやきゝ川なる（熟乙）ほ鳥焼けてこゑのうこゆる

寛和二年内裏三の合に

右大将道綱母

サ

都人待つぬ川べの引ゝよ岩人うつを時て川なる（ヨキ）

女四の宮の歌合の歌

サ

山里に人ゝ人ゝとなりきゝはまりもの鳥ゝ社のうゝよく

天暦御時の歌合に

坂上是則

サ

さゝなみ行くゝ社さゝ鳥ゝ郭ゝ人ゝ行くゝにきゝゝ人ゝ

はるゝ御時の内屏風に

壬生忠見

伊勢

後撰

なつ衣きてこゝにゝ引ゝきゝ寄ゝ人ゝ

小家のもゝ内屏風に

源之土朝臣

サ

[illegible]

敷たる朝臣の家の屏風に

けしき

サ

[illegible]

延喜御時屏風に

よみ人しらず

サ

[illegible]

屏風に

大中臣能宣

サ

きのふとくるやうにいりしやめの草をかりてやどのいけとみれば

よみ人しらず

[illegible]

[illegible]

延喜御製

サ

是貞の親王の家の歌合のとき

よみ人しらず

サ

[illegible]

天暦御時の屏風に

[illegible]

[illegible]

壬生忠見

サ

[illegible]

小野宮大臣家の屏風に

[illegible]

ほとゝぎすなくあやめ

サ かのこにもゆこきまぜよほそ道にゆくかはらの人のうちとけ

ちゝ父の家の幸合に

みかり林

うりこすもちのへやなかりうるにこらしたるみのさゝ飛

郭公

よみ人しらず

サ なけやたゝ雨の山の山乃引くまに寺おの石川白に移るおもて

五月雨いとそ行く飛ぶ時鳥鳴くなる人の伝へて

うそ人おとゝあり

サ 廿隻上 大体坂上郎女

下 郭公ほとゝぎすのこゑ

中務

夏乃よのもゝ代しら時鳥なくなる人あけとて

サ なかりよりうつるもこゑやはるくあけくやの臣

地兵部卿宮

春宮にさゝいけ

よみ人しらず

なかく飛りの草山のほとゝぎすこゑ

春宮にさゝいけ

ほとゝぎすもとゝ山日郭公

藤原實方朝臣

月やどりの山のふもとに鳴かはる
ほとゝぎす　よみ人しらず

ほとゝぎす鳴やさつきの水かけぐさ　無名しらず
西宮左大臣の家屏風に　源順

郭公まち出でてやすらへ山の端のかすむ心
延喜御時月次屏風に　凡河内躬恒

さつきやみ木のしたやみにこゆ人の袖のしらつゆ
九条右大臣家乃賀の屏風に　平兼盛

あやめくさ軒のつまにぞ見えそめし山にはやきぬ
女四乃みこの家の屏風に　みつね

ゆく末遠いまるこの夏山の木ぬれをぬけてちらすうぐひす
延喜御時内屏風に　ゆきつね

夏山乃ゆきけをぬけてほのみゆる人もとゝまる
河原院のいけにすみ侍て　恵慶法師

サ

わかをとこの水をはなれあけて夏のころ年ごろかけるを
家にさうれて侍けるをとこをとのりけるを
けう　伊勢

とりどりにはなちすてしかりのやまとなでしこはなをしみきは
ちるをみる

サ

うつきをみるうつけのうたにはかきつるん　藤原長能

サ

さうのうへのふるうつのとうへのうつけ
讀人不知

よみちをすうるまるんをとうやまの焼ほしの名にも有紙

右大将定國四十賀に内よりの屏風にてうしてめ
まんけうう　うみ孫

サ

おくあうるうたちの草しをとあくて
かうくと夏のうりはしる

拾遺和歌集卷第三

恋

恋乃りをしたにしみ侘けり

安法法師

サ

なに夜まで忍ぶの草のうらはにて人を恋ぶる

頼しなす

よみ人しらず

恋いふる山ほとゝぎすのこゑ聞てあさ寝をすなる

延喜御時内裏にて

けんのき

サ

我乃衣ぬれぬと音しなく恋ゝの人ふしてゝ初なるゆゑ

河原院にて宿に恋まらうどして家人〳〵

よみ侍けるに

恵慶法師

サ

やどしらぬ山ぢの月の宿のゑにしるふ人ぞ恋しき

安貴王

少

万恋しらでいくらもあらじとおもふの命ぞ恋ひしき

延喜御時内裏にて

みつね

ひかりのいまだ待ちえぬの恋ゝ我さへ人をさ

けんのき

秋風にしのぶの草のしをれぬれば人の目ぞ見ぬ

万 歌しる

万 あまの川ふねこぎてるあまのはしたちてとしのくれぬる

万 天川こゑもとどろにあきかぜのふけばなみ人ゝ

よみ人しらず

こゝろはけふもあまの川ふねこぎてみるふなたゝきやつてゝ

万 ひさかたの月の中なるかつらもみちはてゝのちはけふをへ

陽原ゝ

サ 年にありて一度ぞきたるあひかたりてうんやう

人まろ

延喜御時月次の屏風ゝ

サ 織女ゝ思ひやりしらくもはたてゝ神やまつらん

同ゝ

右衛門督源清蔭家の屏風に

サ ひさかたの一度ぞきたるのちはいつ人秋の限りなるらん

左兵衛督藤原懐平家屏風ゝ

恵慶法師

サ いまこそはすくるつきひは七夕ののちの秋をおもふなりけり

七夕庚申にあらぬ夜ゝ

サ いまこそはなるこゝろぶかのつゆのあはれをとはるゝ

ゝすけ

題しらず　　よみ人しらず

あしみてとあてるしく御女ふりの心のごけうを色さ
わつのうまいたじいうあまの時をよの言葉をとをうを
君こすい雄しみをう我やとかきなかさけう朝くれの花

女郎むみくうの野へ月うるすうしいたとてまうを屋
ちとをゆくうくしとうくを女郎むを少へ花うやうを西ふ

小野宮右大臣

くらるしの色をうをのしをるへしめていしへうるる
とみるへしみくうさけう家にまうて
よしのう

女郎花うりあうちしいうれあやるくをやまうるを屋
題しらず　　よみ人しらず

白露のとくいしすうをうるへしるいうしへをを花
清姫のお歌ほううを雨うて

藤原長柄

月くしいみ秋をあの西女郎花野へまやをへ孫の上屋は
八月ちうにうの乃をうをうをいみ侍に

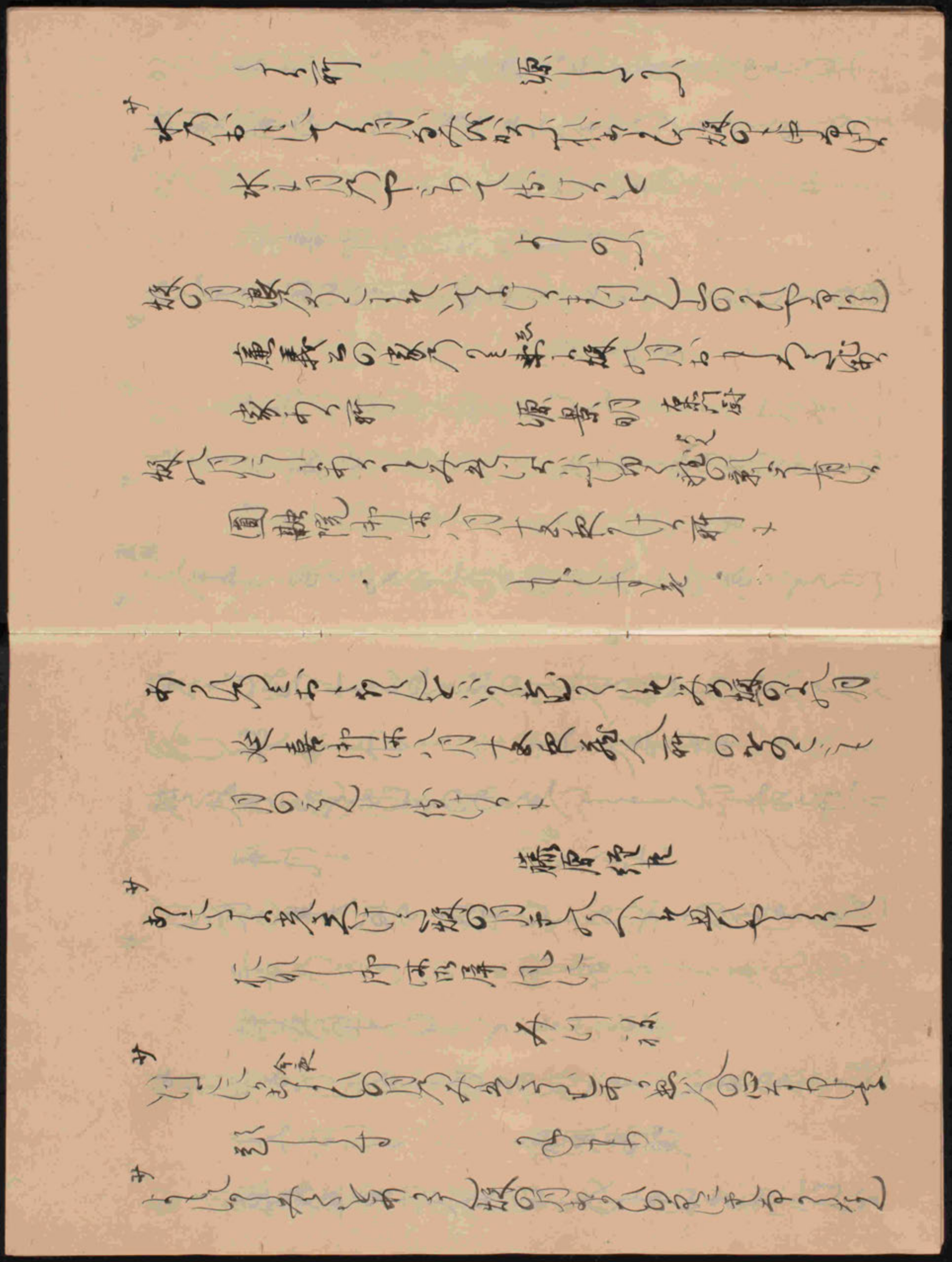
恵慶法師

萩乃葉しやうちうをうをを秋をなるを屋の上のをを屋
春流屏風に　　よみ人しらず

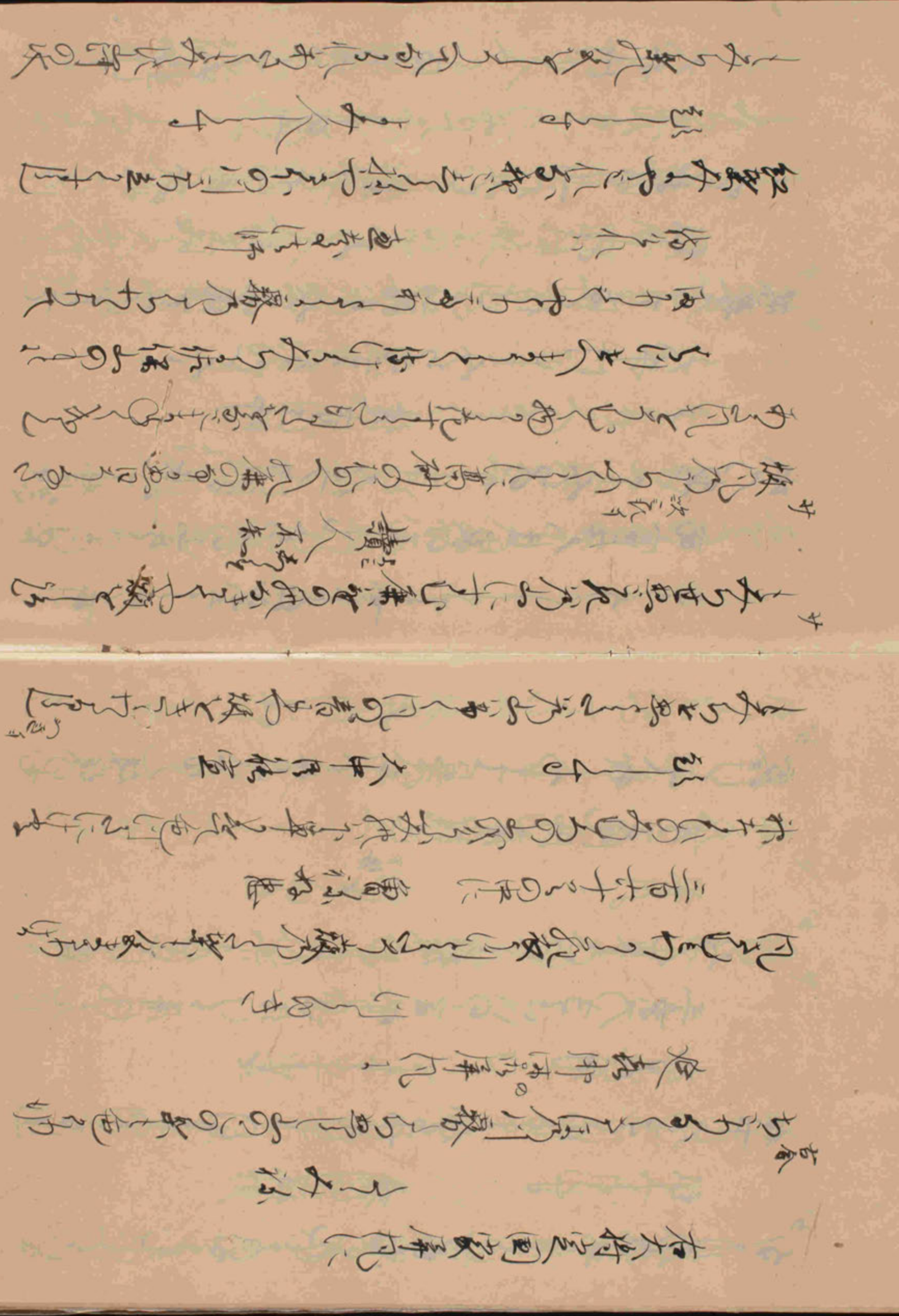
かりに行くとて、ひけるを、坂の野乃花みるれに、ひとくれ思へ
る　しる
坂乃野のとるかるてをみるにしるのをとこ人のおもふ
紀貫之

うるはしやわれぎりに花ぞ女郎花みるゝ心ゝ思ひけりとも思ふ
陽成院御屏風にこゝみのかりしる所
かり乃ゝ人のみるをみるに花のをりて家を分
寄る院乃おまへにお歌うたを作るとて
よみたりをしわりけれい
伊勢

うへ乃ゝ君ゝ乃ゝ花乃れいをみてや家をそこ
流撰　る　しる
よみ人しらず
おもしろし坂なるけれ乃きゝ乃ゝ
ゆ乃ゝ乃ゝ
大貳高遠
あふさか乃関のいとゝ乃ゝ
ゆきもしらぬ乃ゝ
ちゝ乃ゝ
ゝ乃駒
延喜御屏風に
いとゝゝき
相坂乃関の水に影みえて今やひくらん
屏風に八月十五夜池ある家に人あつまり



廉義公家にて草むらの虫といふ題を
よみ侍りける　藤原為頼
おほつかないつこなるらむ虫の音をたつねは草の露やみたれむ
前栽にすゝむしをはなち侍りて
伊勢
いつこにも草乃枕をすゝ虫はこゝをたひともおもはさらなむ
屏風に
つらゆき
荻の葉のそよくをとこそ秋風の人にしらるゝはしめなりけれ
題しらす
よみ人しらす
荻の葉に風やすきゝ思ふ[illegible]の[illegible]のあはれまさる
みつね
露けくて我ころもてはぬれぬとも折てをゆかむ萩の花
亭子院御屏風に
伊勢
うつろはむことたにおしき萩をおれぬはかりもおける露かな
三条のきさいの宮にはへりける屏風に九月
九日の所
もとすけ
我やとの菊のしら露けふことにいく世つもりて淵となるらむ
題しらす
みつね
なか月の九日ことにつむ菊の花もかひなく老にけるかな



大井河に人くゝ由うちてうみ侍けるに

よりの

しみち業ふかくはみむくれはとてのの山に名のこさしく

よみ人しらず

サ 嵯峨乃とゝ由くれはの山路にしみちの錦をしきわて

大井河にしみちのかりをみく

健守法師

水乃あやにしみちのかりかゝ様つ河はの浪ふ也日暮

西宮左大臣家の屏風に志つの山にくれかゝ

ゝるゝ也心と紅葉たるゝ前と

名をきけ昔ゝ乃山かゝ様ゝ嵯峨遍ゝ

東山に紅葉みるまゝ

まゝ入るゝ

恵慶法師

サ きのふまでゝ紅葉乃ゝ中の名をいそ

天暦御時歌合の

歌乃ゝけるに

源延光朝臣 大納言

みち業ゝ色ゝ

源兼光 三位不見 大和物語 景明文

枝をうつみてをかへる紅葉ぶねにちりとまれる

彩しらす　帝つねな

河春乃ふもとをめてしら雲のうすく霞みてけり

ちくふしまにまうてゝ侍けるほとゝぎすの音を

ちりぬる花いとゝ惜しく　法橋觀教　後大宮殿　監番

水うきに燈乃山邊をこゆるかりのこゑ

二条大后の栗田乃山さとの障るの花に宴人

人とゝもにまうでゝやうなる所

いまちりぬるやうにやとゝ惜しく旅の日数へ也

恵慶法師

よみ人しらす

彩しらす

ふる人と今はのしるしの風ふきぬるかは

延喜御時中宮の屏風に　つるゝ

ちりぬるゝ山乃ゝ桜春のやすらひ花ゝ

彩しらす

僧正遍昭

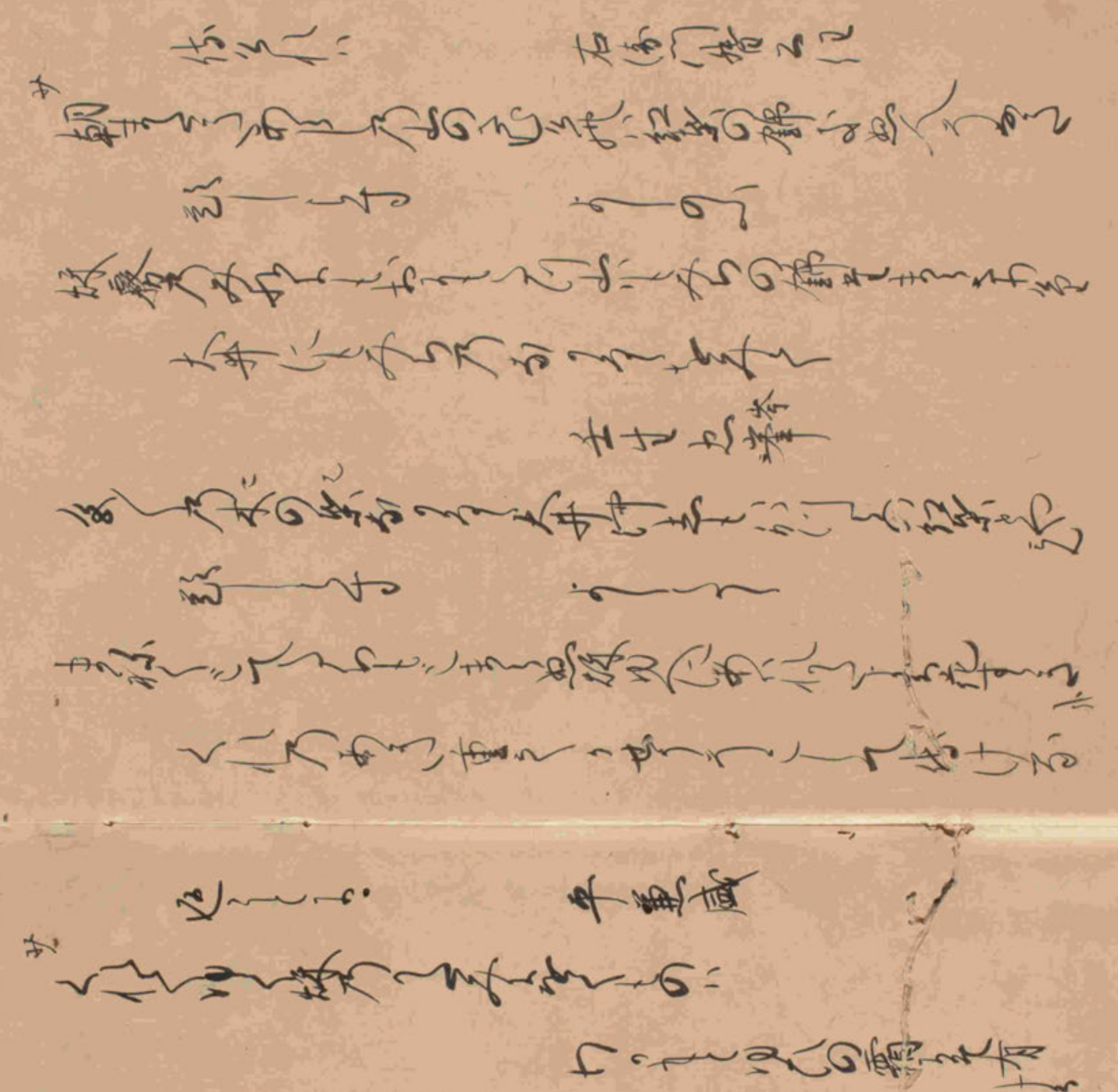
桜乃わしのこゑをうつゝ木乃葉もて桜ゝ

けるかき

桜乃ゝ雨ゝ来てふるゝの風ゝ紅葉ちる

かゝくちむしるゝ井ゝるゝ紅葉に風のゝ

嵐の山乃ゝをまりけるにゝみちへゝちり



拾遺和歌集卷第四

冬

延喜御時内侍乃つぼの賀の屏風に

紀貫之

サ　ゆきのうちにくれなゐにほふはなのいろをたれかそめしと人のとはまし

寛和二年清涼殿のみすにかきたりしに

よみ人しらず

サ　ゆきのうちにさきのこりたるはなのいろをたれかそめしと人のとはまし

サ　ゆきのうちにくれなゐにほふはなのいろをたれかそめしと人のとはまし

續人不知

奈良乃みかど龍田川に紅葉御らんしに幸

ありけるときにつかはしてにけるまきもの

柿本人丸

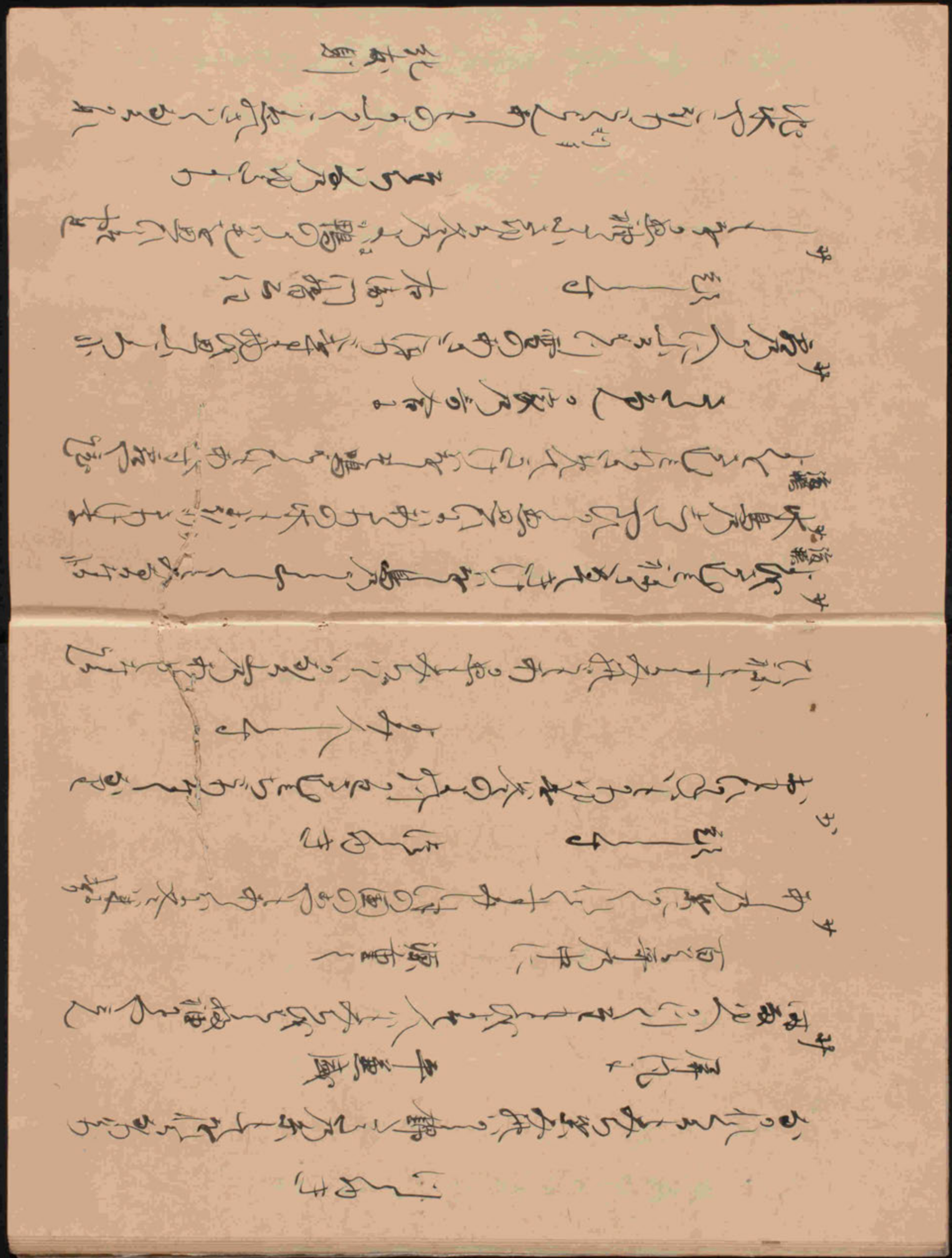
サ　たつたがはもみぢ葉ながるるかみなびのもりのしたつゆしぐれなりけり

ちりのこるもみぢはなにもまがへてみるばかりなりけり

僧正遍昭

サ　ちはやぶるかみのいがきにしるしをしてとこよのかぜもこのはふきけり

延喜御時女四宮乃みこの家乃屏風に



[illegible]

よみ人しらず

サ 水のうへにすみわたりぬる冬のつきかげ神のあそび有けり

屏風に

平兼盛

サ 雪ふりしよりのちとけぬみれどなほ冬ごもりせり

よみ人しらず

サ 冬ごもりこもれる水のうへにのみ流れてとけぬ恋をする哉

恒徳公家の屏風

よしのぶ

冬ごもりあるとの山の高砂の松ふりにてそとけぬ恋する

サ 冬ごもりこもれる水のうへにのみ流れてとけぬ恋をする哉

紀友則

サ 夕されば山の井の水に氷ゐて冬の月影にくもりぬるかな

春

人まろ

南ちかく雪ふりつもりて浪のすゑの山吉野のよしのみく

廉義公家障子

たにもとけぬ

サ 冬のこのぬしのみくもりけり月のかつらのみくもりけり

よみ人しらず

サ 山の池の氷にとけぬ月のそこに入る春

月をみてよめる　慈慶法師

あまの原ふもとの里はしらねども冬のよの月
初雪とよめる　源景明

都にてふりしぐれしを雪ふりぬ吉野の山は
あらしこそふけ　伊勢

物思へばけぬるかとみゆる雪の山ゆくへ
山あらしの雪ふりてふけり　伊勢

あしびきの山ぢ白雪ふりぬる夜の月かな
貫之

冬月
冬月の屏風に
ふるさとの花の白雪
ふりにけり　貫之

わが宿の雪の白雪
ふるのみ山ぢやまとの
屏風の白山ふりて
ふりにけり　藤原忠房　従四位上右中将
　　兼近江権守

わたりかねて山路にまどふ
ふりにけり　貫之

年ぬしの山ぢ白雪ふりて
ふるさとの雪ふりて

入道摂政乃家の屏風に

かねより

みちをいそぎ　ゆき　の　山　の　ゆく　世　に　ふる　雪　の　うえ

山里の雪ふかしみち道もなし　人とわれこそ　人まち

あり　ゆき　の　路　と　ふ　人　の　枝　に　さ　に　雪　の　ふる

右大将宗国家乃屏風に

春

白雪乃ふりしくみちのゆきの　ゆき　の　ふる　花　ちる

冷泉院御時乃屏風に

かねより

ひさしかるべきもちゆきの　ゆき　の　ふる　宿　に　ふる　白雪

屏風に　　よ　り　乃　ふ

あしたき　ゆき　の　ふる　ゆ　ゆ　の　ゆ　ゆ　年　ゆ　雪　ゆ

右衛門督公任

梅　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　雪　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

屏風乃ゑに佛名の所

よ　り　乃　ふ

おきあ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

定家卿詠乃屏風ニ

ゆきのあさ

年乃うちにつもりけるとしのしらゆきとこの屏風の侍る佛名乃あるあに梅ハなのもとに

導師こゆるしこうをとりてわれみみ

ふるの

雪ふる山路をたづねてかつ見つ梅ハ花ごとまた

屏風乃ゑ小佛名の所

人ふるをうやすむ心をくゆ年乃うちに雪こそ

かねもち

一

春院乃御屏風ニ十二月ノこもりの歌

かぞふれハ月乃ゆくへハ迷ひぬらん

百ゝ春乃中に

源重之

ゆくとしをのこりなく春ハ

春ハあすきてうつる

拾遺和歌集巻第五

賀

天暦御時屏風のうたとて
使ひとなりてまゐりけるに
長奉送

中納言朝忠

サ

ちよのためしにかけてふる雪を行末とおもふ人ぞ
ちらさぬ野に春に男使ひとなりてまゐりけ
るに

大中臣能宣

サ

ちはやふる野の松原の枝しげみ世にもちらぬ
にほひなりけり

大嘗會の哥

よみ人しらず

かすが野のむのとをにすむ雉のちらぬ限代の
贈皇后宮の御うたやの七夕に兼盛卿致平の
みこのきさいのみやにまゐりたまへりける哥

清原元輔

をりをりにかけ
サ

初春のはつねの日の子の日の松
藤氏のうぢやにまゐりて

よしのぶ

サ

春ごとにちるのをしらぬ春日山木ぬれをかぞ
うぢやの七夕に

ザ

君のへんやを萬代をかけ[illegible]

右大將藤原實資うしやの七夕よ

平ゝもち

[illegible]

わろうへのふやにまうく

ちらせこと數いろくさ世中にかきりなる身で人とし[illegible]

藤原誠信元服しかけるやよみける

源順

ザ

花ゆへ[illegible]

みち乃ゆきをそうかとしかけるよ

ゆしうしるとりもしゆへのこ紫衣のゆうに川れこう西

天曆のみし四十に[illegible]おりようけるよ山階

てゝ[illegible]金泥壽命經四十八卷とうこ倍養

[illegible]

[illegible]

乃年わてゝ[illegible]をる中に

ザ

[illegible]

[illegible]

仲算法師

ザ 賀をうけてみちの乃山のうとよりうたうあるべきのうた

兼平四年中宮の賀しはべりける時の屏風に

ザ 色うへぬ松にはべるのすゑの世にいれたてこそ君のちとせ

はるの賀にはべりける松にはべりける

大中臣頼基

ザ 一ゆしにのぶをこそうる松なれはいくとしかよはいの

清慎公五十の賀しはべりける時の屏風に

ザ 君の世にはべりけるとしのはじめにあるべき

青柳乃みどりのいとにちりのあをへやどる

ザ 四の宿にさけちさてのはなとちりちるをみるとあるうた

はるの人の七十賀しはべりける行の枝をけ

ザ 君うるはるきてはべりけるとしをもうつる

ザ くるのやまはるにいけるいまはるにはべりけるとしの

一條摂政中将にはべりける父の大臣乃四十

賀しはべりける屏風

サ

吹風にうつろふみちの教くれば花のうへなるものはけさ

梅中納言敦忠母乃賀しはけるよ

サ

百代ともかぎりてあるものを君ぞかきちるかけれも

藤内侍乃つぼの賀民部卿清実しはけるよ

源忠朝臣

サ

春くれば花ちるものを思ふ心ゆゑにかけてるふ

伊勢

サ

春の野乃わかなにあれぬ君ぞ千年のうへをもしるこそ

天徳三年内裏の花宴をるをしけるふ

九条右大臣

サ

さくら花ちるかとのみいふるものを春をしをつめ

ゆゑ

よみ人しらず

カ

かりみつちるを春をすくすとかりの花のゆゑにあるこそ

寄る花の名

みつね

サ

ちるをしらるるものとふる乃ちる花を春にあらるるふ

康保三年内裏の日をるを紅けるる歌上

乃なのこと和哥けるるよりけるよ

藤原乃ふる

サ

ちるとしらるる世乃りゆくの花のゆゑにまりふをそ

行

小野宮家大臣家より祝のしをおくりたるに
ひらけたりける梅をみ侍りける
三条右大臣 廉義ち

サ 行末とをる日乃梅のうめ乃花
遅咲御堂乃屏風に

けるゆき

サ 能上 梅乃花ちるとみるまでおもかけに
ゆきとぞ見まし

よみ人しらず

サ みな月のつごもりのころ人ちらせる
兼平四年中宮の賀し侍ける屏風に

参議伊衡

サ うゑおきし花ぞ千代ふる祈りける
天暦御時お新のうへとうぶ侍ける時

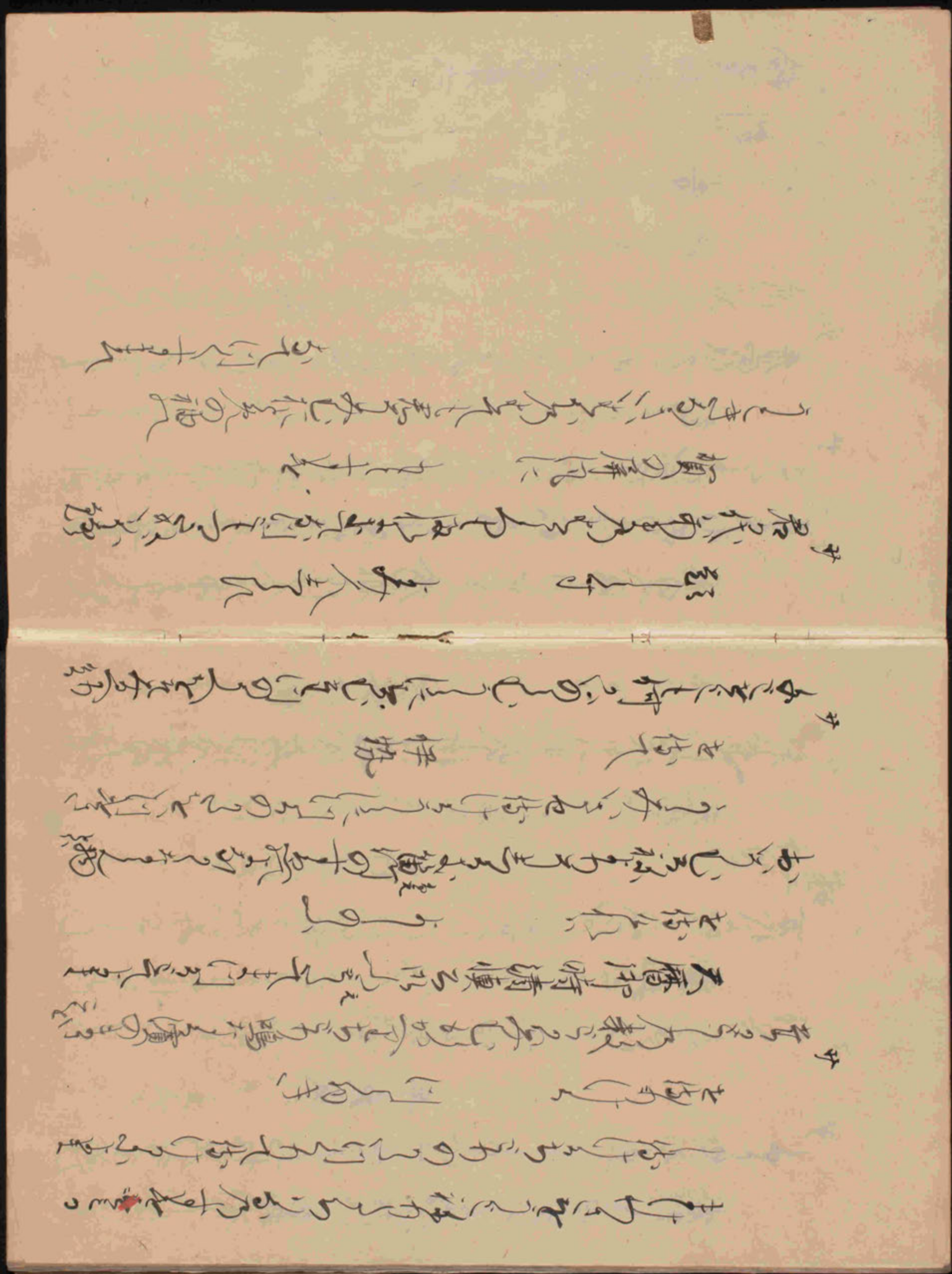
小野宮右大臣

サ 万代乃かゝれる花乃ゑだに
廉義ち家ものくらゝ寄とも侍るに

くらしける中のとしの春とは

平兼盛

サ みちもせにうゑしこゝろ乃ゆきにこそ
右大臣源のひろ乃家にお新令し侍ける



拾遺和歌集巻第六

別

春ちかへまちわたる人おのがいへにさきちりけり
所もくさまちがけるへのよみがけり

よみ人しらず

春霞たなのうちをみるに心ぞ見るりぬへらなり
さくら花霞ふかれしかはみれはかすみ
ちるむかしをしのぶるはまそうしまるわるへらやこまる
ものはなかりしに人こゆるかな

貫之のよしこ

屋のうちのへるいきけいわのいたち雪井ちるに思ふちるを
天暦御時小貳令婦豊前に返りかけ侍
大きに所ちくに餞をしかけをかけをまし
らて

御製

かりそめにちりるへらまをいとにまをいとにまをいとにまをいとにまを
よみ人しらず

わすれぬる別路に年の葛の秋風吹くなるかな
ちのしたもとに雖ふるとも猶ごとにすゑ
ほしもあれ物しらぬ人のちりをもとめけり

天暦御時九月十五日斎宮くるまにおけるに
御製　斎宮暦皇女　計子内親王　康明女

サ　君がたをかの月うらにたなびきて
十月ちるはにとまるかな

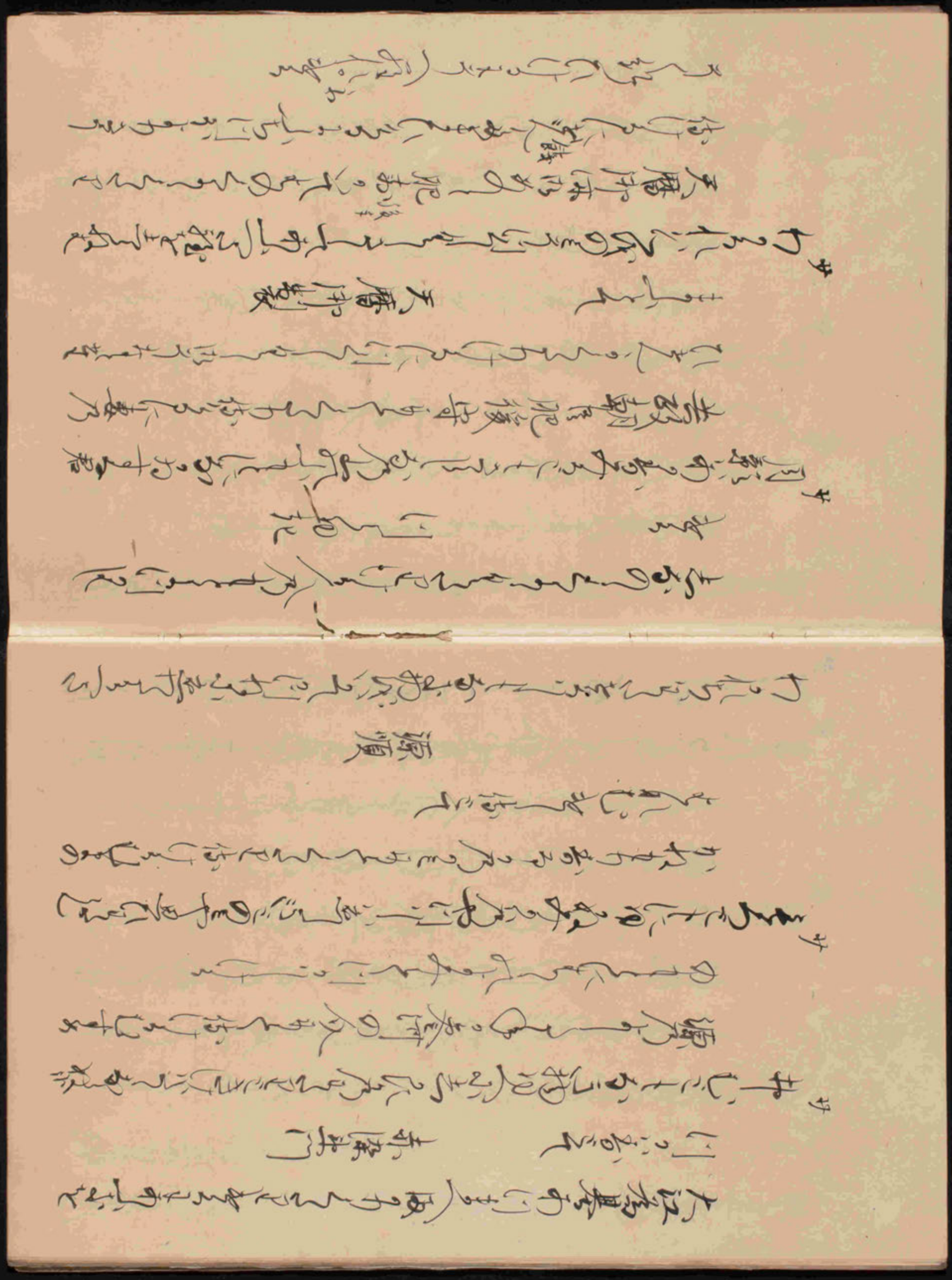
露ちるにわくらしぬれし人しも所なくなりぬけり
袖のまがりけるに心まのいるむけしおてあ
きけるけり　よしのぶ

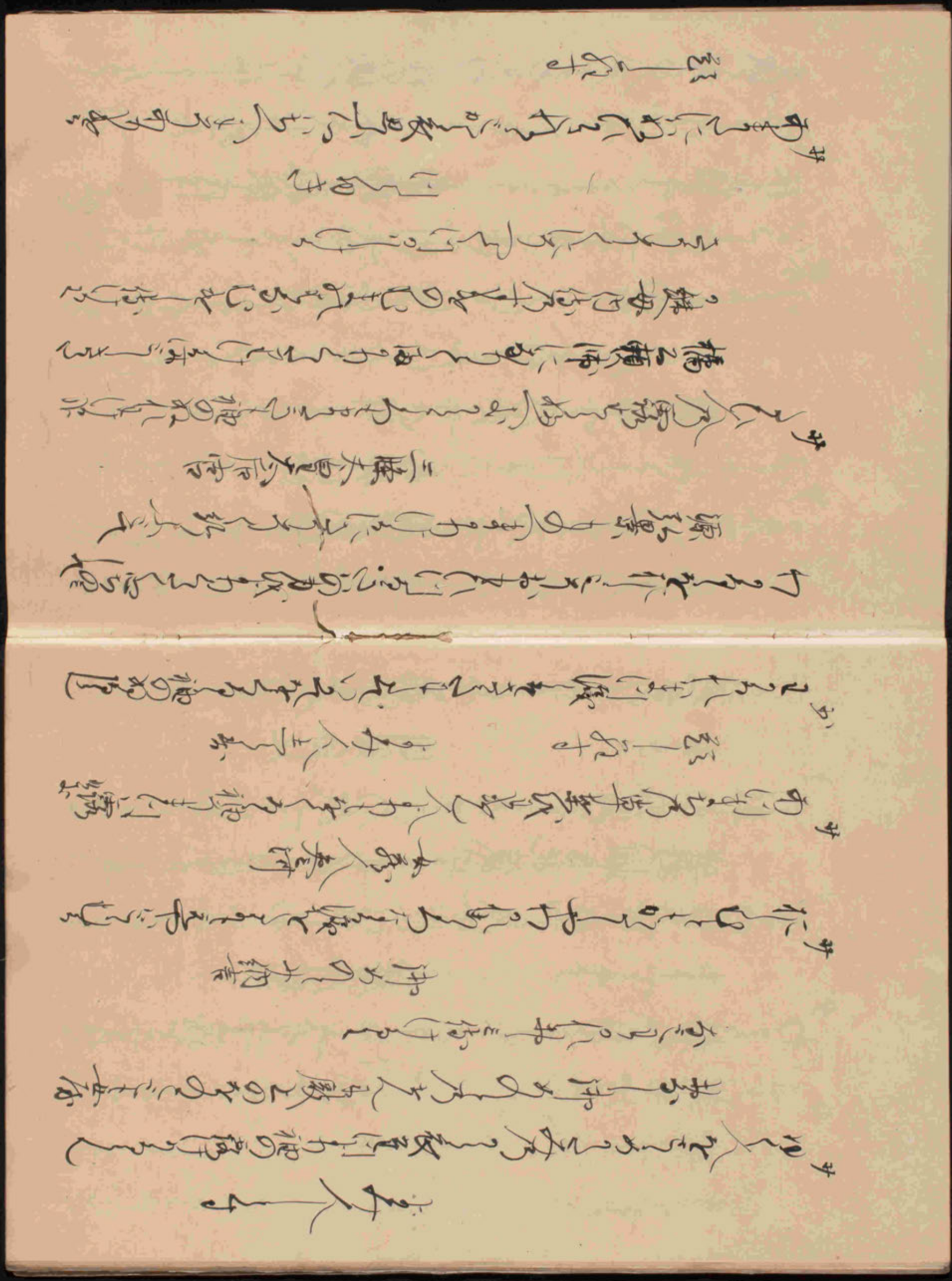
ちるはにしてうらにそのそまにそ所なくなりぬ
ぬしなきあす　よみ人しらず

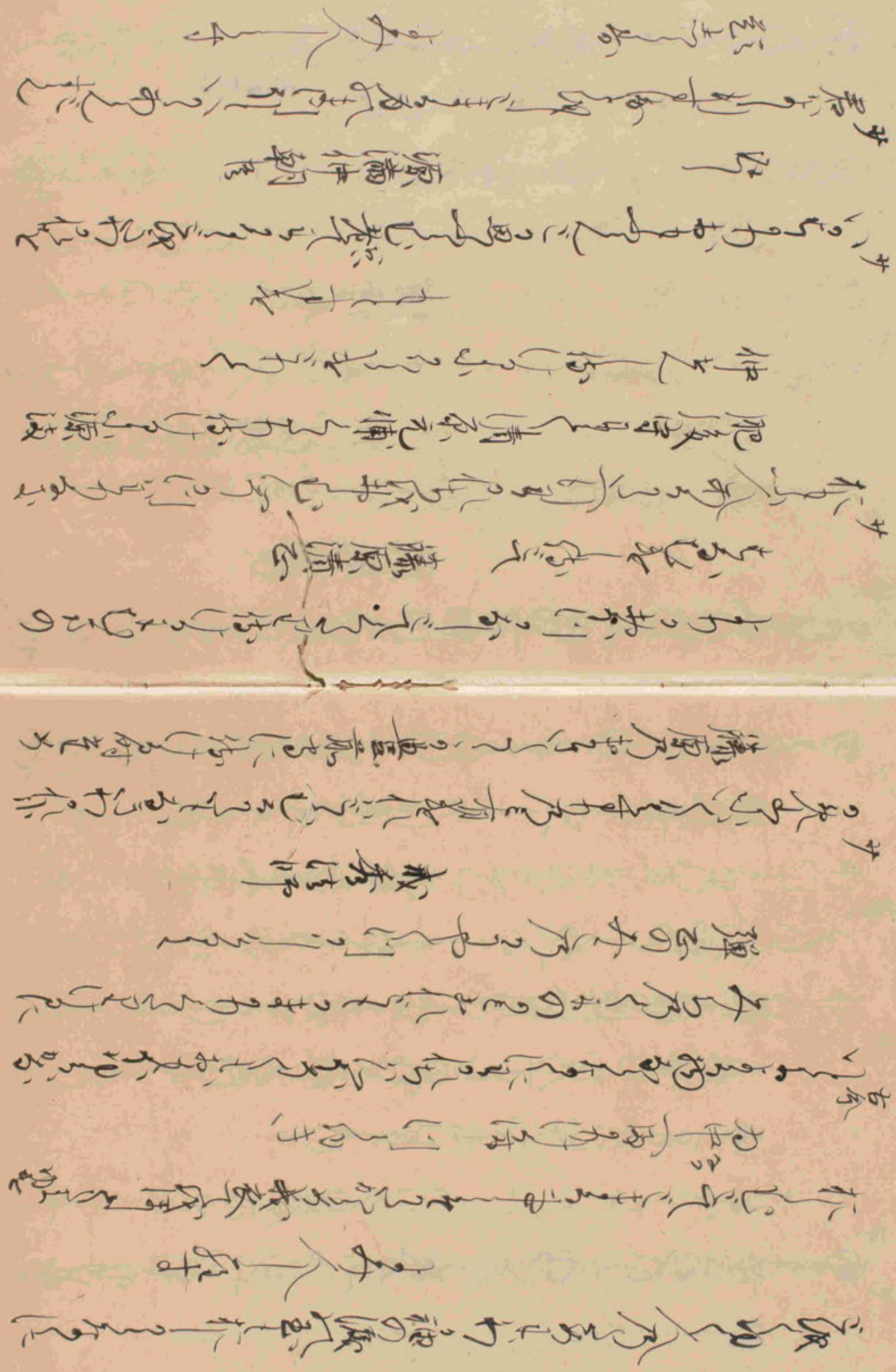
サ　別れてはいとかりそめにおもへども思ひ
ちるはにしてうらにそのそまにそ所なくなりぬ
しのへまのうちをとこ人のをとこ山ちくし
おくて　けるおき

サ　わがれにしまくいかにかはかりの日の名をそ有
伊勢　ちるはにしてうらにそのそまにそ所なくなりぬ
をとこのわかれまへくるとけるのあきにおくる
おくれておけるこのいて物いひおく
よしのぶ

サ　ゆくすゑをかぎりとおもへどもかりの世にあ
相坂やかりそめにとなる







そくしかるとちの志をとれい白雲乃ゆくへ山をとうやゆん

大弐門　源重淫女

サ　いろをいのをしむこいおもはんしいそちうとせうこそ稍

いりて〳〵ぬるうけしう人のもとにいれいりうう

橋倚平

サ　昔みしいきの松ちうこうりうとあれ人とありがこうよ

陸奥ちうくうりうかけうけう時三条太政大臣の

餞に侍ける　みかけう

藤原為頼

サ　をけうう乃松をみけうやるくさめし君のちをのりをいるてい

みちのくうの白河関まうかけうに

平兼盛

サ　をとうりあうくはいのて都へいりをやしうしう白河のをいこうぬ

長徳元年三月十三日法興院内大臣家歌合　長保元年三月六日平由国解到来

實方朝臣みちのくうにくだりけうに

くういりあうこて

大弐門督乃信

あいまうう乃木のうくうりゆうの都の川ぬいさうめ

をうしうす

よみ人しらず

サ　橋ゆうりうてうそねうしかけうの山川くうのゆいをとうを

恒徳乃家乃障子に

かゆうり

志かさてたほしよりふるたへやもまる乃橋にかゝりを初
みなれし海のそらすまく雨にあれて
つらゆき

古今
雨ふるよりさきのにほひをまにふりこゑもかくれぬ掲か有
かまつにもえつゝ絶てまくわかへやよるすの月
にかりの絶けるよ郭公のなき絶けるはきて
伊勢

新古
村島秋くる乃のまつ乃こゝろきけは草枕まくらに露をかけ
掲へ海のわけるみちまてよ乃るくをまて
よしのふ

草深くよとめるとみれはなきまよひ鳴なる夜の中に
誰しる
よみ人しらす

サ
君をのみ思ひよる草枕けふもまたぬれ暁ふる
須磨の関の大隅へまかるくるやけふみちの院
まてはたのみてやけるふるゝのにたしき絶て
平兼盛

ちるの露の旅なるにもしれぬもやまの秋の夜の月
秋かれにまつりけるふいかにのまやとやて
よしのふ

さらぬたに秋に霜をいかにみのいかにふきさらむるらむや

はくしつくちける過るとて
重之
船路には草のまくらもむすはねはおきなからこそ夢もみえけれ
帥伊周はつくしへ一度まかりけるに又上るましきなりける
かへるによみける　旧事のよしこゝ
思ひやるこゝろはかりは里のほかなれとなにのへたてかはかりなるらん
なそさはれはてさはへこそ侍けれ
贈太政大臣
サ
君かすむやとのこすゑをゆくゝゝとかくるゝまてにかへりみしはや
かさ乃りなきのゆきしよりかへりて侍けるはしめ
あのうしほみちて侍ける比
いる波の　金岡　仁明天皇御内人や　承和四年九月十五日遣唐使
浪のうへにみえし小嶋のしまかくれゆくそらもなし君にわかれて
とろこしまて　かきのもとの人まろ
万
ゆきさらふやまのはけのたにかけはしてもかへる都に
こひしくやらし
人麿入唐の時の事又三所見
但上古の口八可任耳

拾遺和歌集巻第七

物名

紅梅　　よみ人しらず

うらにさかりすぎにけるうめの花を折りて人のつかはしたりける

ちくさ

藤原すけみ　浦桐　敦忠卿弘徽殿男　贈太政大臣長兼

ちくさにもあらぬこころをうめの花いかなる人のうつしそめけん

いとやなぎ

ふるいえやるこまつもとのいとやなぎ　なにはしらぬ草の枕と落ちにけり

さるとりの花

おく露のあきのもとにぬれぬれば　鶯にはさるとりの花

かるかや　　伊勢

廿集上

ふるさとのたかやのはらのかるかやは　日のとるかにさそはれぬらん

うのはな

よみ人しらず

あきの野のうのはなかとぞ見るまでに　さくらにまがふ白ゆきかな

廿集上

しらぎくの花

如覚法師　廿將商兄也

しらぎくの花かとぞ見る山ぢ野の草はゆかりの人しなれば

ちさと川を

よみ人しらず

ちさと川をみるに花の名を聞きて　ちさとのあやさ

川ぞいにまよひうせにしあやしさに　なにはしらぬ草のまくらかな

きちかう

あき乃まのうちのうるむ毛そへたにみえもあへす折ふる分

わさのか

我宿の花乃ちらすのをわすれてはいつかねあさにほのほのかくさ

けふこし

見る人もなくてさくらむ花のさかりは心もしらぬさかむかしぬる

らに

秋乃野に花さくらむ毛みだれはしりしかたをこえにこそしあるらむ

かるかや　　忠岑

白露のおくるやのくきてさらに草葉のむすふ北野哉

もと乃かへる

山川はきのまなの仁すゑのさむ花せはしに聞こそ嬉しかりける

わか山

瀧川と花のちりまつしら波はあのゝ水をもにほふゆる

ひとつし

古今巻五遍昭

いまもこそさやかに朝かほの花のしほむなとのとかさ

川とゆき

廿巻上

初瀬川よそ木ならしあらの山のやまたにて思ふともなり

廿同

まの川乃ゆたのうへへきさへなをさとめあきはなはふ

ひさかたしきく　すけ人

あさるかこ人もこゝろくるしきものゝおもふ花のあるおもかはすつるは　まち
ちりの本
そはりまけ
鶯のすみつゝもしのはしたる風のまにて行らいぬらん
やまと
廿巻上
あさみどりよわみやよとゝ伊勢の野中の草は生つゝ
いるこの
あさみどりの松の浦にいれ渚にふることいなみのうきは
くる春の
たつ浪のうちよくするすゑのかねに秋ゝきおもひしそおこる　統
おのしきにおもふのまゝてあけつゝみく

水ひたる舟もさはいねおもひまにいりてあまのゝるまゝの辺
よとのかは　在原元方
うつりはてゝ人もみるらん秋の夜の月かけのなみもはなのさくらん
川しなゆき
廿巻上
あらしの山遠きれはさとにもみぢにそとうちゝる浦かな
をのゝおもし　在原業平朝臣
川ちよわらきえくしにけりともありし秋のもみぢのをちのとそ
くはなのさとに山寺に賀縁法師のやとりて侍
あるしもちの地に待ける法師とうしよみへしに
それはよみ人　よみ人しらす

廿首上

月はなてる山と入れ我ふる郭公まちあり

いねつるかなを

廿首上

島つたにほまれたるかくれてはのみのうすもりの

あけみ

廿首上

くきもとみるこころなるねるあ

古

なるかこほり

しをゆる

廿首

あるあるの島の秋にまりかるかしたはのはの

なるかのらを

かれもち

おほりる雲のうちみてるる島のこれを法のもは

さきつかるる

よみ人しらず

廿首

あるすてをうるるのすむ里いさのこゆる山ぬるうる

川をみのるけ 紀伊の三重 紀浦時

廿首

つるるかの所さるすみをしけるるのしるけ爲のこ

ひろかを

高向草春

秋なるみのるるのきをるる川の尾竜田の河乃水ぬるる

紅葉さのる

あけみ

いるかの石ぬるみるかるるるるるるるるるる待

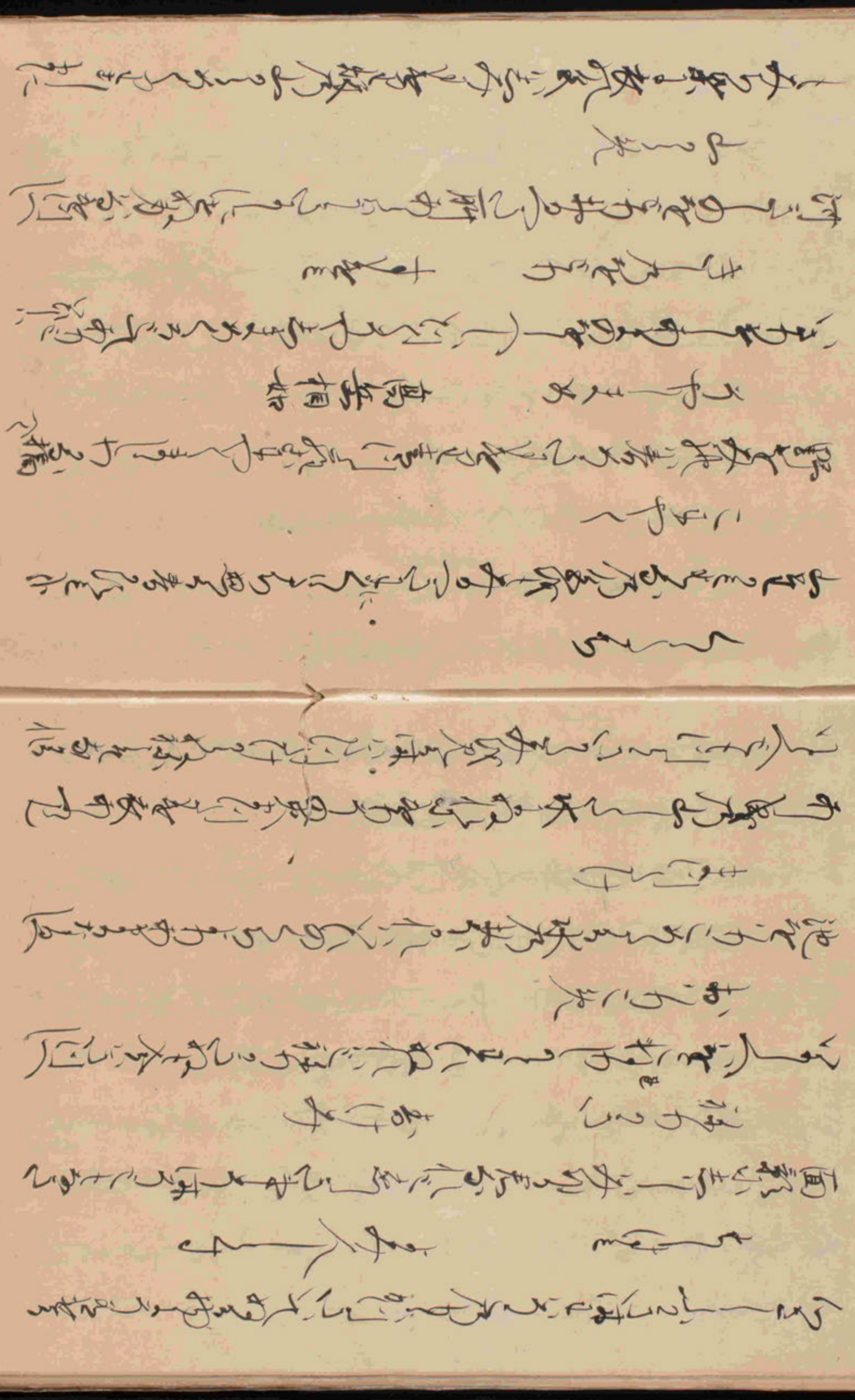
もるる

仙慶法師

月川なるるるるかるるるの島をるるるるるるるに

十七

十八



かやうに

雀上

おもてのやうに乃すまいにあやまりてあやしく花名を得

けるに

大伴黒主

前

わかくあやしくあさくに考くに花をいろいろなりもん

豪庵

さく花の花をいろみのあらるるがふかいこのうつしとも

けるに

おけみ

みるのいろいろめいろ乃ように舟にて朝の風にうかぶ花を

はるか

もとすきを

みやこ乃若草にいとまをなるものにふかすとて日数花い

ちけるに

すをみ

雨ふるけるにみてとくに入きたりやうに思ふなる

ひとりのあり

雨ふるに引乃ぬくにみる花にいろの見ごろ有り

をりのを

ちりぬる乃おうにおんなまつるをのれすると孫とるて

けるみやう

雀上

花をこの方にすてちりうるさい花のいろを思ふなる

うるのうり

しをゆう

前

お乃家にうるのうりてみてるあるるとかんごう思

ようにて

よみ人しらず

紫さのゝ
よゝとよゝとやまのあらしの
ゆゝしき
驚かぬ心ゝ我ゝ
へうかい
さこうかはるわをてゝ
かゝるもの心のゝ
あのふ花のふすまゝ
かゝくさる
かゝえさる毎ゝ
ゝ

恵慶法師

廿首上

神ゝかゝるゝ
神ゝかゝるまゝ
神ゝしゝゝ

よみ人しらず

一夜わゝしゝゝ
ひまをゝ
ひゝかれゝ
四十九日

廿首上

姫ゝ

拾遺和歌集巻第八

雜上

月をみて　中務卿具平親王

世にふるに物おもふときはなけれども月はいくせもあらぬ月かな

清慎公家屏風に　藤原実方

思ふまの月にあらぬ物ゆゑに月をみてのみ人のこひしき

めぐりあひて見しやそれとも分ぬまに雲かくれにし月をみるかな

同　大江為基

なにゆゑか物思ふまとなる月の世にすむかぎりなるらん

法師になりて月をみて　藤原さねみち

つくもなりつるみのの世中にいとやすくとすむる月かな

冷泉院の東宮におはしましける時月をよみ侍ける　藤原仲文

ひかりをのこしてのこりなくすみぬるかな

同　藤原有明

有明の月のかたぶくまにいでぬるかな

赤染衛門上つ方の月ののぼりぬるを見てよめる

ふるさとにいでぬるかな

同　伊勢

世中にいとゆゑなき月なれば我やどにのみ宿りすらん

花ふかまりて侍けるに山まゐきの乃ぶしまゐ
けるのちせしい　素性法師

後撰
ちぢの月のあきをうく出れいとるくるの山まくしけるく
屏風乃歌
けるのき

廿五下
川ぶねのとまりて見ゆるかるの山のくれなゐをとりて川の月新
みの川ぶね

廿四
久かたのあまの川そらなる月かげ川れの水に新やるらむ
廣義の後院ふすを侍けるの時屏風よみ侍けるく
人くのあまの川ぶねの水上なる月ごろ新をよるか
を侍けるに
左大将濟時

みるうにやどる月さへうつるとしるやる乃みくり川
武部大輔文時

廿六下
水のあとに月乃川むしをみるとをれしらるや思ふ
陳目乃あ山ぬ今ぬ五位つもとかけるの
もとすを

廿四
年ごとにうぐひすぬ濃や川すりつるる者代つ乃
圓融院御時乃屏風乃爲てまゐりけるに
うぐひすまゐりとる　しるふ
花とるく川とるの川に月いつみるの川乃ぬるの月
權中納言敦忠の西さつもとの山ぢぬ滝のまに

つゆけかけり　伊セ

廿四　音羽川きよく入くおとすなる瀧川きよく入くのみてとすなる

中務

廿四　君つくるやしろにとねる瀧の糸にこそみまかりなる有なる

ゆきしるし

廿四　なのはくる瀧乃きよく糸にすまして　そこの玉はこのみ尾

延喜十三年　斎院御屏風四帖　紅葉

よりく

流くるきよく乃いとそよりかけてかけるしら白玉

大覚寺　あきの風ふくあらしのふるき

瀧とよみかけり　右衛門督公任

瀧乃糸にきよくてみくもの花にあらぬ花

ゆきしるし

廿五下　みかけ

古　大そうぜるうめのそこにはえ映風乃音ゆきにしるしみてはい

野宮小斎宮　規子

琴ゆきにしるしよみかけり　和風入東

斎宮女御

廿四　琴乃ねにみなの松風かよひしれのおもわにうつる波

廿四　まつ風のそこにみてる琴の音をこれの八ちの龍

天暦御時名所屏風　紅葉

人くにうらかすくはしけるをこと

忠見

廿四

おのへなる松乃木すゑにうちなびく浪のしらゝはまそはふる

延喜御屏風の

けりなり

廿五

あふさかの関の松はせきこゆる池のみなそこまてはるはる

伝為忠卿御大井に行幸ありしとき人々お言よ

まゝををけるを

廿六

大井河のゐ乃松ゝ千とせをへてみゆきの

伝者にふ乃川の時雨の時分御けう舞人

ふくかぜにそらわたるよみ侍けり

をこに乃きて千とせをふるゐ乃松ゝ

又ゑ乃内侍のゝ賀の屏風に松の海に

ひろゝる所に

伊勢

廿七

海乃ゝ千とせ乃ゝ松の根ゝ

しゝ乃へ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

うゝ一風のゝをしゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ浪にゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

あはれてふ事をあまたにやらしとや春におくれてひとりさくらむ

よしのふ

いその循やの君にのへてけるまかりとも乃とりへのうなめ

河原院乃古松をよみ侍ける

源道済

ゆく末乃しるしはかりにのこるへき松さへいたく老にけるかな

題しらす

よみ人しらす

世中はすみよしとしもおもはぬに何代よりこて我身へぬらん

川なきをよりてかけるをりけるかへりての乃あし

うせ侍けるのちに川けるをかけ侍ける

川なりき

廿注下

こゝ川にはよふふる橋の高砂の松もむかしやおもひいつらん

あはれなりしはしのほと今代のかくなりける

まかりける

源為憲

廿注下

よしのにはあつの浦の松かせに浪のおとにそ立よるなる

題しらす

よみ人しらす

廿四

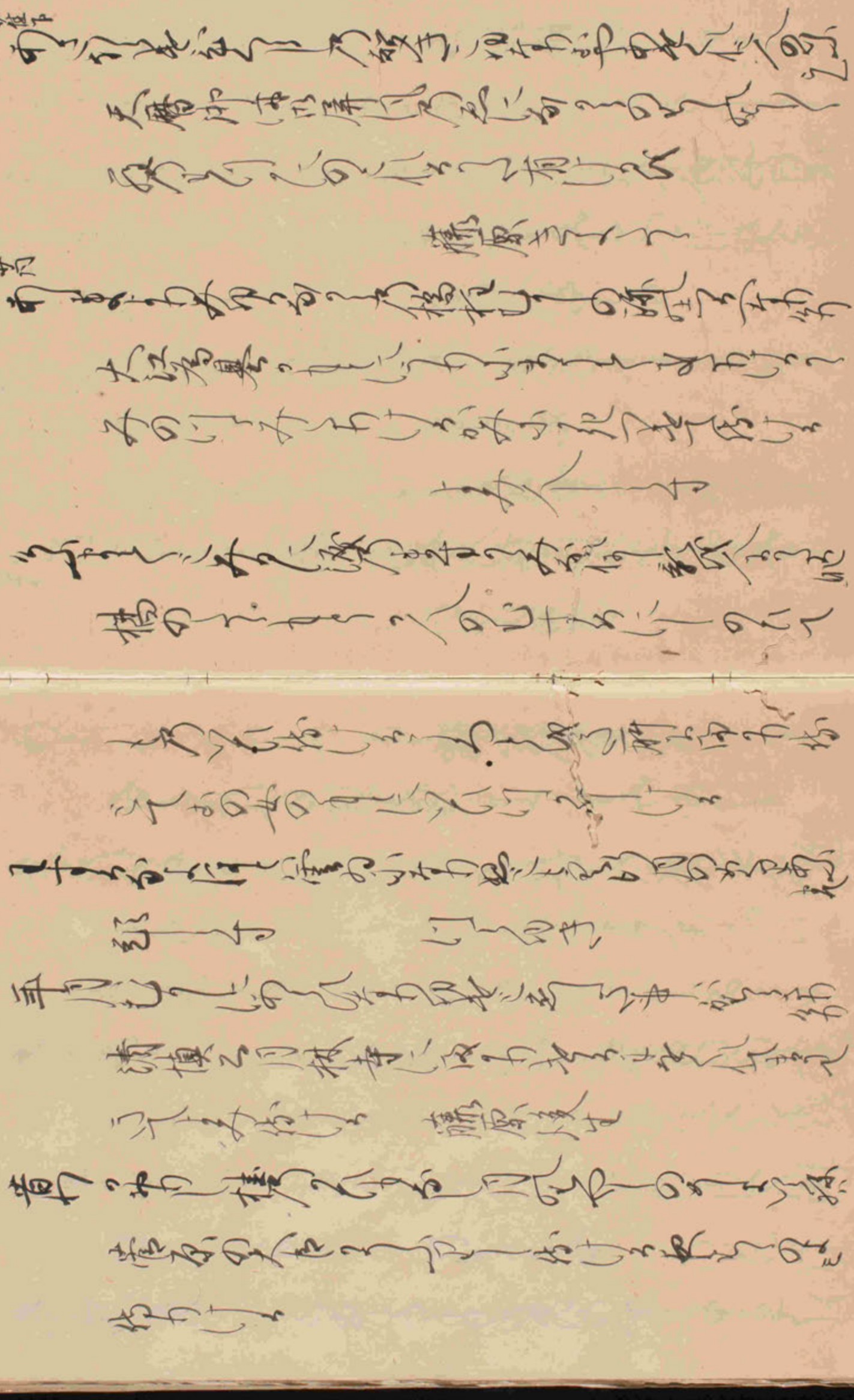
ときはなるこのもとなるにしるかはしつかはれは川そ乃ゝこゝ

うちなかれはすゑのよしの山ゝの下のこゝにかつはかけてぬき

山あらしのこゝにかなる葉の川ちにしたかへしちらし

ゆゑそれい

左大将済時



人まろ

さ渡やあふミの海ハ名のミして鏡の山にはなかは
ちり上ゆふなミ千鳥ミなるさかい山のはるかに
やうらくなけうにゝ千鳥の名をおしミて

よしのふ

あのけさの秋の日の千鳥なくさかいのかにたちて
しるへ内のわけ行人のゆくもかへるもわかれ
くるにへさけりのいつくらく

あきのうねおさしなへるほうけ千とせのことう上るけ
はりきの道のほとみきの山の代みなて

ともしち

三嶋乃山きりしの枝にあつまるをたゝし人はすくなく
對馬守そのあさミちかめおさのくるやと侍
其時にて内さの頭陀のめ肥前のよみけり
のりける

たゝ川し後さ井乃岸をゆきうつせぬとくにさしまいなし
詠天　ひさまろ

東乃海ニもしの浪ちる月の舟ありのなやしよしるへみ舟
ともよみける

川乃きのうけいつみ秋にむとくらちろうしなにゝ川の舟かな

よみ人しらす

ちはやふる神のをさへのときゝてかよふ心のたえぬかみかは

詠葉

いにしへにありけむ人もわかことやみわのひはらにかさしをりけん

題しらす　よみ人しらす

人しはすまゐして思ひし見しものゝ山しら浪の新はみけり

伊勢乃とゆきしに似のかこゝろて

人まろ

おふの海にふなのりすらむわきもこかあかものすそにしほみつらむか

天暦十一年九月十五日斎宮くたり侍けるに

内よりすゝりてうしてたまはすとて

御製

おもふことなるといふなるすゝか山こえてうれしきさかひとそきく

円融院御時斎宮くたり侍けるに母の前斎宮もろともにこえ侍て

斎宮女御

世にふれは又もこえけりすゝか山むかしの今になるにやあるらん

あすか乃女王かおさむる所にて詠る

人まろ

あすの河しからみわたしせかませはなかるゝ水ものとけからまし

小一条大臣四わうくれて後かの家ゝ
けるのなきゝけるをこそ侍て

小野宮太政大臣

をくれたる色なるよりあれ河のなこりをもとゝ
左大臣けちみのの左大臣こそたりく
のちとゝうけのうをこそうをもて侍れい

安宮宮

年代へくちたるしるしにうめの花ゝ
大貳国章ゝ乃おもかけ侍るゝ
ゝ乃ちかひてけうしけれい

もとけ

ゝ

ゝ

ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

拾遺和歌集巻第九

雜下

雨の所なる春駒を見て

みくさかりけるを

紀貫之

折

春駒はみくさにつかるるものなれば

元良親王こと東宮殿のこと春駒を見て

まきらるるいとをれいわるとおもひて

つかれをれいおもひてとまれいるこそ

てはけれい

おもふ乃煙もいとをしてと花みるほいに花とよる

詠しらず

よみ人しらず

春ごとに花乃たえまをうらむるは

物のわれに咲うとは

思歟花乃うへにすむとほ鳥と花のまきか

ゝ中をたにはなれぬ

大納言朝光

おりてはに花にとまるほ鳥の名をいとはるる身

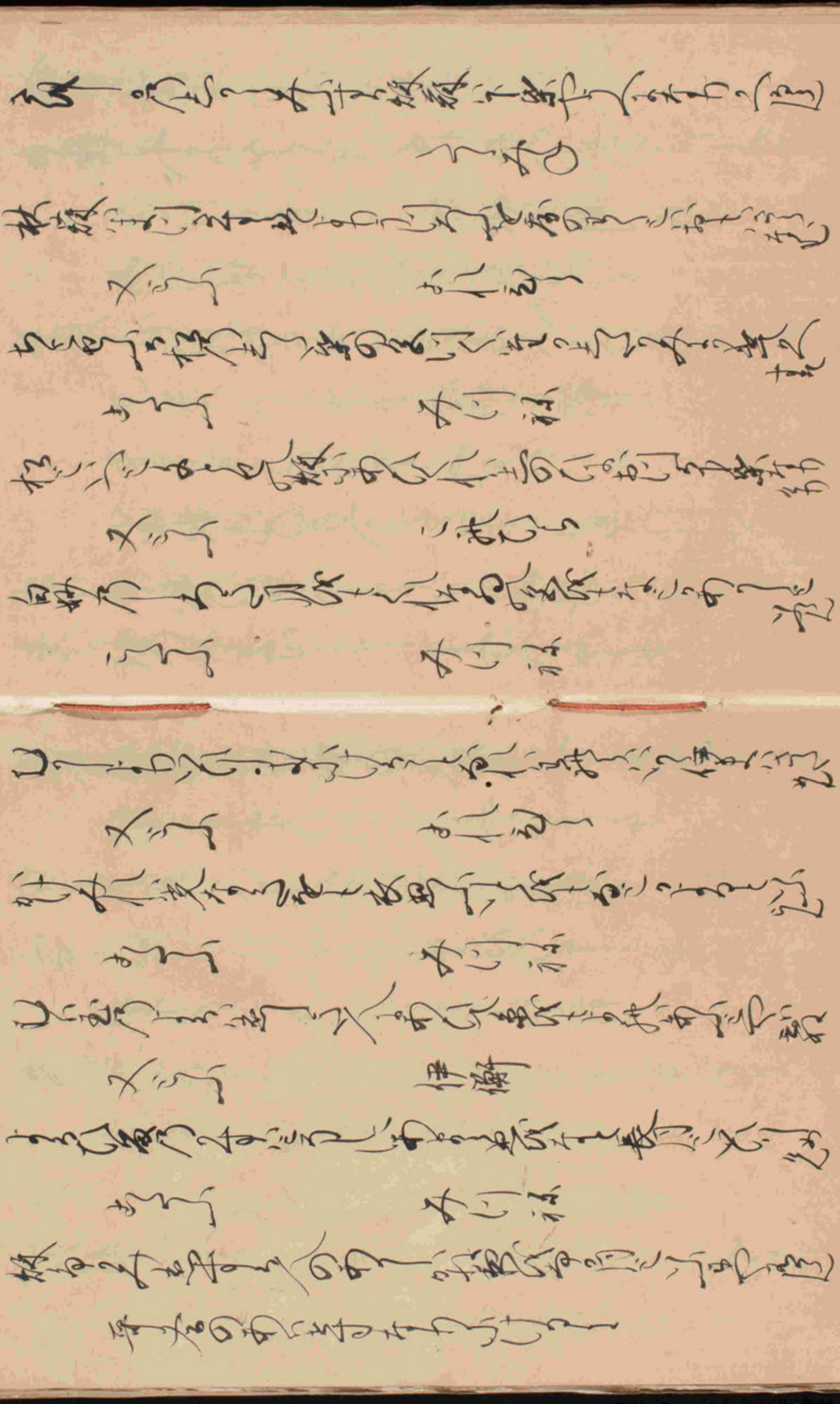
みりゐてはなるゝ花のかけ

春議伊衡

白雪のふりてをいるれ萩の下葉のまきしみ乃

みりれ

とをよ



水乃あわやそなれこそ
こゝろ川ゝ
草木しげる野
よみ人しらず
ゆゑ
恵慶法師
ゆゑ
ゆゑ
ゆゑ

うちなびきて侍けれい家のあるじの
ぬまにうつうをさせ侍けり
勅なれいとかしまの宿りとこいいつまつ人
つくつくをさそれいかりすなりはをさ
あるかはをせ絶侍けるほうしの乃すそけるの
わたく侍けるにそれ乃ちよりもれいかりてこ
そ侍けれい
壽玄法師
いなかしこにそれとも乃れ侍こ猶思ひ人とこれ
月をみ侍て
よりの
ありさちもちろにみ乃ゆ山のぢいて乃月のさて人を
かなふまつくく侍けるに侍乃みに侍てはまい
なりれいとはいよ乃みとこいあこきく侍
れい
伊勢
そくちれて君みに川の水あさやふうち秋を逢ひ
紙宣に車乃つをもちけりうく侍き
ふ侍とすこいて侍けれい
藤原仲文
ぬさとに馬こそ人あり乃れかをもをこ思ひ
ゆ
よりの
あをこ人ふむかとこやちを乃ちを馬こうを山ふ

庶義弓家乃こゝろ也はあしゝ馬のあしゝ所にあり

のもるけ乃山まゝあゝ所

恵慶法師

かもゝ江乃あゝのもゝかけのゝ仏くゝ川乃くゝゝゝの駒乃ゝ

ゆゝ乃こゝゝ仏けゝゝ人のゝゝゝて

こゝみ

難波ゝゝゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

けゝの国に仏乃けゝゝゝゝ人ゝあゝ仏て

都ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

川のうしろにたれいるのおをかけまして

麗景殿うやのきこ

なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　なむあみだぶつ

地獄のうしろにたれいるのおをみて

常原道雅女

みかきもりえじにこそあるかりがねの

はつかりをきくにつけてもまこと

の友の書をはじめてはるかにつこひを

人にそしつりはるれい

皇太后宮大夫国章

うしろにたれいるのおをかけまして

源重之の母乃逸江ふにつけてもまこのあつ

まりてのちのかりのこえにつけても

みなれぬ乃女のすみかけり

あつ乃おやこ思ふにつけてもこのあつ

紀ーーす

人まろ

山ぢのみ夕日のくれぬあらしのみ

かぜのうしろにたれいるのおをみて

なりてくさをかりとりみてよみ人しらず

春ふかみこずえをみせぬ梅はなを風にぞ

春ふる日おもかりしかの川を風のわけてはなの

乃川をちかれ　恵慶法師

世中にいとゞ大原川のいはるゝ有けり

かうふりやるこをみてく

仲文

河柳はくみてうふるものをいとゞ有をたゝ

天暦御時一条摂政義人以下仕けるとき

をりけるまゝ　元四位

ゆかりなくこゝにこゝろをとゞめてを

御制歌

ちとせ後のうちやうへすこよりはなをまさこの数のかず

内侍馬の家よ右大将實資のうちにはなを

はまうちに後のうちをしたいとのつゝ思ひをを

つゝを指うしてけるを内侍

小野宮大臣

ゆしてとのをみてはなをるゝ島流ありことにあとのるゝ

ゆ

うちとけて伊勢のいちんとるちりぬる涙ふきて

歌

よみ人しらず

みるめこそかくれなりけれ

清原元輔肥後守にて

みのうらの山の府とみふねわけるこし

やうたちかしらの

そでのきてはみの滝とうちみれば山の

三位国章ちかいうち氏藤ふちをまて藤原

かねのりもてたる納光の無位に

仰せ下されけるしるしに

そでしきくまの浦のうらなみのうちよりくるかなたに

ほのぼの

さそうるくたちもうつりてちやちまんこの西のまさ

みちのくにはせのこりくろけりといふ所よ

重くのいとうこあるはりありきてそこけ

りけり

○とうと

みちのくのあちこちのくろけりふかこと仕きてい

廉義を家のこ和をたい人のもの人のあい

ふちうけりる所 世

藤原為頼

好人乃ちのの山を入まをるしかこの名をつけ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

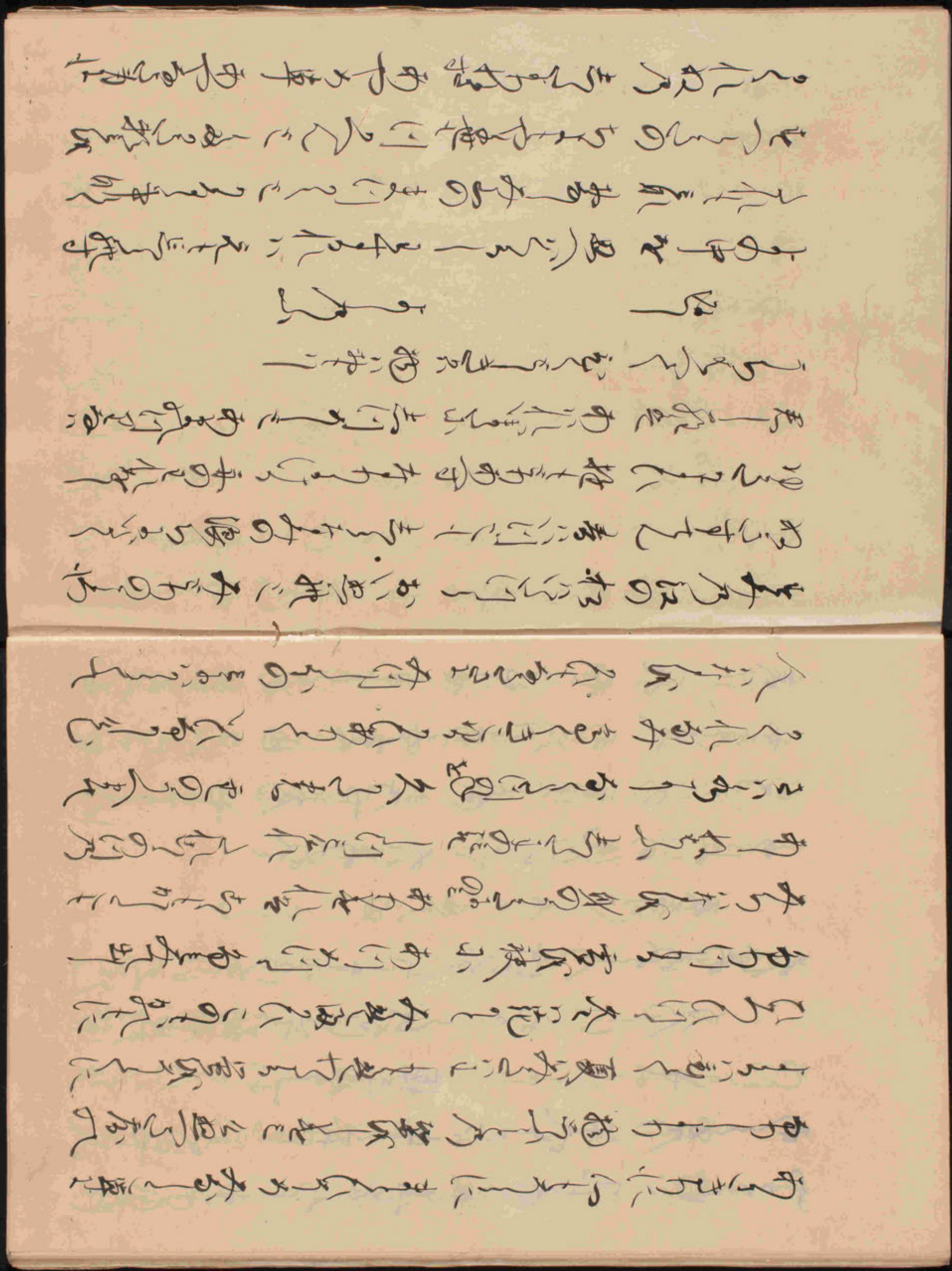
[illegible]

源をあるべし

[illegible]

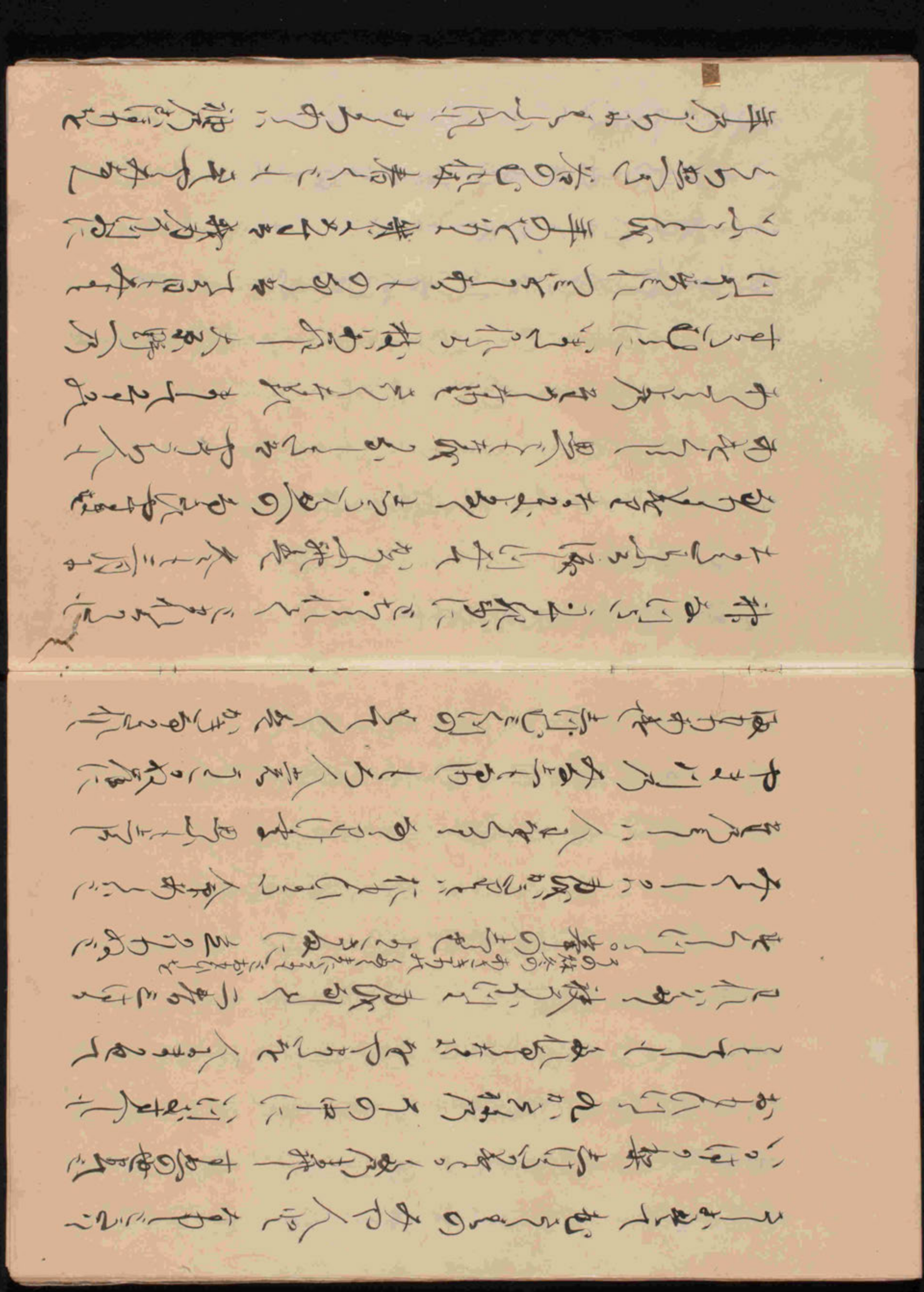
[illegible]

[illegible]



人なみなりかりうんぶ　おもひて　たふるゆるを
思ひ　立　冬　いとわびし　草のうちを
ありけめ　ひ　ひ　ひ

みかしらは神のしるしとぬれかうれしと思ひ
きみよりもしるしるしる



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

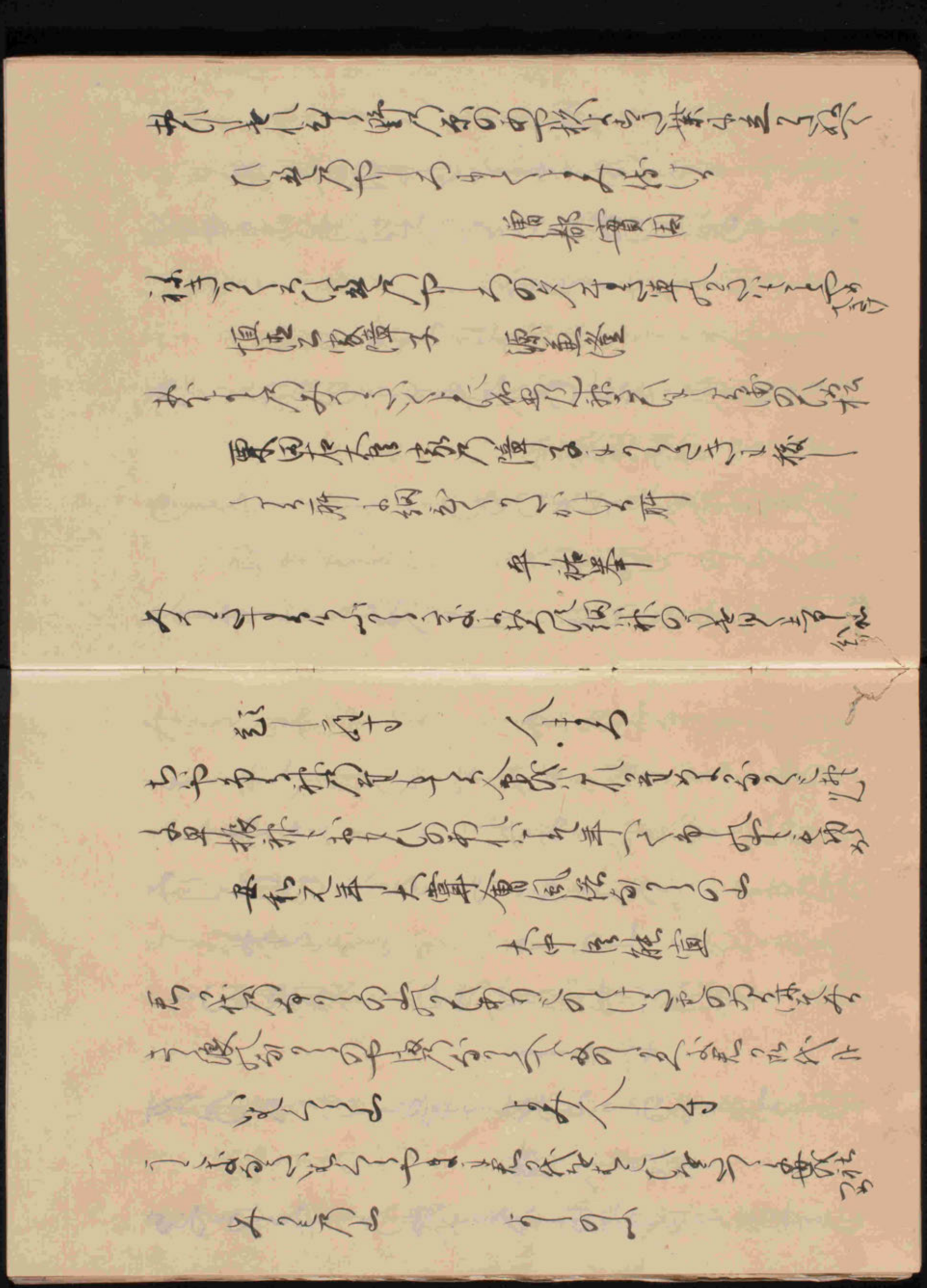
拾遺和歌集巻第十

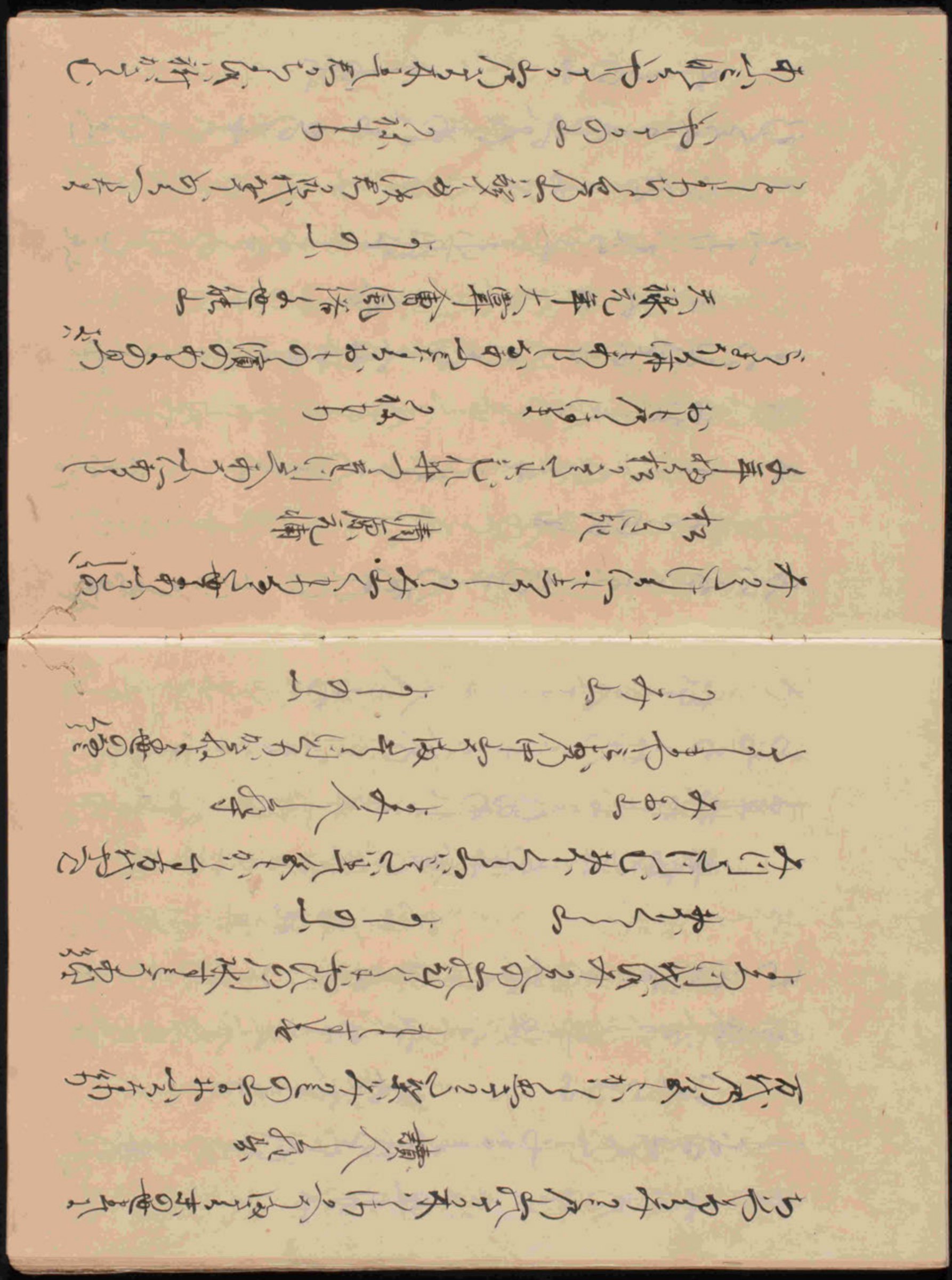
神楽哥

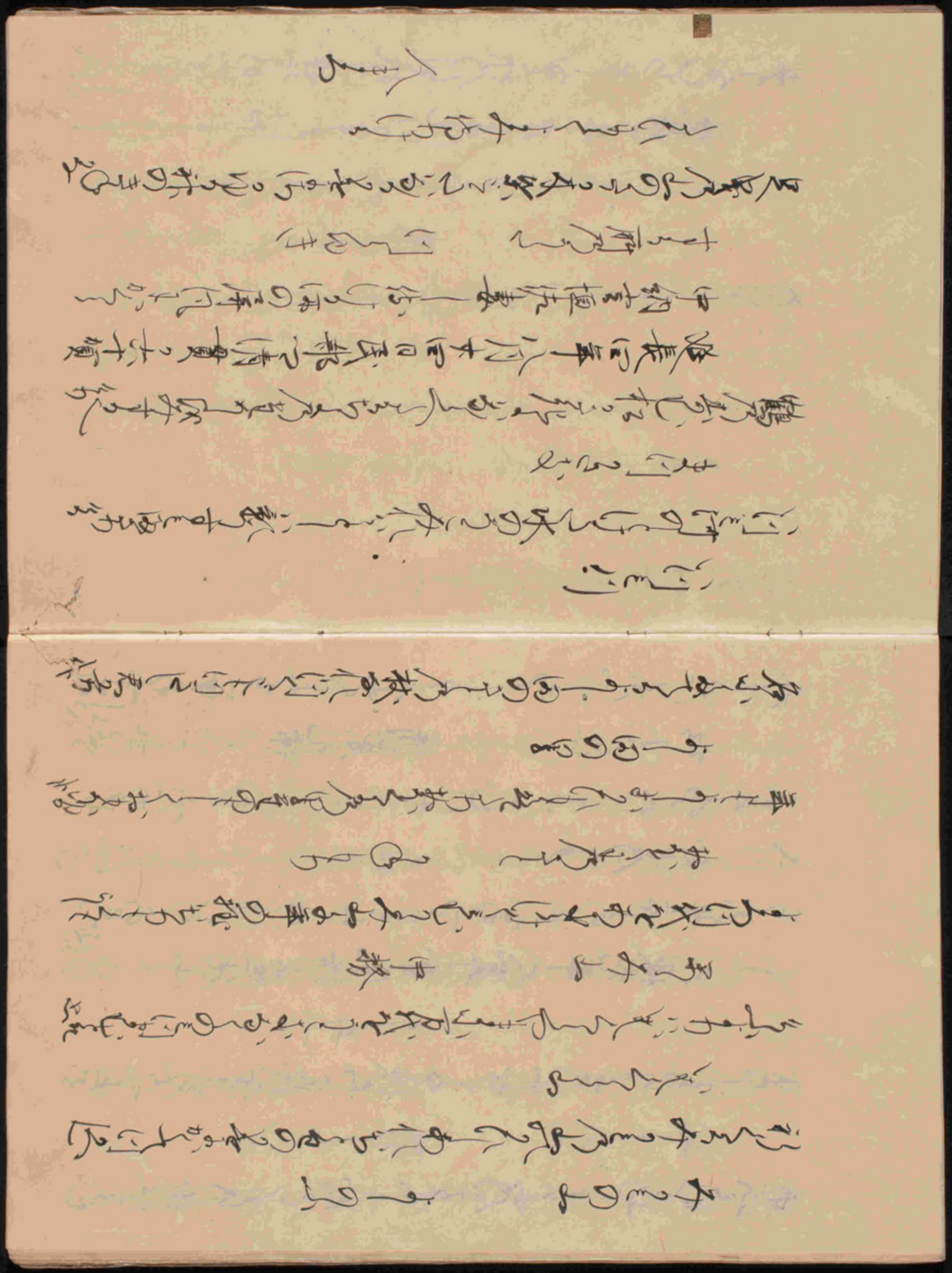
[illegible]

我こまいとくゆるをえあらにうやへ手をうゑむさのうへ
さいとりふ衣をきしむ夏ふねどうりうしてふう浦て
志賀つとりいるあ乃ゆ乃ゆ乃ゆ
信吉のきてしとさうしむ物乃人の祝うやへまりどと出
あう人へのいうく信吉明神のそくさんとう
九郎衛門信吉遠賀郡にる四うまうくけうて
乃美よみやしつよりて地とやうとうを
ゆ乃ゆとをもきてまうとけうしあうゆ
みゆれいうく九て信けうそのう人貳
ちりくゆけり

夕をすまうる秋ふけゆくしむ
信吉まうて　安法師
あまくうあへうあいを奥ふ信吉の杖
恵慶法師
我こう秋代のうとうまう人なむ昔をしれ信吉の杖
もてうをみゆて
重う
いく世ゆのうりうてうとうう武杖のうてうとのゆとりゆ
源遠古朝臣
えゆ







あかるしらくもを秋の月に妹背の山をみるうれしさ

延喜十年亭子院のうたの御幸侍けるに

くに乃宮大一首三つよみて立て風にとられに

藤原忠房

ちりしきふるは乃ちりの武やをしめ秋とうれしき

おとしのくさくさ

拾遺和歌集巻第十一

恋一

天暦御時屏風

壬生忠見

恋すてふわが名はまだき立ぬれば人しれずこそ思ひそめしか

平兼盛

思ひしの乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ我恋しのやおもふ人のつれなき

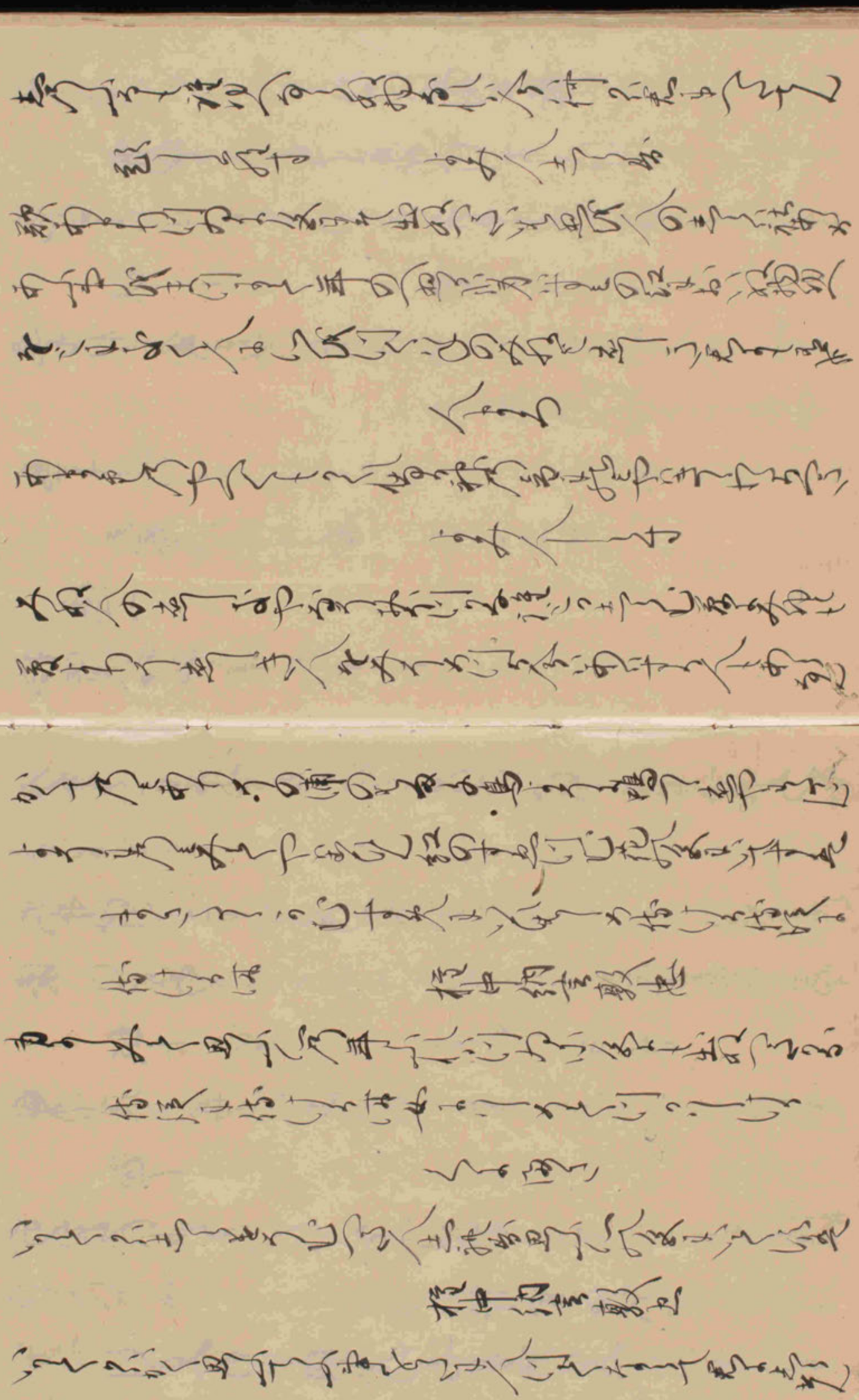
貫之

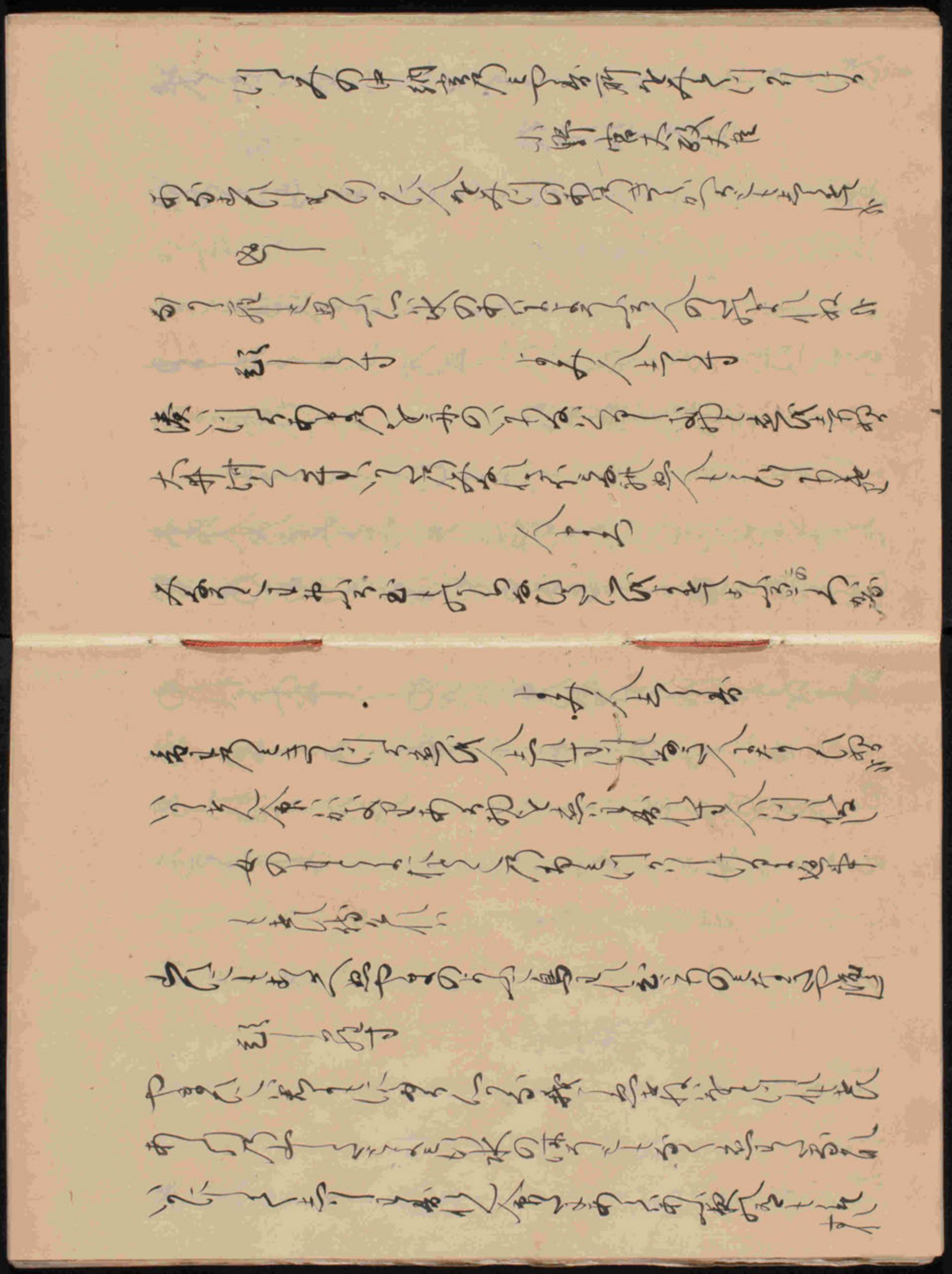
後撰

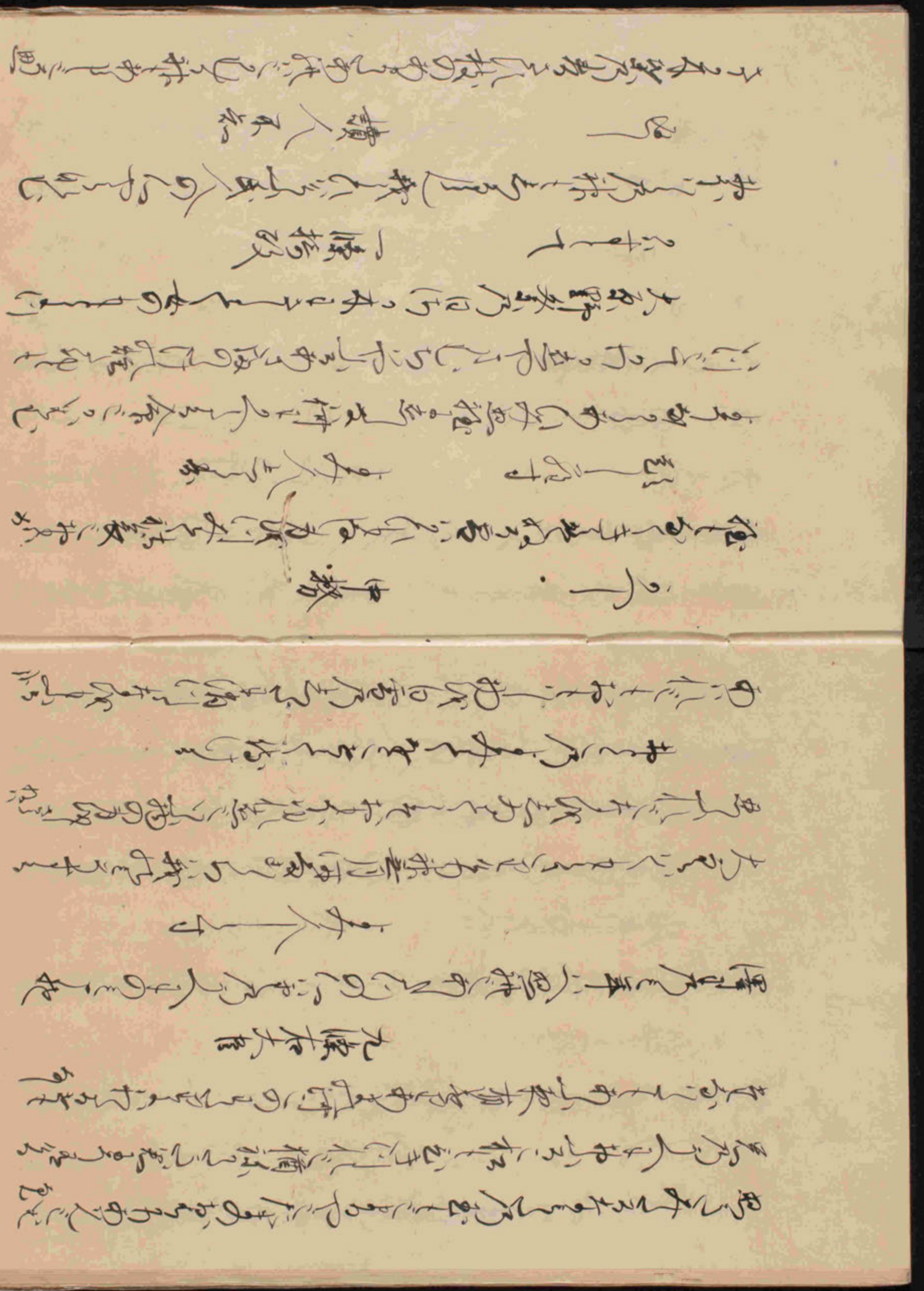
色もかはりにしものを思ふとて人のみをけ

乃ちとよめてけるけり

平さ盛







[illegible]

あけぬとて[illegible]の限りを[illegible]
[illegible]

人まろ

おくやまの[illegible]

大寿會乃御[illegible]物見侍ける所[illegible]
の侍ける[illegible]又乃日つゝりけ[illegible]

[illegible]

寛祐法師

[illegible]

よみ人しらず

[illegible]

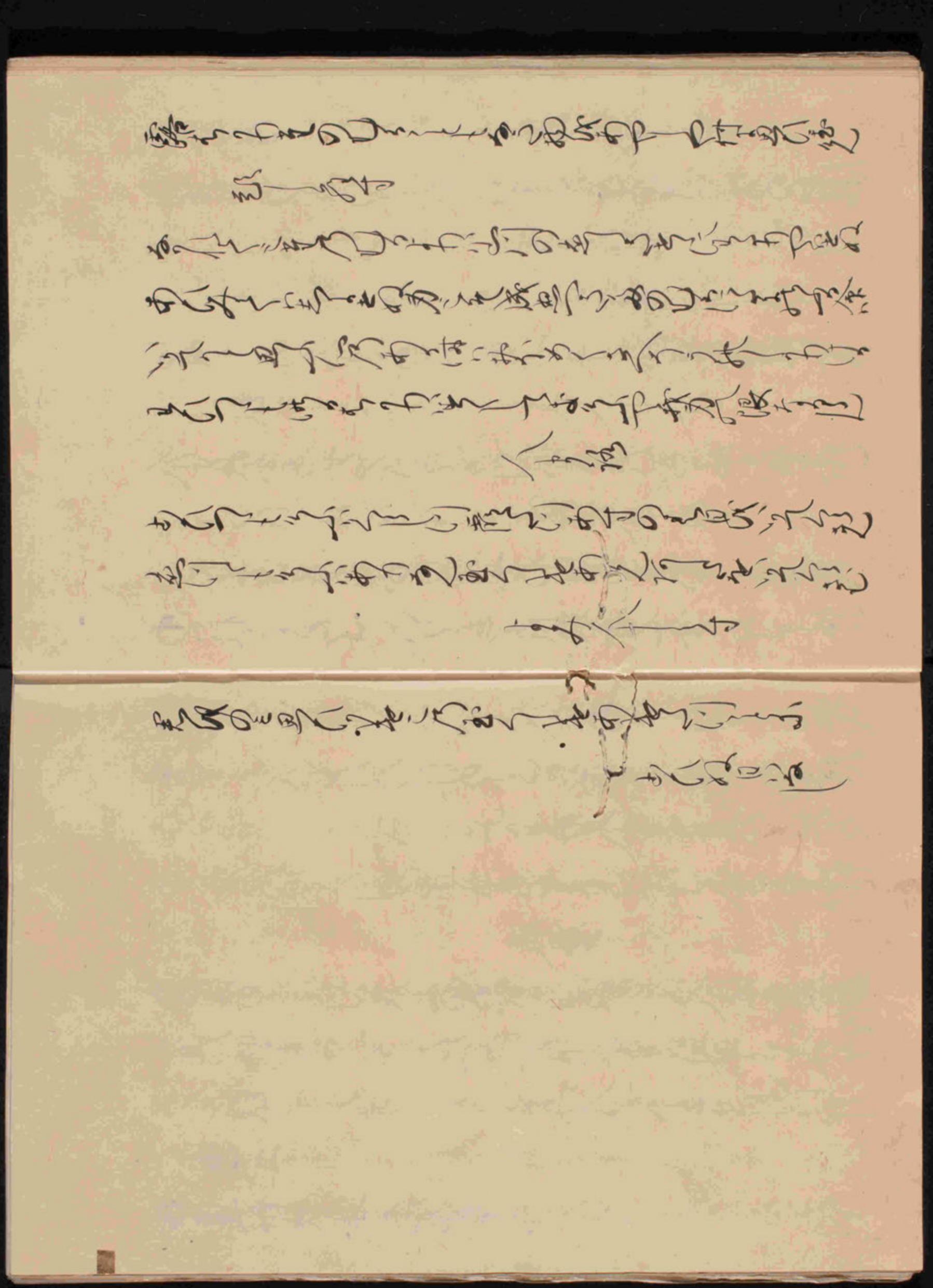
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



拾遺和歌集卷第十二

戀二

題しらず　　よみ人しらず

春の野にあさるきぎすの声聞けば
なきぬべきかな人の子ゆゑに

人麿

たれかまた問ふべきやどの花すすき
ほのぼのとのみ見えし人をば

よみ人しらず

なきこがれ身は消えぬべし思ひ川
絶えぬ涙の流れ合ひけり

人まろ

川瀬にさをさしてのぼる舟人の
よみ人しらず

あらぬ方にやとりをるらん

源重之

夜ふかくなりぬ舟出せよ
川瀬にさをさしてのぼる舟人の

こゝろ河おいたる舟書の絵にかきてあり

よみ人しらず

あのやうにつりをする人をみるに
思ふ事なくてよしなしとおもふ

藤原忠房朝臣

[illegible]

よみ人しらず

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かけてやれたらんかの橋の下の水に思へ
本院の乃尼のもとにまちて侍
りける

平行時

朝ぼらけ霧をきいらす衣のひちまちわるる志ほ
本院乃乃尼のもいの思ひかけて
あるとき

大納言きよつ
あ
あ問ふ人をそ人とおもふ志ほ
ゆ
よみ人しらす

いつこと言ひ物を乃ぬ
女乃ものを思ふ頃乃

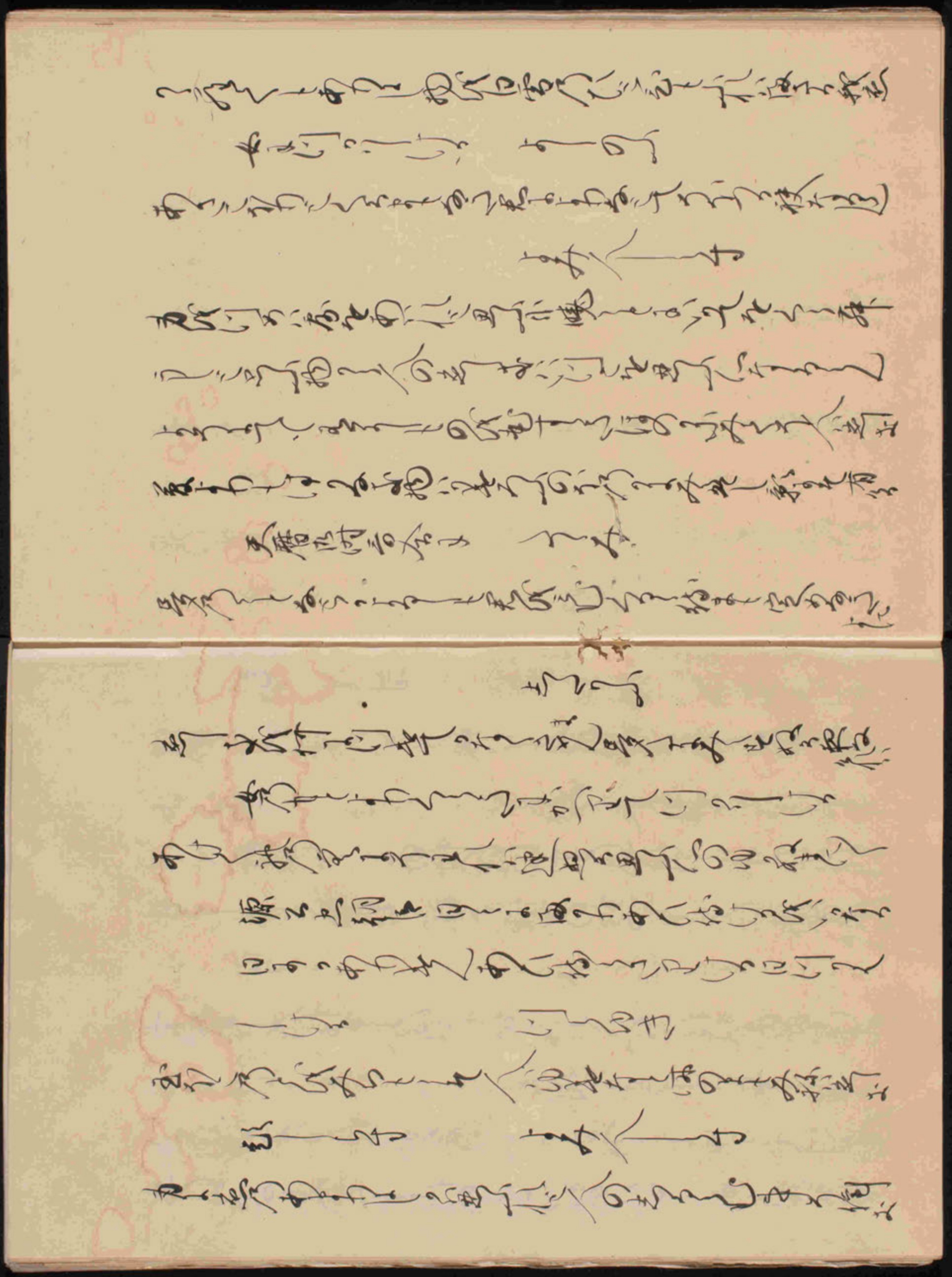
大江為基

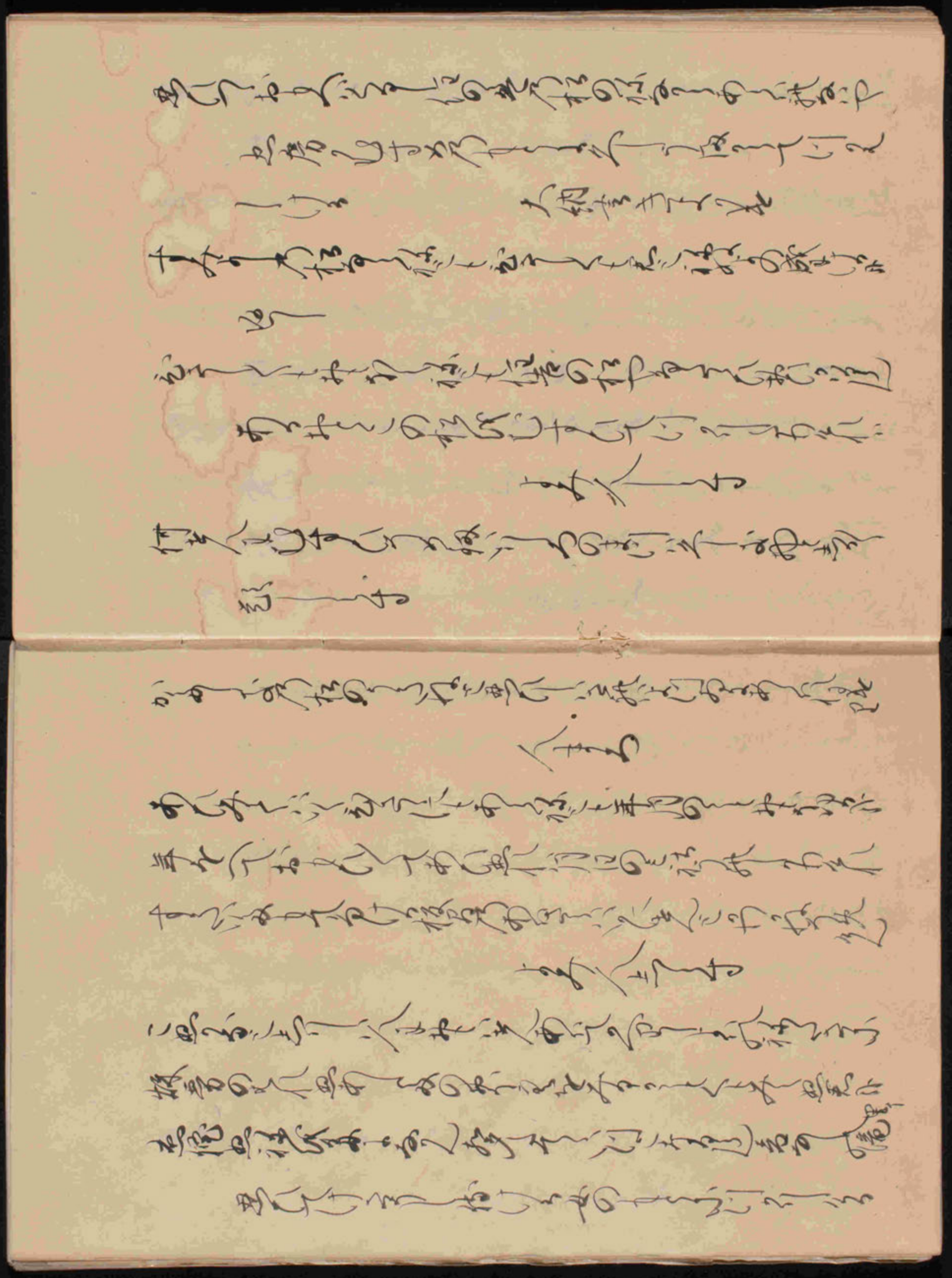
昌子内乃ぬ二てゆ思ふ
ゆ
よみ人しらす

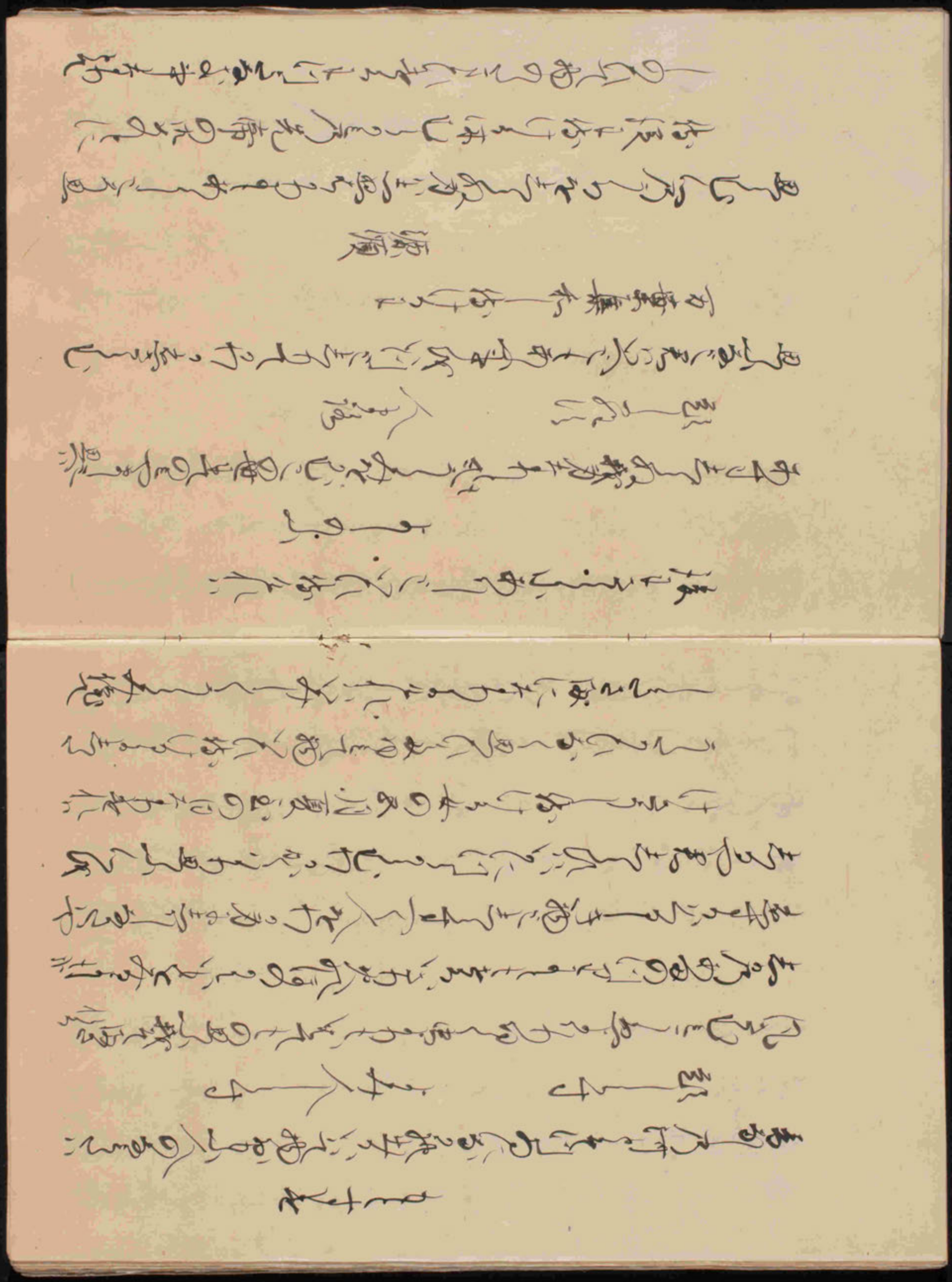
ものを思ふ頃乃我とくめる袖を数ふ
ゆ
よみ人しらす

ものを思ふ人乃ものを
あ問ふ乃ものを
思ふ志のこゝ乃ものを
女に物ものいひそめ
ゆ

左京葉平納言







[illegible]

一條摂政

つくしぬるこのふうつくしきをこそけしなるら

[illegible]　よみ人しらず

我ゆゑにさそはるゝかはみなもとの人はなかれてきしき

[illegible]　よみ人しらず

草のくれかゝるゝ水にうくこゝろ[illegible]袖今とかなる

[illegible]　よみ人しらず

わうぶの人草葉の露をかたみに袖の色をかりる

[illegible]　よみ人しらず

[illegible]

たのしてゆくゝ[illegible]

[illegible]

人をいとはぬ[illegible]

[illegible]　大伴家見

[illegible]

實方朝臣

[illegible]やわらごいとをそなへ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よみ人しらず

河ちかき岩ねのすゑの草ゝにくゝ秋をそなる

みつね

おもかげとおもひすてゝぬあやめ草ゝゝ人のこゝろ

かをとめ大臣みなもと

やとせ大ゝ和ゝ人のいつゝ夏乃とすゝきとゝ

勝觀法師

思ふ秋ゝゝゝゝゝのすゝ数のさわにたちやとる

よみ人しらず

思ふやゝゝ秋ゝゝゝゝ所ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

拾遺和歌集巻第十三

恋三

讀人不知

あしびきの山しなかせる白雲の
絶えずもあるかな
人しれず

足曳の山鳥の尾のしだり尾の
長々しをば
ひとりかもねん
よみ人しらず

足曳の山にたちまよふ
ひとりのみ
ねんとやまさきのみ
みちのおくにぞふる

石上乙麿

あしびきの山もとかくして宿
ねしかど
人まろ

あしびきの山ちかき月をいで
みる
人もがな
よみ人しらず

あしびきの山のくまにぬる人の
あはぬ
人九

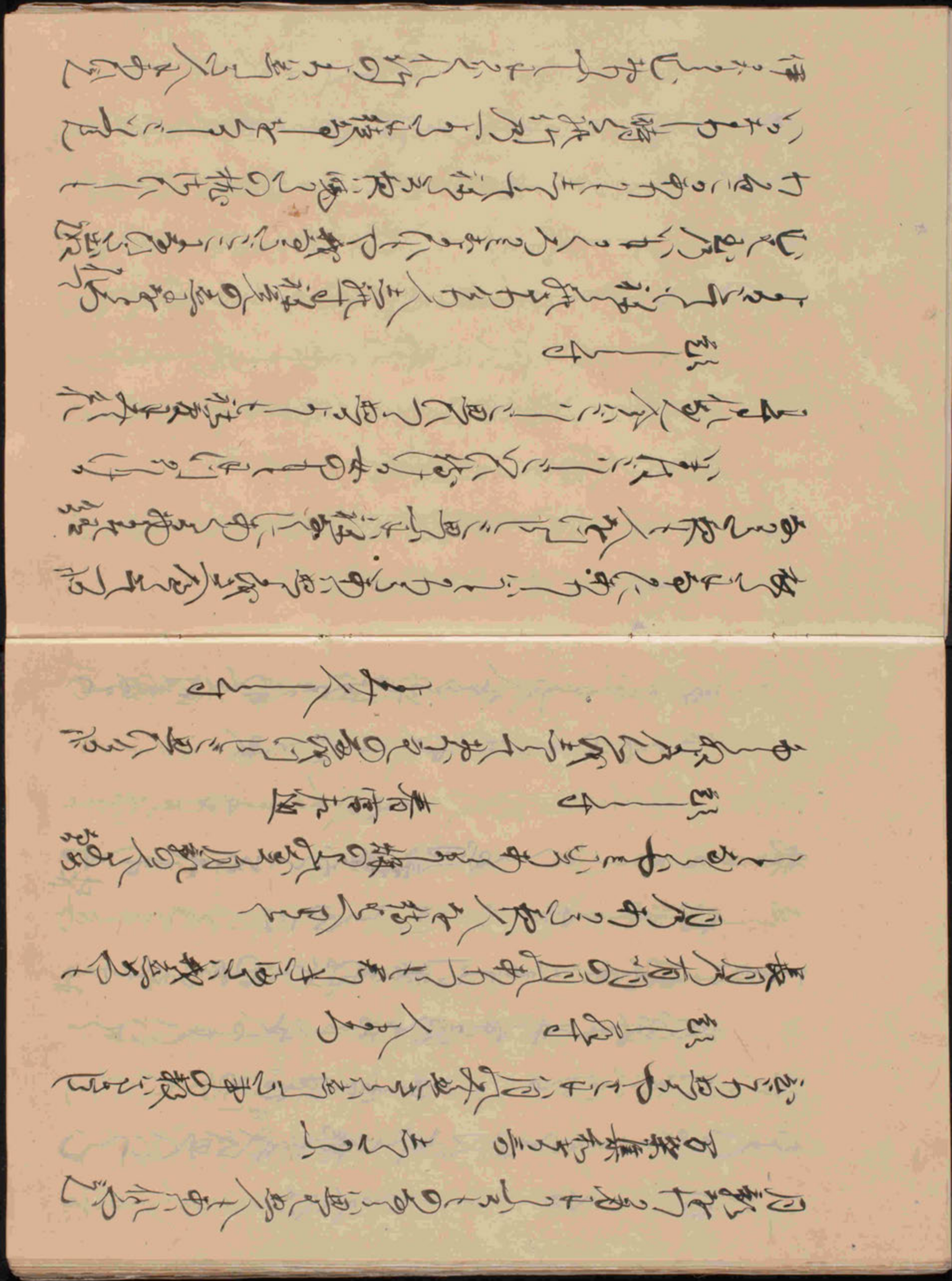
板のゝ月をまちくらしてとゝ
いもの
ちかつ

圓融院御時内裏にて八月十五夜月の

[illegible]

[illegible]

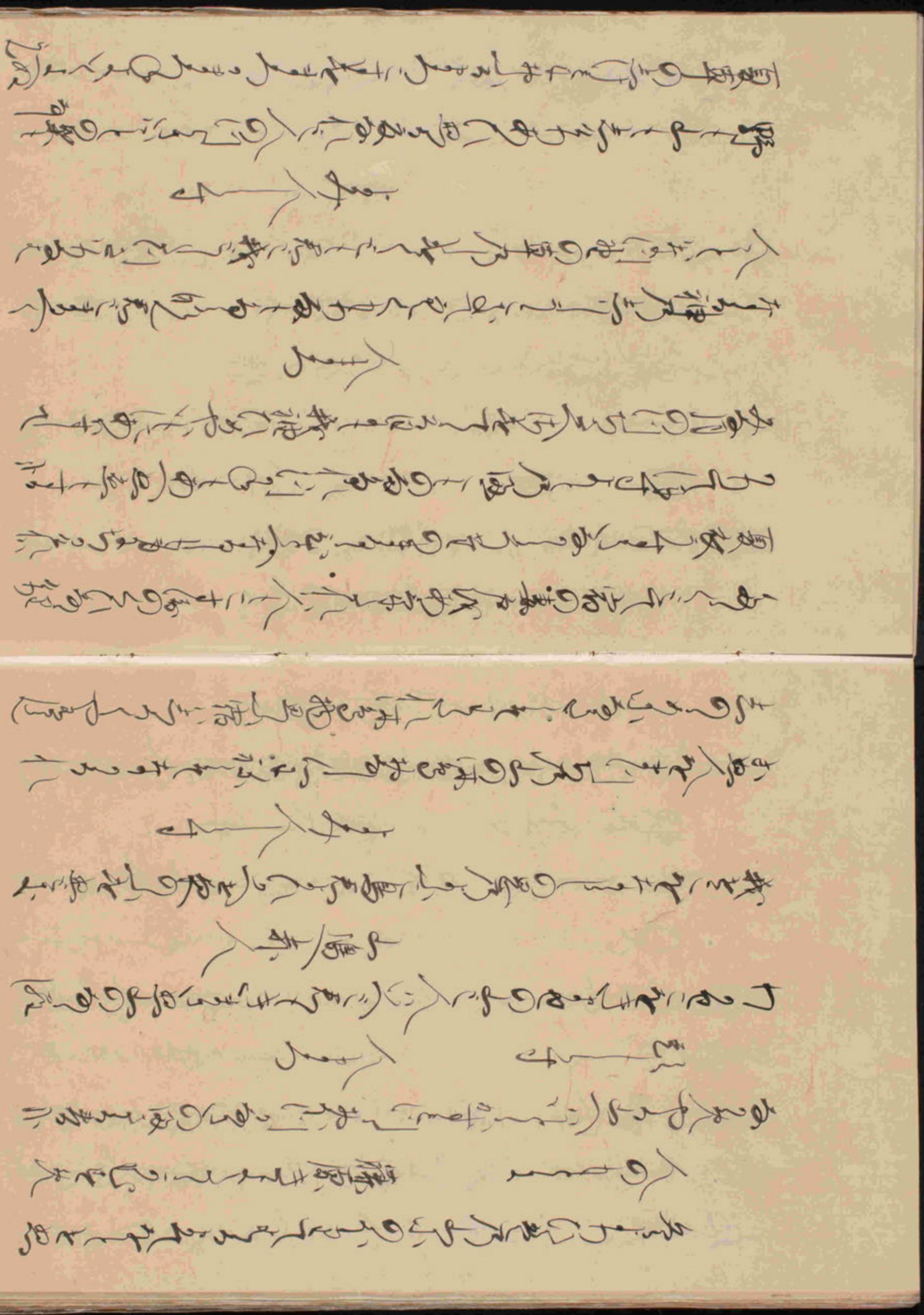
[illegible]

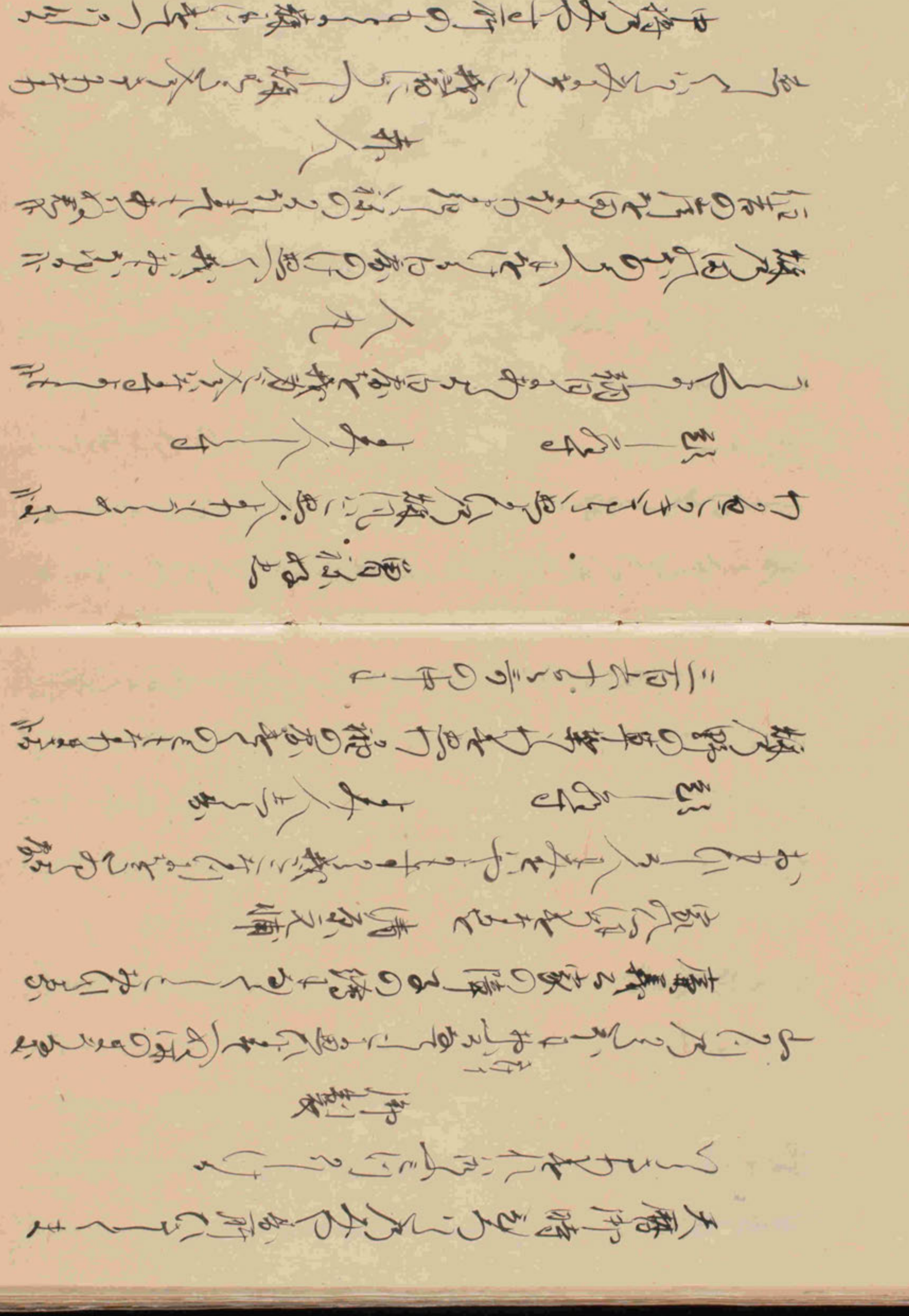


[illegible]

[illegible]

[illegible]





廣平親王

[illegible]

[illegible]

よみ人しらず

[illegible]

中宮内侍

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源景明

みやこの雪にまよひぬる人もあるみちごとに春ぞ[illegible]

[illegible]

人まろ

[illegible]

[illegible]

拾遺和歌集巻第十四

戀四

人麿

[illegible]

[illegible]

元輔

藤原實方朝臣

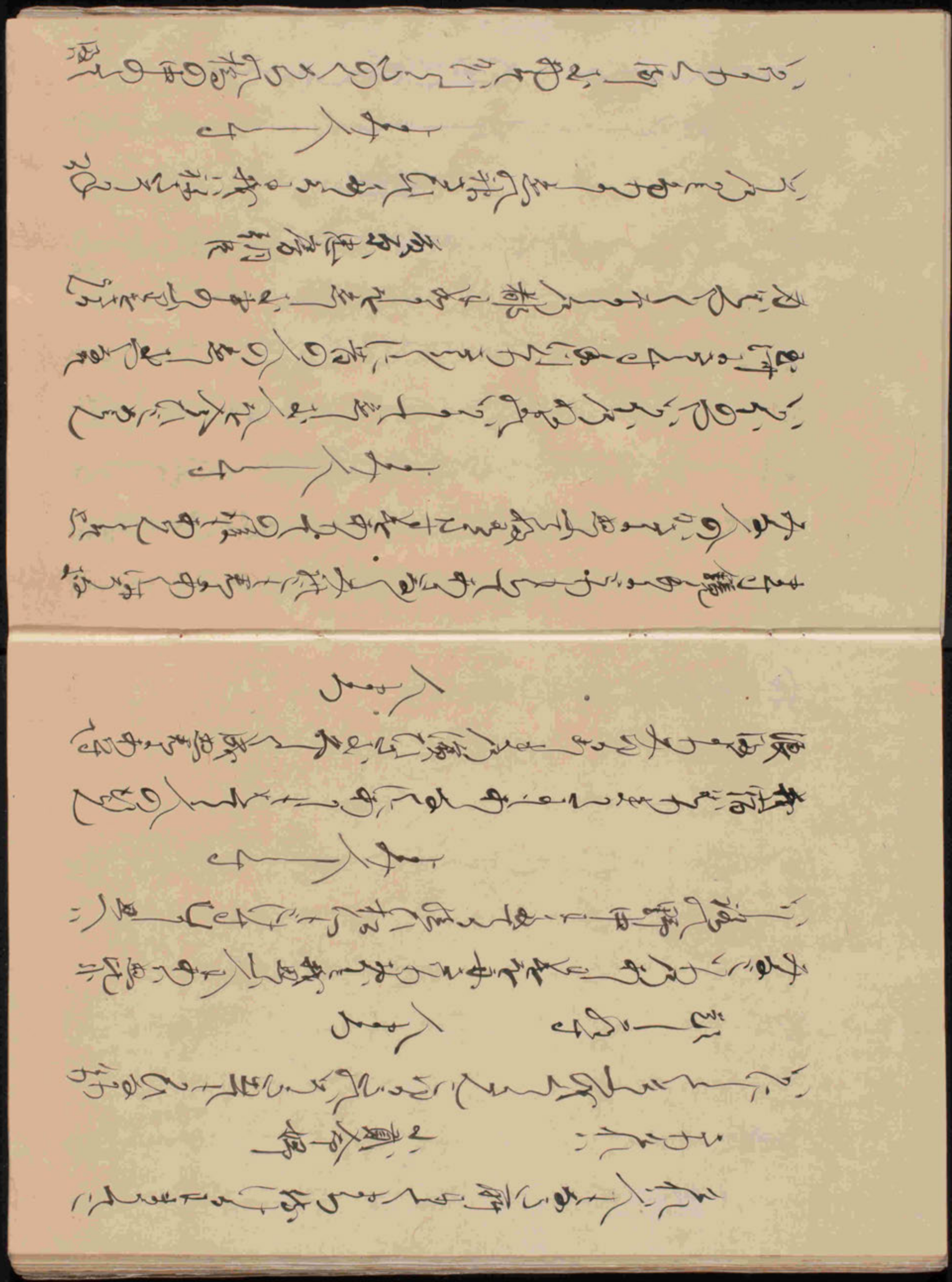
[illegible]

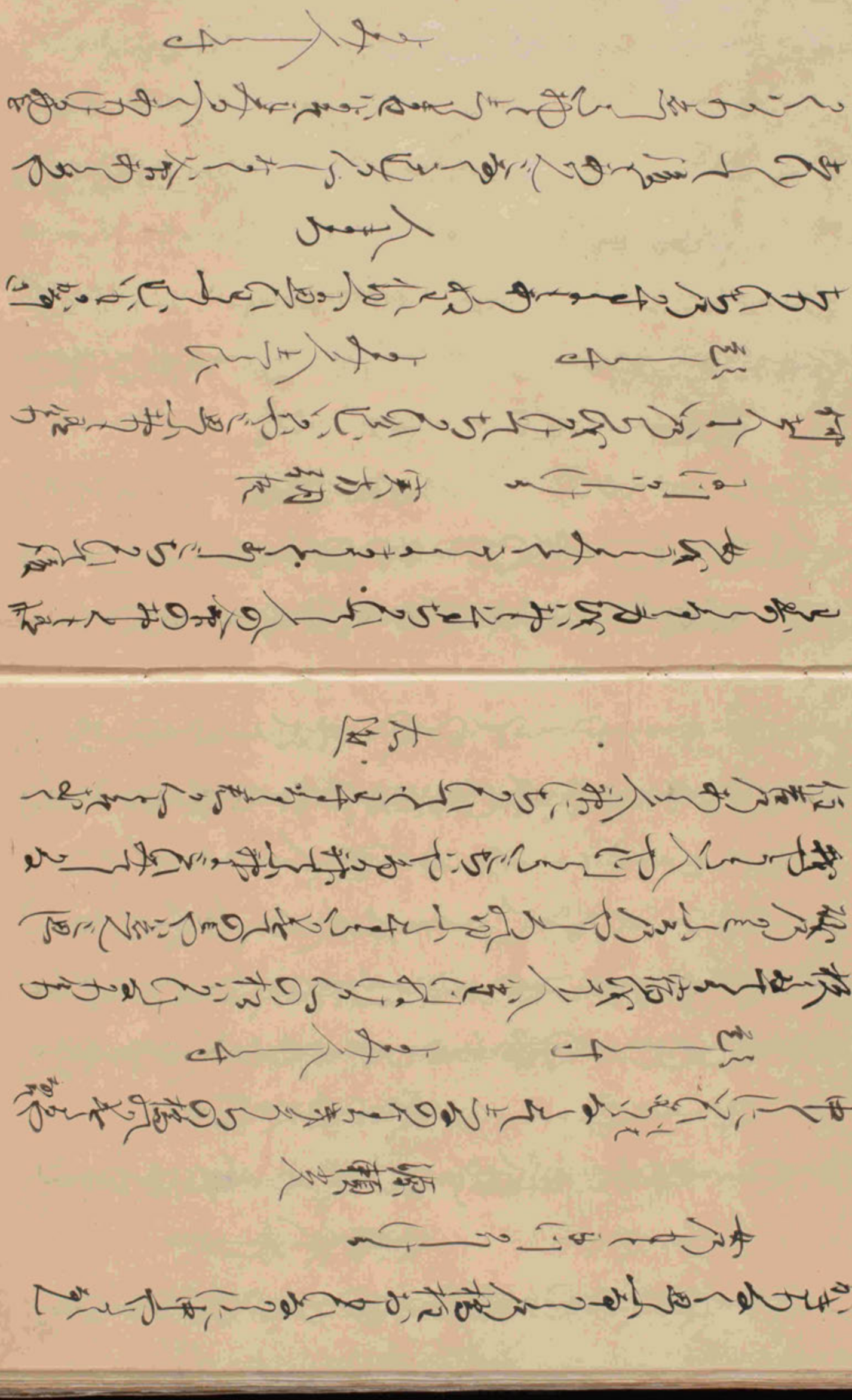
よみ人しらず

白浪のうちよせかへすたまもかるあまのすがたは

一條摂政御集

[illegible]





源川のくらはしをみるに仕まつる人のをとめゆき
川ゆき

たちそ河おりたちみるもつれなきをひとりぬれつゝ
万葉集和しらけるを

源さねふ

かりそめにこゝろとくしぐれてをとこ成ぬれはそ
女のもとにいりけるを

後京極

人をたのみおりたる源乃行方ちかけるを
天暦御時東香殿のまへをとをりて行てこと

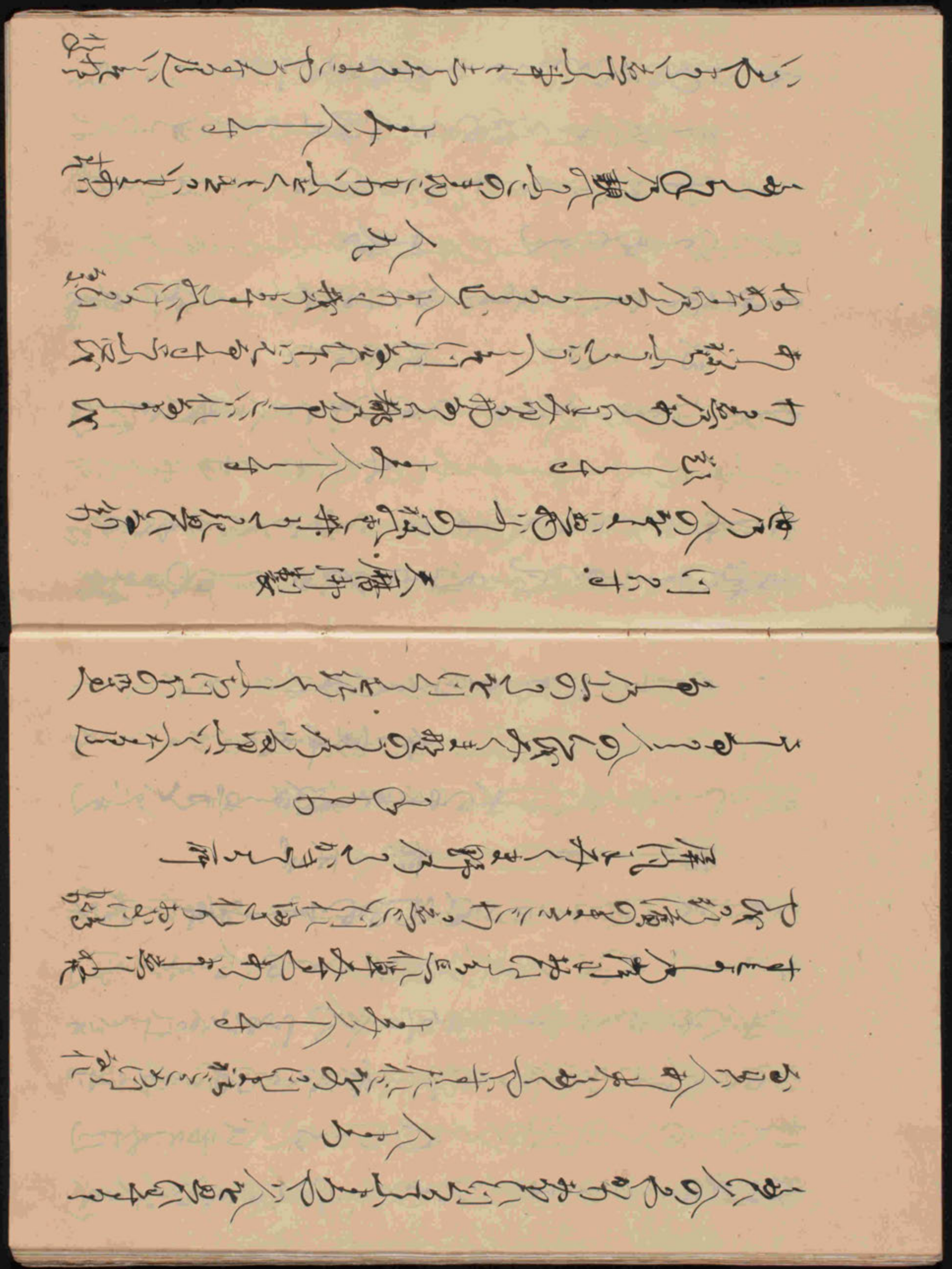
ゆるさまわるくもしたれい

斎宮女御

かりそつゝをるをしも水のをとをとはるゝ事をといたに
郭公

讀人不知

あさゝらやこゝ乃たちくゝ水いくゝの人のをとをとゝ
もに水乃おいるゝをきてをとり人乃ちをとなりてをとゝ
川のくゝ乃ふりはふくゝ思ふてをとゝ我ゝなるゝのをとゝ
津乃くゝのいくゝ田の池のいくゝ川くゝて吾うみすに
法の国のたまをとゝちにけるなこゝとをとゝゆくて



[illegible]

[illegible]

[illegible]

中將

うちなびくたれかとまるをりはへて
[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪井寺の人をもちて国に行き給へ
道を問ひてよみ給ける
人まろ
よりにありて雪井に分るいもの家にやどりしあるを
聞しる
よみ人しる
わりなく道乃ろこ問ふのいもに子とをの人の家
入道摂政問ひ給ける
れい
歌ひ云ふ所のよ乃めのくるふ所ふ
聞しる
續人しる
右大將道綱母
なけきまろ人ひろ乃おのえの引くしてあるけるか
をこたりたる人へ山ごてふ所給ける里乃
人へ
人乃ひろ乃を入おくるいもをさいて寺ねまうし
そもちの心すめ代ら乃ひろ所ひろく
後ろみ代やしけるひすてかなけくつ
りける
新なてあけるひろのきる鏡みす我方のうさと特
聞しる
よみ人しる
おもひます人へなけきいはんみうけ代ら新ご行の

わが神のみまえに人のこころを清くまことをぬきて
元良のみこの人々なども歌よみ給ふ所にて
いとけうとけなる
数々のみかみにまかりてはべりしこころを
詠ませ給ふ
よみ人しらず
なにはなる人人はまかりてはべりしに
みつの浜にまかりにたりしのうつりの
ものしたりしに
あまの浜にうちよせたる海松
ものうらにたちかくれてはべりしに
ものうらにたちかくれてはべりしに
みるめ
ものうらにたちかくれてはべりしに
みるめ
柳本人麿
ちはやぶる神のいがきもこえぬべし今はかぎりの
みけしなりけり

拾遺和歌集巻第十九

恋五

善祐法師すみ侍りける時母のいとまこ
ひけるをみるうちにかりのこゑのきこゆるに
よみ侍る　人まろ

何をかは思ひ入るべきあしたのみ
ぬしをしるらん

すみてのみ今を入江のあしたづの
いきをいとへばおきてこそゆく

もしはてもたづねこそすれ心ゆく人とうのやうにこそ
はなれてゆくらめ秋をしむ世中に分のあれば秋人はなれ
ぬるかとおもふ　人まろ

世中のうきをしるらん人やうらむ心
をしるやうにこそなるなれ

人まろ

立ちかへりすまあるものとなれば
ちりぬるかとはなれぬるかとは
立ちかへりすまあるものとなれば
立ちかへりすまあるものとなれば

重之

志しるべなくこゝろの行すゑも行方
よみ人しらず

志賀の浦に出てあさりする海人の
袖もぬれぬべしのれ思つゝ志賀の浦
なる海人のすなどりけり　大中臣能宣

いそのかみふるき世のゆめおもひ
出てよみ人しらず

かきりなくおもふ人のあるをだに
なほのびぬべきのびぬべしこゝろ思ひ

しこゝろ思ひ思ふ人の心をしる
身のうきをこゝろ思ひ思ふ人の
心をしる身のうきをこゝろ思ひ
思ふ人の心をしる身のうきをこゝ
ろ思ひ思ふ人の心をしる身のう
きをこゝろ思ひ思ふ人の心をし
る身のうきをこゝろ思ひ思ふ人
の心をしる身のうきをこゝろ思
ひ思ふ人の心をしる身のうきを
こゝろ思ひ思ふ人の心をしる身
のうきをこゝろ思ひ思ふ人の心
をしる身のうきをこゝろ思ひ思

さしてゆくあしたの雲はうすくなりぬるを人のうら

藤原有時

あしたの雲はうすくなりぬるをいかなるひとのうらみ

なりけるぞ

あしたの雲はうすくなりぬるをいかなるひとのうらみ

なりけるぞ

あしたの雲はうすくなりぬるをいかなるひとのうらみ

なりけるぞ

かきくもりあめふるかはのさゝ波のうつりかはるは

わがこゝろかな

源重之

かきくもりあめふるかはのさゝ波のうつりかはるは

わがこゝろかな

降雨を出くしと思ひわかぬ神のをとゝはたちまちに

よみ人しらず

おもひそめてはかきくもりあめふるかはとのみなるゝ

ものをこそ思へ

きくもりあめふるかはとのみなるゝものをこそ思へ

きくもりあめふるかはとのみなるゝものをこそ思へ

女のもとに雨ふりけるときのめをりに

源景明

九月ばかりに思ひそめてまちわびぬ冬ふるあめ

[illegible]

よみ人しらず

[illegible]

坂上郎女

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

兼香公中納言

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

左大臣女御うせたまひにたるのちに

天暦御製

いかにせんとてかうきものとおもへどもあはれにくやしかりけり

女のもとにつかはしける

平忠依

[illegible]

[illegible]

[illegible]

拾遺和歌集巻第十六

雜春

[illegible]　　九条内大臣

[illegible]　　よみ人しらず

[illegible]

新[illegible]年[illegible]

小家屏風に

[illegible]　　右近

延喜十五年[illegible]　　弁院屏風に

[illegible]　　紀貫之

[illegible]

[illegible]　　中務卿具平親王

[illegible]

[illegible]　　贈太政大臣　菅

[illegible]

[illegible]　　[illegible]

梅のはなをよめる　よみ人しらず

春ごとに花のさかりはあれぬれどあひみむことは命なりけり

いつ年か春をしうつしてわが宿の梅の花をもとめ来るらむ　中納言安陪廣庭

天暦御時大なへ所のまへに雪のすこしふりけるを見てよめる　一条摂政

雪乃色にあらそふものとみるまでに梅の花ぞ春をまちける

梅の花をもてあそびてよめる　源寛信朝臣

むめ宴をぶ也行ふ殿上のをとこどもに言ひつかはしける　参議伊衡

ちりぬべきかをだにとめようぐひす　源宣信朝臣

折てみるたびにあはれと思へば梅の花の色のみにしぬる

内裏の御遊ありけるに　参議伊衡

かをしたづねてきたるうぐひすに梅の花を思ひ人にとはばや

清和の七日みこの宮の賀の屏風に　源重之

春ごとに花のさかりにあへぬべし　源重之

かをだにとめよ　源重之

春ごとに花のさかりにあへぬべし　源重之

梅の花をもてあそびてよめる　よみ人しらず

法皇院御時三人乃屏風十二帖詞の中

源順

梅の花ぞのにうゑてみるひとの
心のうちにかをりぬるかな

みよしの山ちかき花のもとにて
みなひとくにまうでたりける

右衛門督公任

ちはやぶる
神のいがきに
はなぞ
さかりなる
ちはやぶる
神のいがきに
はなぞ
さかりなる

春宮の御屏風

ながれ
ながれ
ながれ
ながれ
ながれ
ながれ
ながれ
ながれ
ながれ
ながれ
ながれ
ながれ

延喜十四年斎院屏風に霞をよめる

ひとはみな
かすみのうへに
なりぬれば
ひとりぬれぬる
ものをこそ
おもへ

小一條の家に陽成院の
ものがたりの
ものの
ふるみちの
ものがたりの
ものの
ふるみちの
ものがたりの
ものの
ふるみちの

春日野の若菜のつまもとめてしかあるしるしにあらしみぬるかな

中宮内侍

女ぶねとまりかはしたなの雪にはけてけりけり

藤原長経

雪ぶかきみかきはらにはけりけりとはるのはるのはるの

大中臣仲宣

はるのくれ　ゆくかとおもへば　あるかぬの　袖のみぬれて　ふるかなしさ

除目のころ　ある日　あるひと　俗名　摂家更衣　物わすれ　はてぬと　見えしものを　いとて

ものもすと

ゆくへなく　なりてやみぬる　みなもの　行方のいとを　よそに　見れば

康和二年春宮義人　ほうて月の内裏歌

重日　うゆ　ひとて　こてらいとこの　こえを　命

ぬのしたの　うらの　ふる　ちるふ

ひとへに　ものを　おもひ　ものの　ひさ　人を　ものを　ものを　ものを

よみ人しらず

郭公　なかぬ　なかぬ　なかぬ　なかぬ　なかぬ　なかぬ　なかぬ　なかぬ

山里の　家の　いけみず　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ

右京の　ものの　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ

女房の　野の　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ

よしの　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ

右京の野　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ　ながれ

賀茂法師

春のよのうつゝみ枕しなうれば春と所花人のうたゝね

よみ人しらず

飛しら雪とのみ見えつる櫻花まちかねてこそ咲るなりけれ

みつね

さくらゝ花乃たゝまの山ゝ櫻ゝるゝ春の新のこゝろきみれば

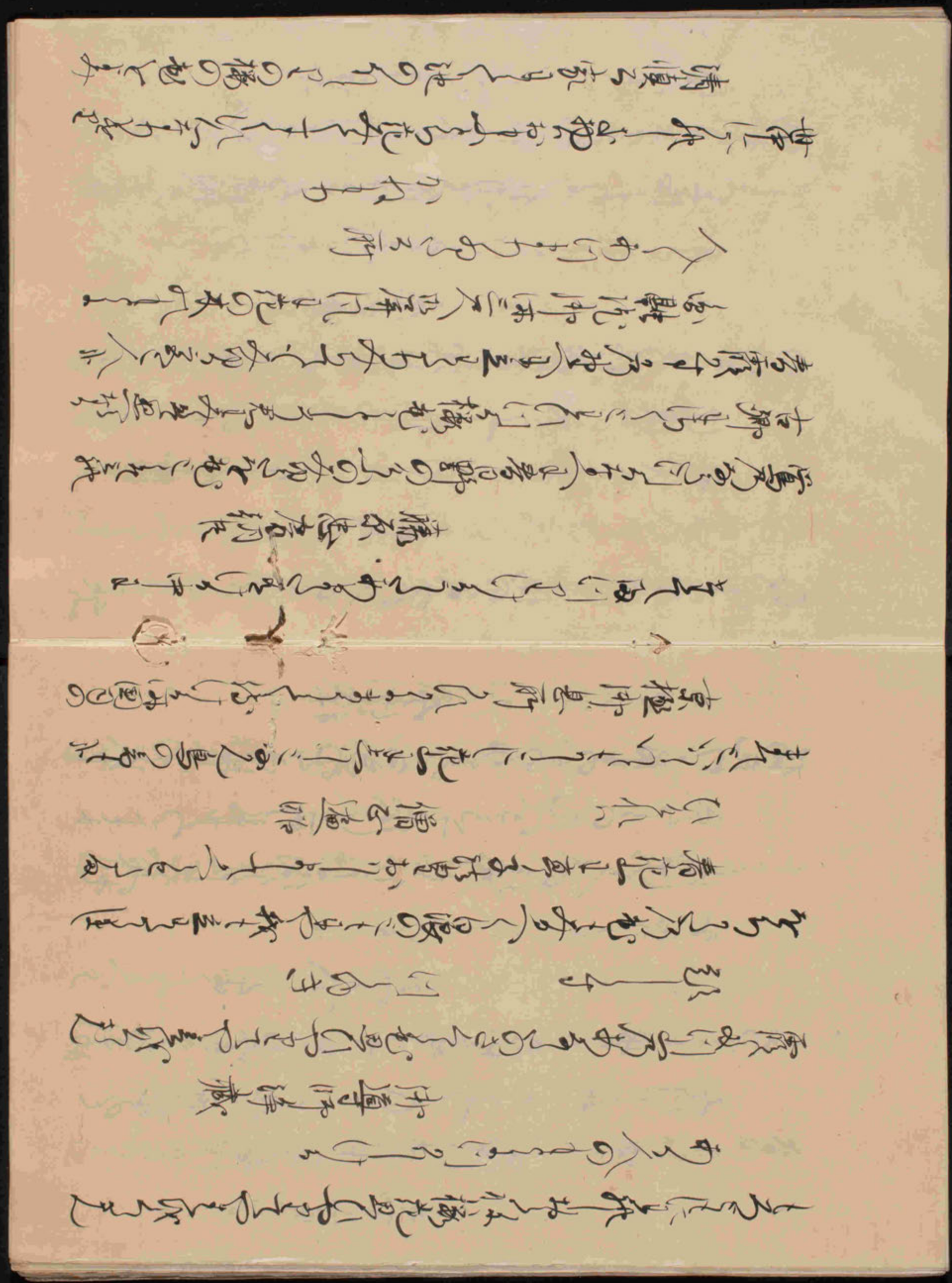
よみ人しらず

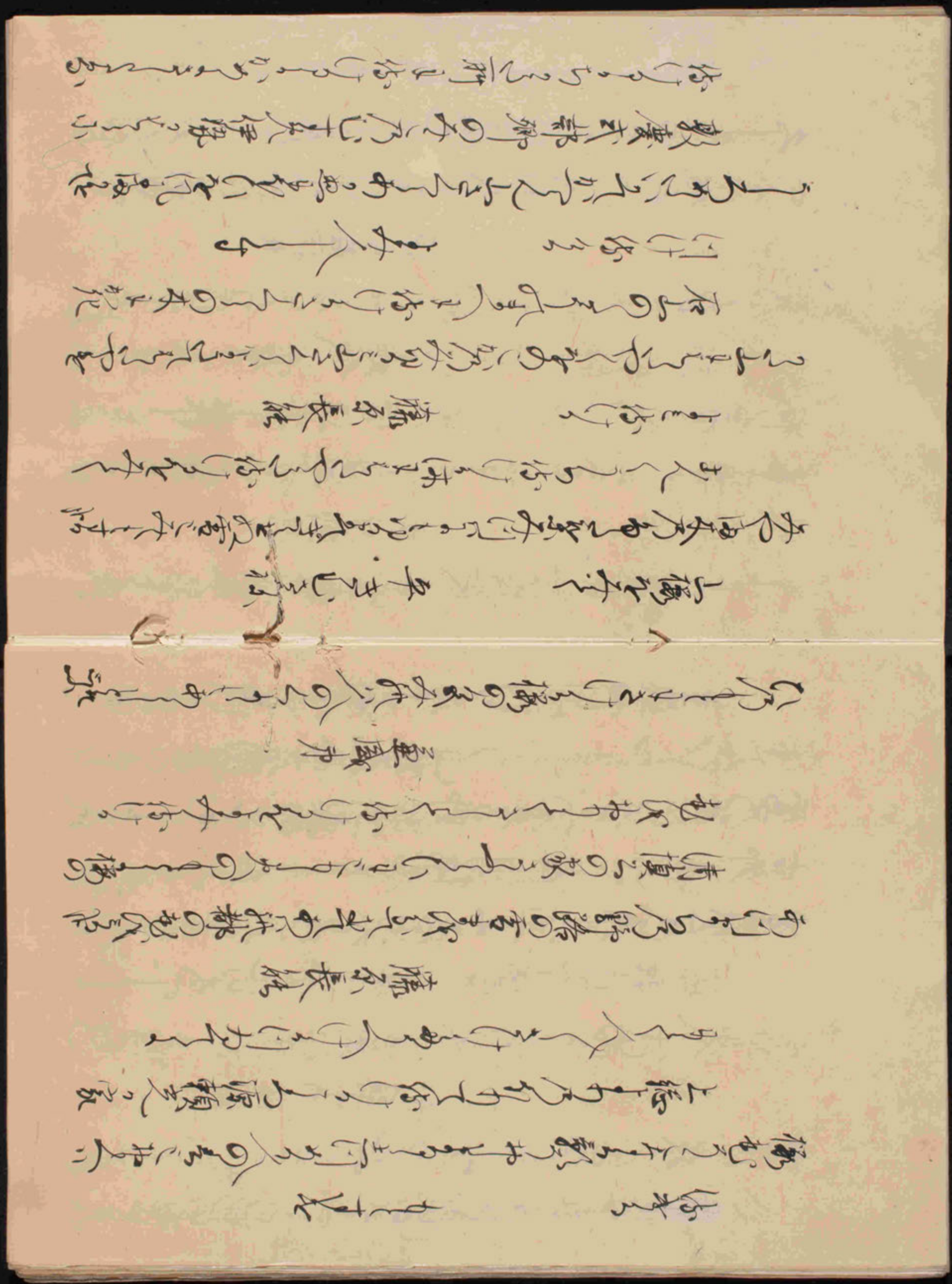
河とこのゝ乃こゝろ乃山ゝ櫻ゝ花ゝ乃ゝ心しつゝ祐ゝ乃ゝ花

延喜内御月次乃屏風のうた

みつね

櫻花ワ乃宿ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ櫻ゝ花





[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

くいすて山ほとゝぎす　一條乃きこ

本乃ましりのくら花あいさきぬめ者のうゑ

ゆゑ乃山ほとゝぎすなくこゑ

て俗れいなけうまうはをとゝ物のむかしより

たちり乃こゑ　物ゝ枝ゝ引きてつゝりけり

[illegible]　如覺法師

[illegible]

右衛門督ゝ任こゝちなけうゝ日月一日に

[illegible]　左大臣

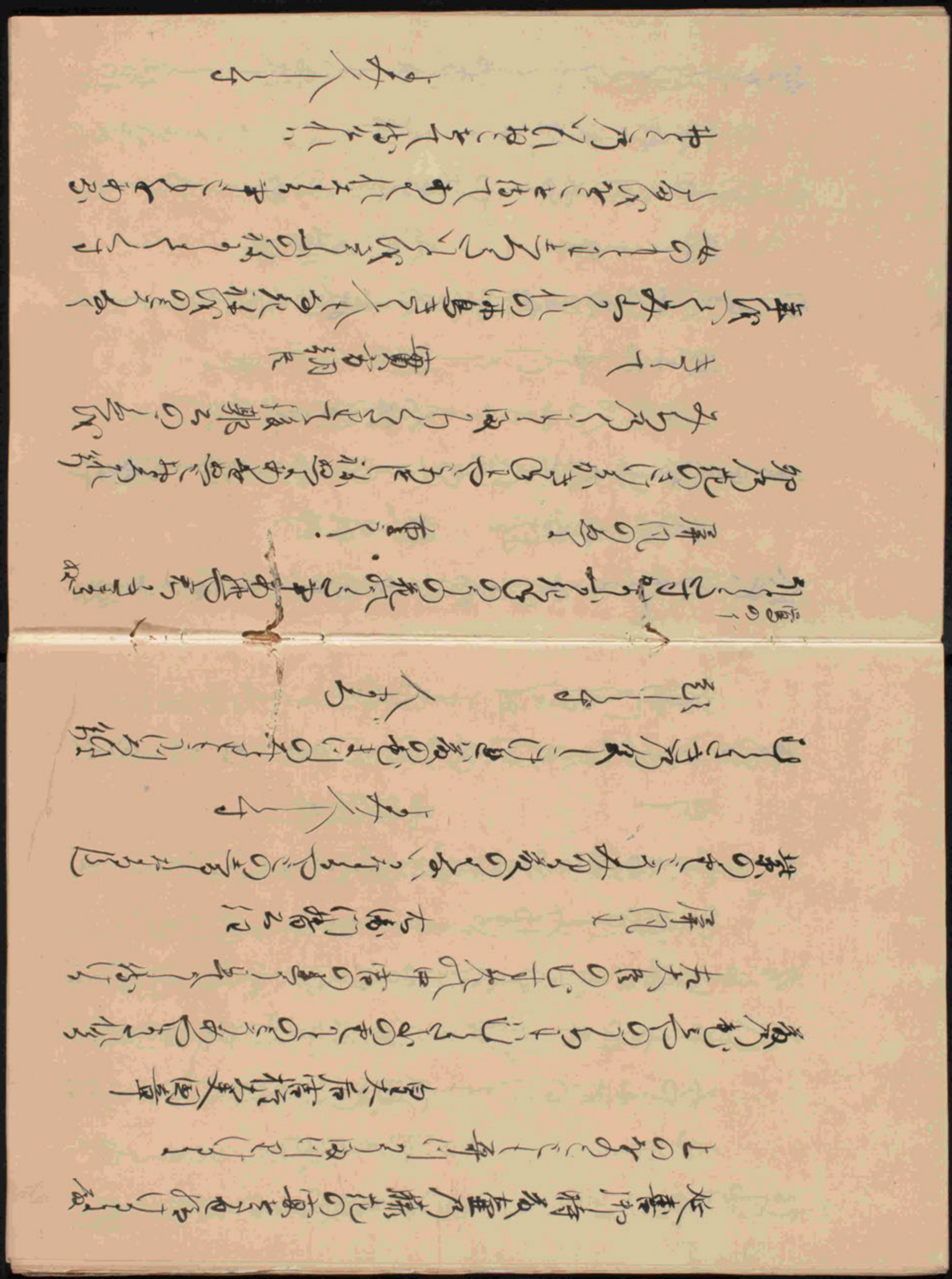
[illegible]

[illegible]　右近衛

[illegible]

[illegible]

[illegible]



如月十日ごろ、ほうぼうの花見に出でたるに、

廉義の家障子に　元輔

つくもがみ　とまりにけるかな　ほかの春

　　　　大中臣輔親

拾遺和歌集巻第十七

雜秋

屏風に七月七日　源順

あまのがはにしたるしたかはのいとをとりあはせたる

圓融院御屏風に　ぬるるあはせしたる所

にまうでたるをとこをてら　平兼盛

織女のあまの衣ぬるるまでなるこそ

七夕後朝みけれはもとりけり

けるかな

朝戸あけてあまの天やとりむ七夕のあまの衣を

見しるかな

七夕後朝みけれはもとりけるあまの衣をとりて

人丸

あまの川こゑ一年をこそいとはめ

見しるかな　天暦御製

あまの川こゑのあはれにあかつきの

よみ人しらず

たなばたのむすの緒をとりてとて

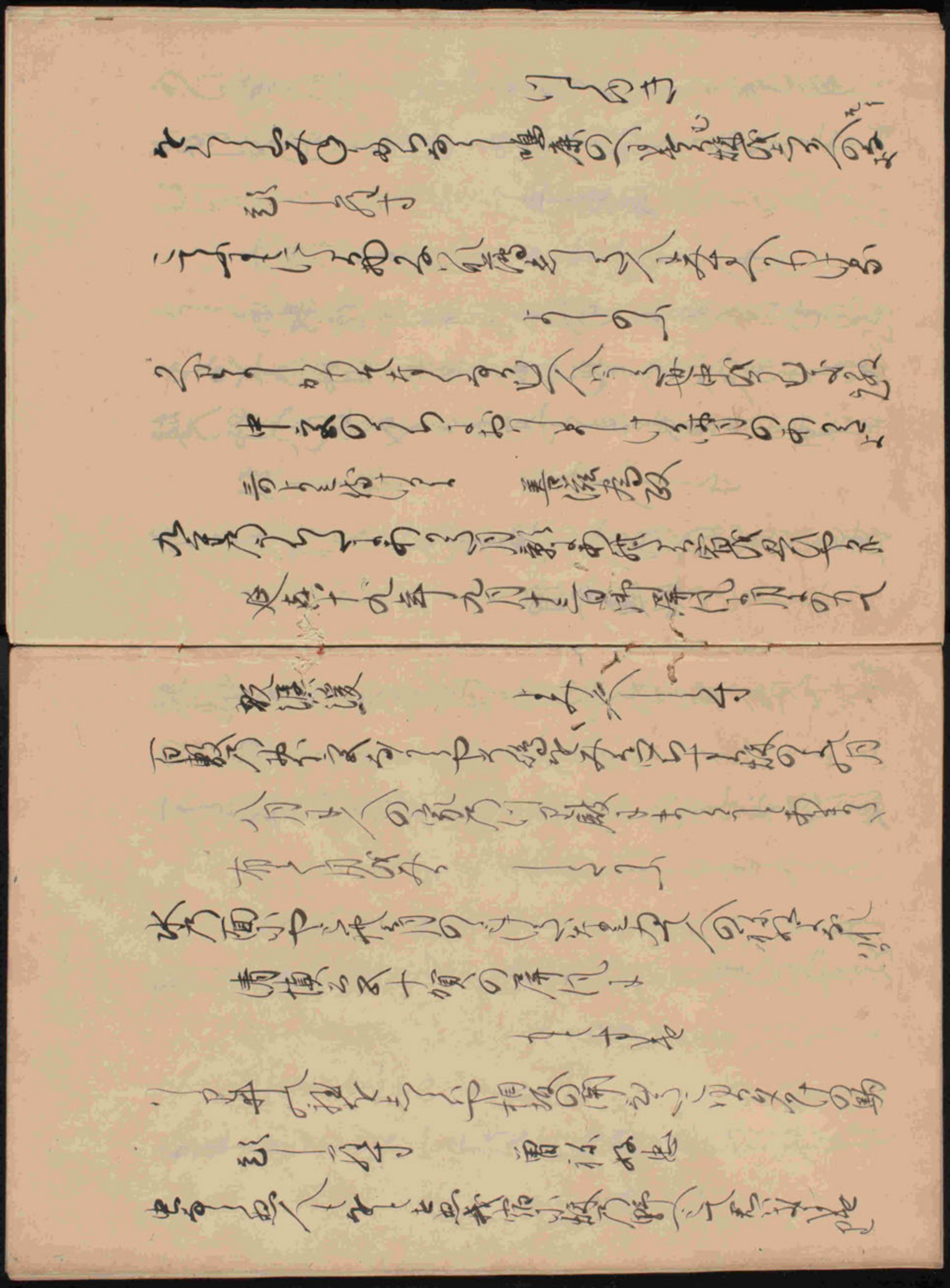
天禄四年五月廿百函融院のみこ一品宮と

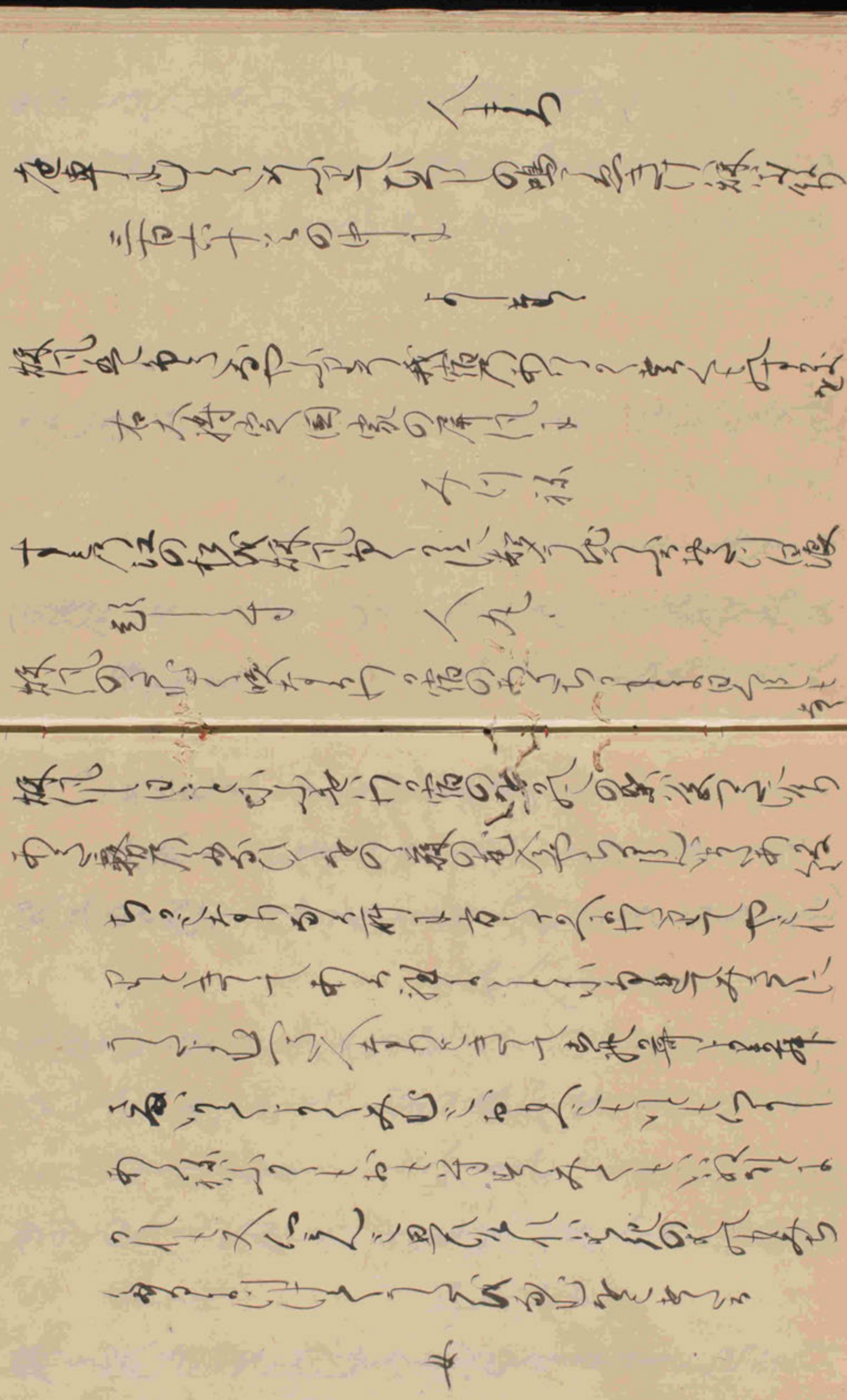
もろともにをこなひけるまきをかけ

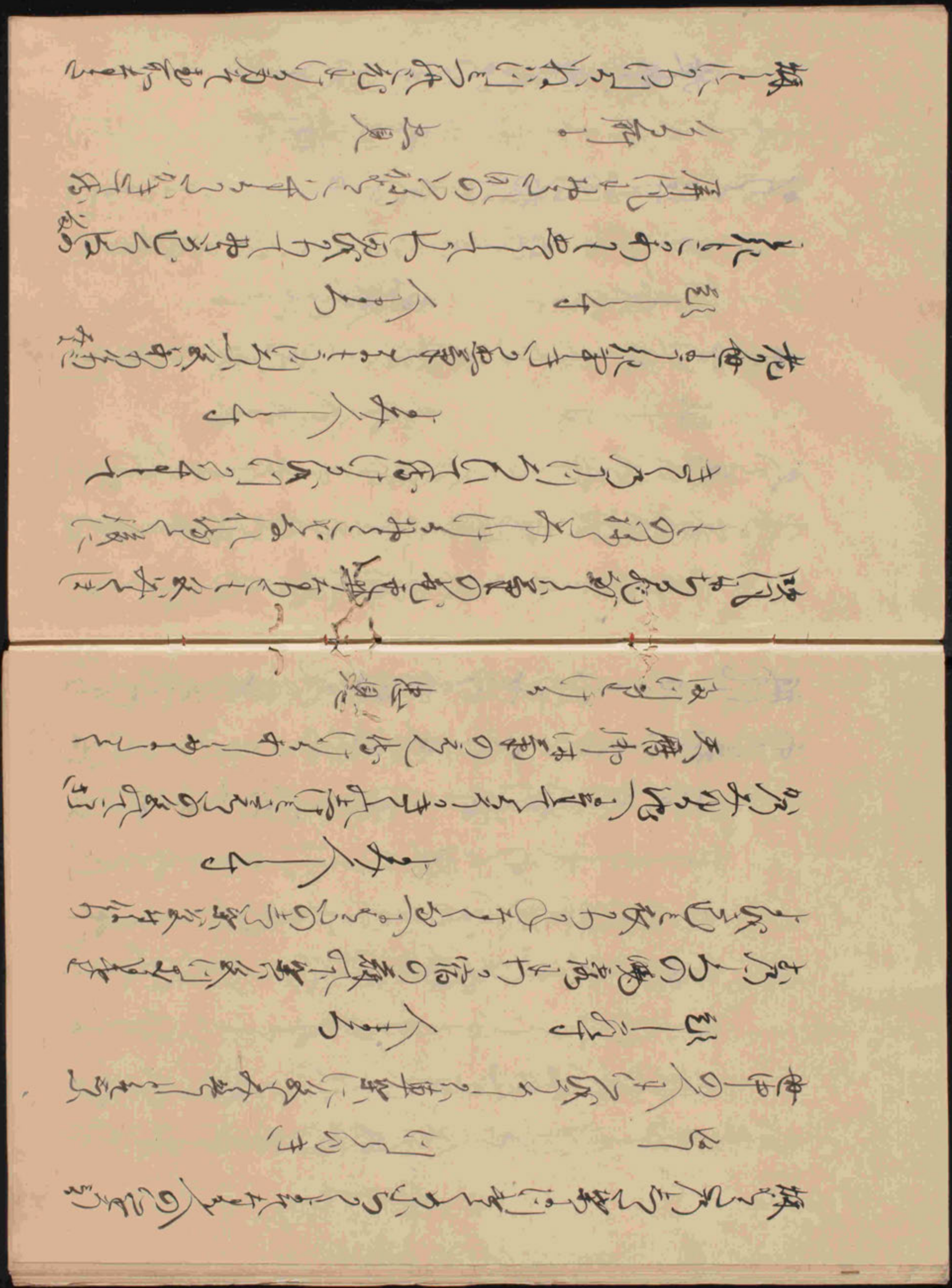
[illegible]

[illegible]

[illegible]







延喜御時月次の屏風の歌

みつね

かりくらす山田の稲をかりあつめて田もりいとなむ人の

もとへ　はるかなきよりの歌にて春のまち

けるをみて

恵慶法師

ゆくすゑはまつ　ゆきてみるかの紅葉　今はの紅葉

詠　よみ人しらず

久しかりしかけとみちの紅のこゝろうつすとしらなん

寄子院大井河　よみ人しらず

つくづくとかりくらすかとおもふまに　ゆくとしのをしさ

ゆくとしの屏風

小一條大臣　貞信公

小倉山みねたちかくにほひあらば今一たびのみゆきまつ

こゝ

ゆくとしの屏風

大中臣能宣

古郷はかつらゆくとみくやま田姫とみちの都をとゝきすら

詠　よみ人しらず

白浪はたちかへるとやの紅のこゝろのうつりぬきけるかな

みつね

みちのくにかりくらすはいかゝあるとの紅葉の

弁院の屏風に

水のみなかみのもとめゆくとてみやこのもとより遠き

門裏御屏風に　清原元輔

月新しるるこゝろはきよくれぬ秋代をいはのもとみなわ

義人所に　藤原

ゆくとてはるかにて京に侍るつゝみをとゝし侍

こゝろけ秋い

いそ行わたりのいはゝしにかけてのみれとゝ思ひ

秋しるし　よみ人しらず

ちるとこそいふ詩のみちもたゝてちるこゝろ

九月にしもの野に　源順

ちりのいはゝ女野にあるいはゝ

ときはなる

いるはいとあるすゝきあるくに枝をそのもとにいとを

十月ついたちの日殿上人のこゝとうの野に

はるゝて侍ゝよみ

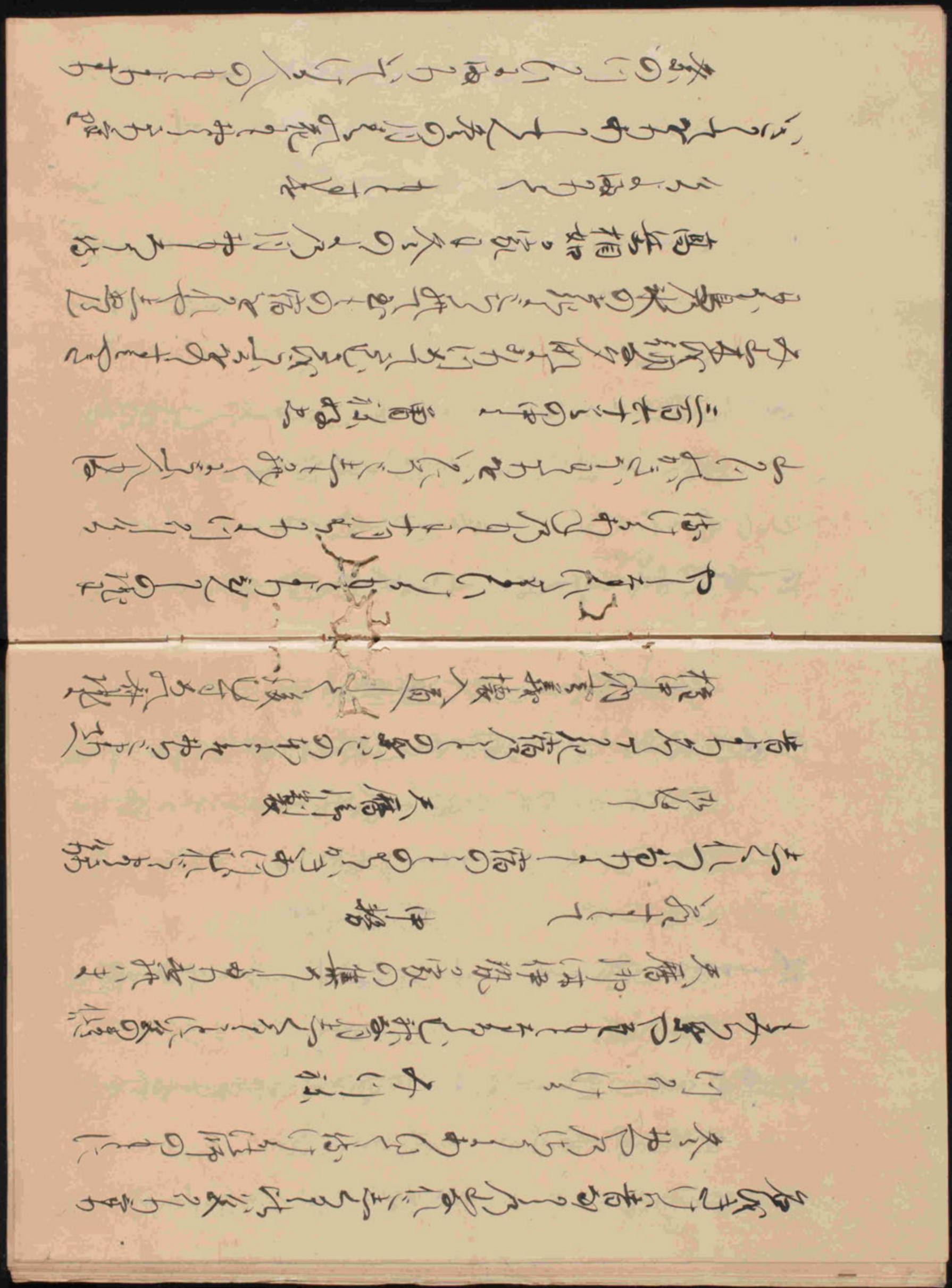
　　清原元輔

炉とまるゝ炉とあるゝねはいて行さの人はゝ

時雨に　よしのふ

うは山とゝ炉にて神なゝ月河なくゝすゝまこゝあるれ

十月ふつかの山ゝ　源順



ちるまもちりはてしけるをうしとやちるを
れい　　東宮女房左近

かぜのくるくるにすれどもはるの山井の水はゆるがぬ
をとはあるとはあるを人のしるらんを
あしたとうきをみるけをうへていふをみと
れい　　よしのふ

春のいろをすれどもつゆをうしとやいとをぬきに
右大臣垣衣家屏風に源時茂かきて所
何はるの山井にすれるつゆをいとをぬき
けるかき

ちはやぶる神のいさめを雪ふりて結
ぶらんのいろをきわとやちるを雪の
雪ぶしまくのうきはをみけるやう
くきそはれい　中務のみこ　長平

春のきをみてをちのきをみてをすれば
春のきをみてをちのきをみてをすれば
東宮御屏風に冬野やく所
藤原通頼

さくらやちるとはなん雪ふる野りのうぐひすなきぬ

たいすのけさちるこゑ方のうぐをあけて

けりあき

春のはるみやまぢ梅いさうとはちるを我方あんとくすわ

西なりこゑわはすとてくちなりこなりあり

けりあきるこゑいをこと作て

三統元夏

梅花ちりぬ名ゐうみ光けりちぶこゑのちるこゑ紛

のへし

けりあき

むさとうれちうこてうあ代まり体とうれ光ちゆ

たいすのけさちるこゑ方の光ちるこゑ紛

けりて

むさとうれちうこてうあ年こ紙てうみの彩と

九月三十日雪

拾遺和歌集考第十八

雜賀

延喜二年正月中宮御屏風元日

紀貫之

きのふとはあらたまれども三とせまへのはるのかすみは

屏風に

伊勢

ちるまでにみもとをしてもはるのかすみかな

九條右大臣十賀屏風に行ひ所にものを

ちくあり

もとすをを

花のえとをれるすをうつしをる屏風

をちかたの人の袖ふる花のゆきはるかぜにまがふ白雪

さくらばいろかをうつしてをる屏風

三のよそをいとはけれ

よろづ代をかねてぞあきのくさのはの

東宮のりのみやの屏風三十二をつ

みくにをりをむこもりをかこてきいをけり

よみ人しらず

若草のつまもこもれるのすをみるとりのこえもいとはず

賀屏風人の家に松のもとより泉いでたる

所をかき

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五月五日ちいちろかうちまきに山すをのこ
へくらぬ人はさの網代にすゆるかがりて

春宮大夫道綱母

いさゝかの紀みさうりうもいちとせの月にすまし見
天暦四年右大臣五十賀屏風に

清原元輔

あとをたゝ思ふ人はこのわたりにぬれてゝ
東三條院の頃左大臣のしはけるかくらの
かゝりをゝりくうるよみはけるに

右衛門督公任

君の世を今いくよとかいはんかくしけるこゝろあるべし
右大臣家にてわかめをすめてゝちもめけるに
あまにけるうるをくるよるをはけるに水
樹多佳致といふことを

すみうしるすまのあまみるかの松ぬけとうにせい
あるくの頃しはけるに

権中納言敦忠

ちとせふる亀の鶴をいとゝもあるくるあるとうあける
清和の女七賀を八十賀を月のみこのしはける
はの屏風に行小雪のふるとうちるるある

所見

白雪ふりつゝせこしとる世をいかゝ行末思ひやらるゝ

こゝをこそみちのくにしるべなりけれ

ゆきすゝむ

世中にとる事ふりすぎにしかりてこそ命のくゝ

中持はなけれ右大臣雅源致方卿のもと

へやをこそうらやくをおりくにいはしてゆ

流佐乃介見はるすゆ物も

右大将實資

しのぶの卿に

おもひきとすゝきのしたをみる

ゆふ月夜ほのかにかまとのもとやうち

こゆるなけれとみちつゝ見なはしるまよふあくかる

いけはくなる

春小雨煙はいまるくかまとの

春ときちとふとくそ

ゆきすゝを

きりうみ林乃ふりつゝ心すめのすこうう侍

藤原忠平卿に

おもひたちぬるふとあり

かゝるてあるうへあれば考かすと　心もと

ゐもちもろこしやすは府内に海ゐてをうくるとき

と行れい

くすはつやゝ今よりくはゝるこうし給れい

らふやこうれいちけちもあれ

よいとくうあかこのこゝろてあかれける

天磨仲製

さよあけくいまは秋ふくる成まを

仲おはこうこいこゆうしける

上武金枝

ふけのつゆ　上武金枝

四はこうあり

まうくよりなゝ人をちるとて給けるあをとうく

きてはゝ乃いつりける

人もちうしみりとい立のまよ

夏今宗貞

夏よみのやこ秋すすしけるよける

秋——す

平宗文

ゐこうをいあはよりて考的のいすのうるいたり

よみ人しらず

ちはやぶる神のいがきにはつ雪の
降てはかてる冬の夕ぐれ

藤原義孝

ちはやぶる神のいがきにはつ雪の
降てはかてる冬の夕ぐれ

源重之

ちはやぶる神のいがきにはつ雪の
降てはかてる冬の夕ぐれ

源頼光朝臣

ちはやぶる神のいがきにはつ雪の
降てはかてる冬の夕ぐれ

藤原為頼

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よみ人しらず

[illegible]

[illegible]

[illegible]

也ことにてかれい

[illegible]

人のこしてせけるおくの書けをけ

かきけるくらべみてなりにおなじ

大納言朝光卿

乃ひて母ちくわ

春宮女房人丸道

いと[illegible]の袋とて[illegible]

入道[illegible]母ちく

りけるをみて

春宮大夫道綱母

うつりかはりてせるをみれやこゝのよのんこと

ゑしらず

よみ人しらず

いそのかみ[illegible]

東三条[illegible]

東春殿女御

[illegible]

母なりけれい

大納言朝光

いとゝ人いとの[illegible]

中納言平惟仲公しゅうりてきうこして侍る
也ことはつる也侍る　之階成忠女
為ごとの乃と思ひたまへわすれ世中をなに今更のおもひつゝむ
郎　源忠綱卜
人しれぬ所なしてゝ為ごとわすれをきうきをうきつる
左大将済時うあひて侍けるを女にてよ
はるかるとけるを実方朝臣の役をく
るとはけるを同者くうひとけるを
しられい　藤原後生女
多をいきのかたらいきこゝめしに我方のうきをけるてを
成信朝臣法師よりむしてをいしつる成り
て京の家をまうしをこゝ付つりをと
それかきけるを侍ける
則忠朝臣女
いきこゝもるを志思るかいてあやうく寸方より外ろ
むくしをそれ

拾遺和歌集巻第十九

雜恋

題不知　柳本人丸

みちもるの神のゆるしのみけりこの文しよせもりもてる
いなりは雨うるおしあめにかけるなのとのそのを
かけれこいてへとしるしなりもれい

平定文

いなりやまはるはへにけりたれをかはこのこころ人
彼しる

柳本人丸

みしはるはのもとのもりをのこころいまこそ

大中臣佐宣

あるさりこあるこのいちもんの人のこの人いとるやを
よみ人しらす

すくるのいちのあてやるのあてやるのあてやる

河ゝとはいくはのまはしにさくらの花の散るを人の教へ
まつ花のはなけるはるはまちのまゝをはらふ
はけるこゝろあすはへうゑはなを見るとてはけるよう
ゆうけり
小野宮右大臣
ながらへぬ人もうらやみのこゝろの花ちるとをしき
明日香采女
池水のそこまあてはいかなるしるしにかはは
中納言敦忠卿
つゝもるとはけるはるはしのいて
仏の
右道

人をいかなるものとはいはんとしのちやまるをしるよるの弱
思ふとまるこゝろ所はようこいけるをのもとは燈
しのびてまうこゝをしるこゝろのこゝろ
燈ちるの花ちる人をうゑ宿なれはこゝのうちをしる所まは
彩しる
よみ人しらず
ちるこゝろのうゑてはいちるこゝろ
人のゝはけるはるはこゝの人やはてめとへ
ちゝはけるはるはこゝの人やはてめとへ
このいつるこゝろきしのかゝ変ひるこゝをしるこゝはいちるを

やまとうめのうつるこの方にうつしたる待

[illegible]

もりかのあいるいてきてうつしたるのしてもこの

ことくいたるまつ秋の沈木の色のあるを見てよ

[illegible]

うめ川をうつしたる人のいてのかたのうつしたるの

頃[illegible]原はみかの使ちてのあるよかた

の色よさしてたの小方のもとをいけの

りけり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かたいとなりぬるかはけるあまのをぶねのなかのあさ
ぬきまつるとしのくれ　天暦御製
天暦のとおんまとしのくれにあたりて
よしなきひとのもとにつかはしける
思ふらむ乃とてやとしのくれぬるを
ものいはぬ人の為
しらぬき
山ふかき里は雪のあけくれてくらす天暦はいつ
書日山ぬ井ふくぶくぶくしかれ天暦祐四へ
物へまゐりけるみちより反りけるひの為に
坂上郎女
わるをこそまゐるとなれいまあらぬ人をいとはる
人乃くるへ反りけるまのをかしけれ
恵慶法師
をみく
古郷ゆふるをもとかうあるとなりあるを経り
仁和の御屏風にもあまをかりて所よりける
なく
大中臣頼基
たかきやま乃ふもとのをぐるまをいとはるる
まをくるまをくるまをくるまをこの乃天
よみ人しらず

川社くにおとゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一条摂政下臣うま屋けるかはの河原香炉女房日記

けるかはのしのびてあひけること

をこゝろにておけ秋の野中をこゝろ

にかけしちをれい

市姫御歌

うれるこゝろあるしの秋の野の草をこゝろ計を再に

見しかな

よみ人しらず

みるかすまの月にまかせてあひ見ては我行末は

見みぬ秋にすまのゝ月をこゝろ

延喜御御中宮屏風

夢うく

いかにせんこゝろ乱るゝこゝろ

いるかはまのこゝろ

こゝろ人にあひてけるしらずてけるこゝろ

藤原長能

我こゝろいるとゝ乃秋に

稲荷乃ゝ女のてゝ伊のこゝろと

滝の水かゝるとすれ

よみ人しらず

元良親王御

山なるゝ

女のこゝろ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

拾遺和歌集巻第二十

哀傷

しるべなきこゝちのみこしのぼりてのち
むすめのゝ家の花をみていとかなしかりけ
るをりふしをよみ侍りける　小野宮右大臣

さくら花のちりけるまゝに人をもとゝ
ゝまりにけるかな　平兼盛

あるかなきかのこゝろをもてこの花いく世の春をへぬらん
清原元輔

花のあるとやどにはのうゑ木のうゑかはるまで
人中臣祐宣

梅花ちりぬるにはにうゑけるさくらのそめおもふなりて
おもひきて侍る　大納言延光

尼になりてのち梅をもとめてうゑさせ侍
中納言敦忠

ちりてのちをしみてのち
その人のもとにつかはしける
侍りける　一条摂政

いまはとてやどをいでしのちはこの花をみてもしのはん

大膳職門ゝく秋なれて又のゝ草の露の音のみ
つゝ袖のみちのくもりけるかな

女房人長庫

月ゝ見ん夕べ雲まなしあれはわれ草おもしてゆ袖のみ
ぬれぬ

ちゝ
ちゝ
ちゝ

中宮のくれ給へりしの袴おの前載は
露のをきそふる秋風の吹なびかしてをりをれ
しく

天暦御製

姥捨をいく夜の月のかげよりもとはるゝ人をなをうらみそ
妻戸開てくれたる人のこゝろ姥捨山の月をみる
人まろ

ゆくすえ姥の月見てをとこゝろいとゝ遠さろ
来雁沈乃御四十九日の法事よりの沈の
おしる霧のうちもとて沈けるをみく

権中納言教忠

思ふてをりし朝きりの袴とゝ沈さうのうりけ
けるさ乃沈ようの袴のうたをみく

人まろ

わるとるの袴くれ給へる沈さ澤のけのむしもみうるのお
彩しをり

よみ人しらず

いつとなくあるを世のすゝ孫の衣八神乃世界四日ろうるき
服ぬる袴をく

藤衣ちゝ〳〵すゝ川ちるゝ八きゝと成さ水をうて
黄衣ちゝ川をうて黄の玉八拾よやたちゝ

恒徳公の服ぬる袴をく

限りなき思ひをしてけりあらぬ衣をうちかけて
うつのふつかのあさけに
をとこはうづ
をとこけりけるを
人のもとにはかりきぬ
おもかたをくしてなけくこよみかけり

藤原道信朝臣

あらぬ衣をいとどしきまでなくさはる
年ぬけぬるかなとうつ人のこと
ふとてあいこ人のもとにはかり

人江為頼

ふるしま
ふるたまし
をとこ
をとこ
ふるしの神いやしの森のもりすぎにし
ふるしの森のこのもとの
ふるしの森のこのもとの

よみ人しらず

紀貫之 長谷寺ニ詣テ大道ナルヲ

雖徳ニ乃小方ニ
あらんこいかなるあまの
昔みし人くもかくれにし
くもをみて

義孝卿 後拾遺ニ入ル 春宮亮ナリ

世の中にあるかひなくなりにけり
なり

右京門督ニ任

藤原為頼

常なるものとはいふ方ならぬ

あやまちくいけるこゝろをこのごろいかゝ
ちをれい　伊勢

なきひとをしのぶのこゝろを思ふにもあはれまさるかな
もゝしき　よみ人しらず

うしろめたしいかゞあるらんおもてさくるはるのまつ
頼のるるくなりけるこゝろをこそしりけり
けり　清原元輔

あしやまのあるのもりのはくまなきをなるゝ人の袖と思へば
るゝをくれこゝろみよみ給ける　平兼盛

なげかわるこのゝしたもとりもなてはなれ思ふるぶ
大納言朝光の女御まうのぼりたまひけ
まゝきて給てけるよりわすれなゝ給ふ
こゝろる馬助ちゝしをなくるりく給ふれい
藤原共政朝臣妻

我乃をやこのゝうこゝをみるへくて思てなけくゝきこゝろ
のへ

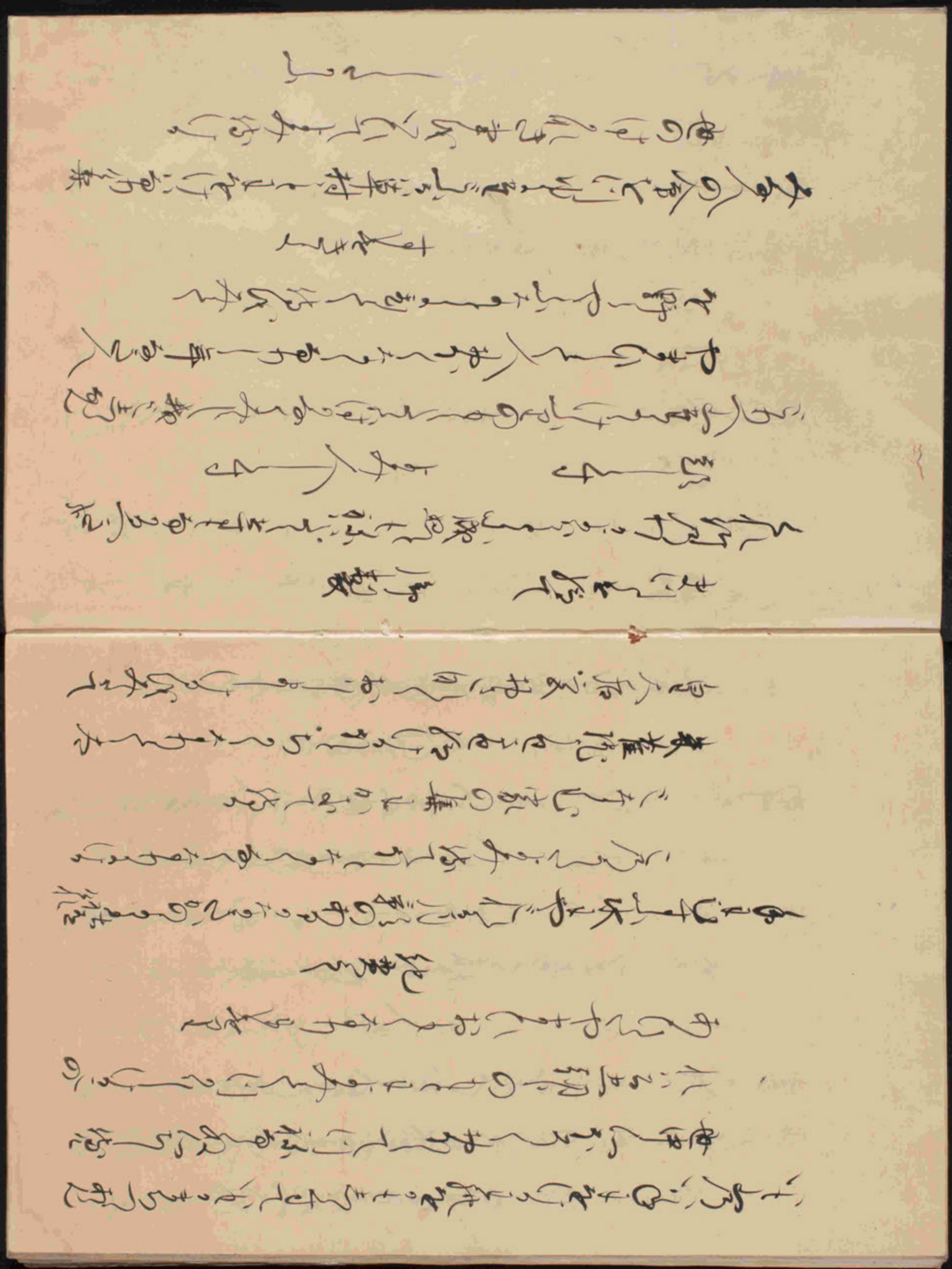
うる世よりあの方とうしご欲つ國のをゝそあるこゝろすれ
うみをて内にとゝもをみこのるくなりく
又の年りくゝこゝいをきて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

じまこよをくしたとへはて
うゐるうゑきてとのゆふ方をとうやうよ水のあ水
ゑゝ——すよみ人しらす
世中ハくるしくてもてくいてやうすむこすま
きたいのうゑへなすくるりて後よをなけう
さう浪やたゝりてあつゝ雨ふりかゝ川とのゝ水ふ水ふ水ふ
さゝ水ふ乃さみ水のしほていとやのかた
てなくゝるりふ人をみくく
おきい浪ふうゝあゝ水をあふこのゆふくゝまりてゐしる
紀友則ゆふ雨ふりよけるよふ
川ふねき
ゆふ立てゝ世中ハ方ゝ言ゆまゝ乃ふ人ゝてゐるゆふ
ゆふ立ふ人のうゝとゝゆふ所ふくよふ
義ゝゝて世ゝ乃ふ世中ハ川ゝゆふ人おゝ
ゆ乃ふ立ふ海ゝ後ゝ立てよふ
人九
家ゝいきてふゝやをみ世ふこのうたをもふいとゝ枕
雨ふゝ乃ふ山ゝゆふてゝ世水のみるとのとくふ水ゝ
いもゝよ海ゝくるゝ乃ふ海ふのうみて



年ゆきて人のみなれぬる所のすまひのみぐるしう
なりぬるを
沙弥満誓

よの中にあるかたきとてこの月ねぐらを漕ぎ出でぬ
恋慕南山の麓の民の子死人をは師のみ給て
なりぬるをかきくれるをみて
源相方朝臣

ぬばたまの黒髪をしぼりをしぼりこんだん
ぬ
續人しらず

山ちかくわがいの鶴人なれぬ
法師はものしらでいくけるほどに書けりけ
る
慶滋保胤　大内記

うき世にぞものしらでふるほどにあまたのものの
ぬ
よみ人しらず

世中は年の車のめぐりあひ
法師はものしらでいくけるこの書のはしに
めぐりあひ書をみて書けり
藤原高光

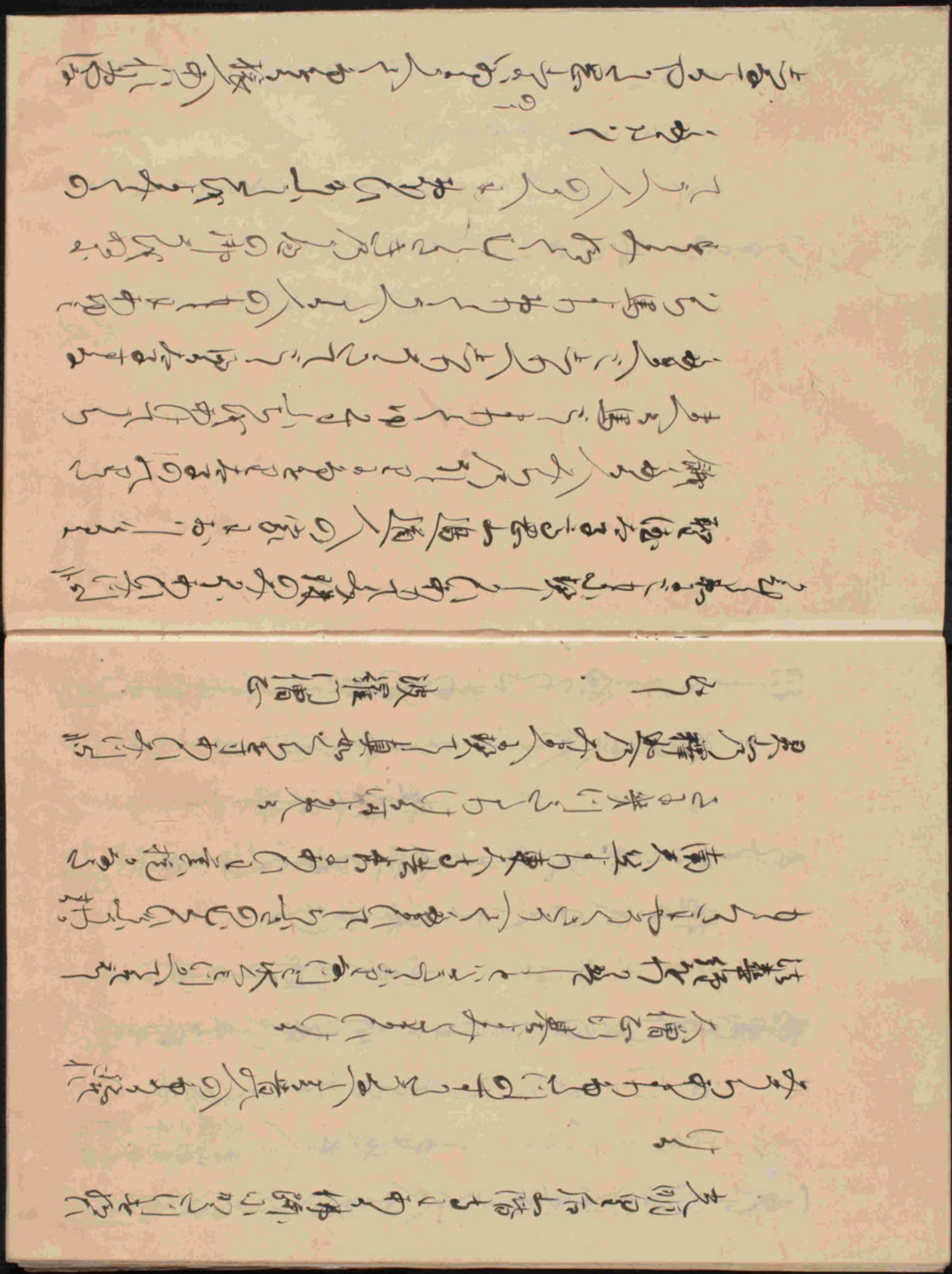
世中はあるかはけるの白雲の行方もなしとて
服はかけりてつあひはてかけるあのと
にぬりぬべきてけりけり

墨染の色ふかくしのこと思ひをうるとなくしく人とあり
ける
よみ人しらず

墨染の衣ぬぎかへなりぬるうきよをしきる色もうきをけり

成信卿家ら出家しはしける比左大弁行成
うちとのつかはしける 成信 長保元年正月廿五日出家 東宮 長保元年正月廿五日出家

右兵門督忠
おもひしらぬ人とのありけるせ中をいかにしてすくれる
ものとなる賀のくに出家しはてしつのり
を上賀のくに出家しはてしつのり

さうぞくや上つかたのいかにしてすくれる
女院御八講捧物
ほとゝぎすかけ
まつ月くすみ月の色なれはなほあはれ
天暦御時故きさいの宮御賀をせはべる
らくはけるに文を作れはやうのまき
をしらく御詩頌おこなはせけるは
御製
いかにして君のこゝろをしるべきの
為雅朝臣普門寺に修養しはべる文の日

これをきかんとて法師けうくまの
よ所にておけるものみしらけれ
春宮大夫道綱母
きくとなる事はなれる月にはるかすみ
左大将師時白川にて読経をきゝけ
寶方初夜
ふかきやまの人家にすまゝほのぐらき仏
ねこゑのゆかけるかたをみるにはる
をゝしなる物とおもわけるかの花
うしろ向きてよみおけり
初夜はまもなくあけぬるあはいまとなりてを地蔵
性空上人乃ゝとよみくはけり
雅頼女式部
くるゝより晴るゝまもなくたてをしの月
極楽院はいてよみおけり
仙慶法師
極楽はちかきにはあらしきしてはいまこそ所なれ
市門よかきはけるく
そ也上人　天録三年九月於東山西光寺入滅
一ゆして南無の法華仏二人の蓮のうへのりあはし